
STRAY GEMINI

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STRAY GEMINI

【Nコード】

N3868D

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

とある街の片隅で行われた剣術大会で優勝した少女の元に現れたのは王国の騎士。それをきっかけに過去が明らかになった時、双子は自分たちの出生の真実を知ることになるのだった。選択肢は二つだと思っていた。逃げるか、迎撃するか。でも、三つ目の選択肢を知った時、僕らの前には未来への道が拓けていた。

―― はじまり ――

「えーいつ！」

青空の下、少女の声が高らかに響いた。

「一本！それまで」

審判が赤い旗を揚げ、少女の勝利が決定した。

少女の対戦相手だった茶髪の若い男性は信じられないといった様子で呆然となり、観客も予想だになかった結果にその場が一瞬静まり返った。

が、次の瞬間には観客席からどよめきと歓声上がり、その中央でたった今優勝を勝ち取った黒髪の少女は嬉しそうに笑った。

大きく利発そうな眼には紫水晶が嵌め込まれている。アメジスト バランスの取れた鼻と桃色の唇とを合わせると誰もが認める美少女の顔になった。年は15を過ぎたくらいだろうか、ポニーテールの黒髪をさらりと風に靡かせて、たった今試合を終えた少女は観客席の最前列に向かってブイサインを送った。

「勝ったわよ、マルコ！」

「すごいや、ミーナ！」

その先にいたのは同じ年頃の黒髪の少年だ。こちらも金の瞳がはつと目を惹く、切れ長の眼の美しい少年だった。象牙色の肌に興奮のためかうつすら紅が差している。

舗装もしていない大通りの真ん中に作られた、円形の木柵で囲んだだけの簡易闘技場の中央で観客の歓声に応える少女に必死で手を振っていた。

「優勝はミーナ！フォーレス！」

剣術大会を主催した市長が高らかに宣言し激励の言葉と共に記念のトロフィーを少女に手渡した。

少女は嬉しそうにそれらを受け取ると、天高く掲げた。周囲の観客から惜しみない拍手が漏れる。

もちろん先ほど少女に賛辞を送った金の瞳の少年も手が腫れるほどに拍手を送っていた。

M - 1 優勝

大会が終了し、紺のノースリーブとショートパンツでしなやかな手足を惜しげもなく晒してみんなの視線を釘付けにしながら、優勝した黒髪の少女が僕の方へ向かって駆けてきた。

腰に一振りの小太刀のみを携え、ポニーテールを揺らしながら。

息を切らしてたどり着いた少女にすぐ賛辞の言葉を送る。

「お帰り、ミーナ。優勝おめでとう！」

「ありがとう、マルコ」

にこりと微笑んだミーナはトロフィーを僕に押し付けた。彼女の荷物持ちが当たり前になっっている自分はそれを受け取ってしげしげと眺める。

背に二枚の羽根を持つ天使が天を仰ぐ様をモチーフにしたそのトロフィーは太陽の光を受けてきらきらと金色に輝いた。ここセフィロト国で崇拜されている天使の一人を象ったものだ。峻厳の天使力マエル 彼は炎を自在に操るという。

「すごいやミーナ。大人のヒトだってたくさんいたのに、本当に優勝しちゃうなんて」

「当たり前じゃない、あたしが誰に負けるっていうの？」

自信満々のミーナはすごく輝いて見えた。額に浮かんだ汗を軽く拭つて、にこりと周囲を取り巻くヒトに微笑んだ。

すると人々が一気に僕らの周りに押し寄せた。

皆口々に優勝者への賛辞を送る。

「おめでとう、ミーナ！」

「すごいね、ダントツで強かったじゃないか」

「ありがとう」

中には初戦で敗退してしまった同い年の少年たちも混じっていたが、その顔に妬みや嫉みの色はなく、純粹にミーナの優勝を喜んでいる者たちばかりだった。

中でもひとときわ体の大きい少年剣士ジャックが嬉しそうに言う。

「これで騎士への道も開けたんじゃない？」

彼は3回戦まで進んだものの、さすがに大人の剣士と対戦し、惜しくも敗退した。

「まさかあ」

ミーナがあつさりと否定すると、初戦で敗退してしまった小柄なアレックスが力を込めて言い返した。

「でもこの剣術大会はエヴィル王の側近が見に来ているっていう噂もあるんだぜ？」

「噂は噂でしょ。こんな小さな大会をそんな偉い人が見に来るはずないわ」

ミーナの言葉にはいつも遠慮がない。

そんな隠さないところはとても好きだけれど、もう少し相手に気を使ったらいいのになあ、と落ち込んだ顔をしたアレックスを見て思う。

そこへジャックが言い加えた。

「でも去年優勝した隣のニールって奴は騎士団に入隊したらしいじゃないか」

「それはきつと自分で騎士団の入団試験を受けたんでしょ。この剣術大会で優勝するくらいだったらわけないはずだわ」

それを聞いてアレックスがこぞとばかりに叫ぶ。

「じゃあミーナも入団試験受けたらいいじゃないか！」

「あたしはいいの。この街が好きだし、父さんの跡を継いで剣術道場を続けるのよ」

そうだけ？

思わず首をかしげて問う。

「あれ、でも、ミーナ本当は騎士になりたいんでしょ？」

ずいぶん前にそう言っていた気がするけど。

と、その瞬間ミーナの拳が頭に炸裂した。その衝撃で目の前がチカチカした。

痛む頭を押さえて抗議する。

「いったあー！ 何するんだよ、ミーナ！」

「変な事言うからよ。あたしは父さんの跡を継ぐの。もう決めたの！ だってマルコじゃ無理でしょ？」

「無理じゃないよ。僕だつてがんばって稽古してるんだから」

それを聞いてアレックスがそばかすの散った顔をくしゃりとゆがめて笑った。

「そうだな、この辺でミーナと剣術で張り合えるのはマルコぐらいだもんな」

ミーナは腕を組むと、愛らしい紫の瞳を歪めてぶつぶつと言った。
「確かに剣の腕だけなら認めてもいいけど……マルコはボーっとしすぎてるのよ。強そうなのは顔だけなんだから」

こちらをちらりと見ながら言う。

それはよくヒトから言われることだった。涼やかで無口な印象の切れ長の眼と裏腹に、僕は少しばかりぼんやりしすぎているらしい。そんなこと自分で思ったことは一度もないのだけれど。

でも、それはミーナにも言えることだ。思わず見とれてしまうような美少女の容貌に似つかわしくないエネルギーに満ち溢れた少女なのだから。

「ミーナが優しそうなのも顔だけだね」

「うるさいっ！」

正直に言葉にしてしまつて、鉄拳が振舞われたのは言うまでもない。

取り巻く人々から笑いが漏れた。

ミーナと僕はどちらも16歳、同じ日に同じ親から生まれた双子の兄弟だった。どちらが年上ということはない。両親がそういう方針で育ててくれたおかげだ。

いずれにせよ、ずっと一緒に育ってきたミーナが自分に一番近い存在だという事に変わりはなかった。

そのミーナは大きな瞳をきらきらさせてにこりと微笑んだ。

「そんな事より早く父さんたちに知らせましょ！」

「うん！」

二人で取り巻きの人々に手を振りながら家路を急いだ。

M - 2 報告

街の外れにある家まで二人で走った。それほど距離はないのに、すぐにでも両親にミーナの優勝を知らせたくて仕方ない今は少しばかり遠く感じてしまう。

舗装されていない細い道を家へと急ぐ。

木をしつかりと組んで作られた家の扉を慌しく開け放つ。

「ただいま！」

入ってすぐのリビングキッチンで夕飯の支度をしていたらしい、ウェーブのかかったこげ茶の髪を結い上げた女性が迎えてくれた。目じりや口元に皺が見え隠れしているが、顔立ち自体はよく整っているとても美しい、自慢の母親だ。

飛び込んできた僕らを見て一瞬驚いた顔をしたが、すぐにふわりと微笑んでくれた。

「お帰りなさい、二人とも。大会はどうだった？」

「もちろん優勝よ、母さん！」

ミーナが得意そうに言って、僕は手にしたトロフィーを差し出した。

「すごかったんだよ！ ミーナってば準決勝で倍くらいありそうなおじさんをふっ飛ばしてさあ！ 決勝のヒトだって強そうな男のヒトだったのに、一撃でやつつけちゃった！」

「まあ、すごいわ。おめでとう、ミーナ」

母さんはミーナと同じアメジスト紫水晶の瞳に優しい光を灯して柔らかに微笑んだ。

褒められて照れたように笑ったミーナはきよろきよろとしてから尋ねた。

「父さんは？」

「隣の道場よ。すぐに報告するといいわ。きっと喜ぶから」
「うん！」

都市の中心部から少し外れた場所に父さんが開く剣術道場がある。アレックスを始めとした街中の少年少女が通う評判の道場だった。家の隣に木を組んで作った稽古場がある。家よりも広い面積を占めるその稽古場は天井も高く柱もない大きな空間を有している。

ミーナに負けないように稽古場に駆け込んだ。

「父さん！ ミーナが優勝したよ！」

扉を開けるなり叫ぶ。

あたしが言いたかったのに、とミーナが口を尖らせた。

その様子を見て父さんは優しげに微笑んだ。

今年で50歳になると言うのに未だ若々しさを残した父さんが僕もミーナも大好きだった。この道場主である父さんは優しく、時に厳しく弟子たちに剣術を教えている。

父さんの金の髪と翡翠^{ジェイド}の瞳はまるで本物の天使みたいだと二人でいつもこつそりと言い合っていた。

金髪に緑翠の父さん、茶髪に紫の瞳の母さん ミーナの紫瞳以外、黒髪に金目という両親と全く共通点のない容姿は小さい頃からからかいの対象だった。もらわれっこ。拾われっこ。そんな言葉何度聞いたか知れない。

大きくなった今そんな事を言う奴はいないが、逆に大人の声が聞こえてきた。何処から引き取ったんでしょね、戦争孤児かしら、かわいそうに、両親に捨てられたのね。

18年前に終わりを迎えた戦争は、あちこちにその爪あとを残した。僕らが住むこの辺りも20年前はグリモワール国の領土だったらしい。しかし、戦争に勝利したセフィロト国は完全に敵国グリモワールの存在を消し、広大な領地を手に入れた。

現に今僕らが暮らす街からしばらく南に進んだところにあるトロメオという都市も昔はグリモワール王国の東の都とも呼ばれる主要都市の一つだったらしいのだが、道路は破壊されたまままだ舗装されていないし、外壁が崩れた瓦礫が周囲の堀を埋めている。裏通り

に入れば職を失った人々が屯する場所だつてある。それだけでなく、新しく土地を支配するセフィロト国によって信仰ががらりと変化した。悪魔を崇拝していたグリモワール王国の信仰は完全に禁止・弾圧され、今では天使崇拜が強要されている。

もちろん戦争で親族を失った人々は多く、戦争孤児と呼ばれている世代は僕らの年くらいからずっと上の年齢まで様々だ。きっと僕とミーナもその戦争の影響で両親に捨てられた戦争孤児の一種なんだろう。戦後の生活が苦しくて子を手放す親は多かったと聞いている。

父さんも母さんも何も言わなかったけれど、何となく分かっていた。

それでも無類の剣の腕を誇る父さんは僕とミーナの自慢だった。

「おめでとうミーナ」

「ありがとう、父さん！ 頑張ったのよ！」

ミーナは誰に褒められたときより嬉しそうに笑った。その黒髪を優しく撫でた父さんは、僕の方を見て尋ねた。

「マルコは出なかったのかな？」

「うーん、僕はちよつと。ミーナと戦いたくなかつたし」

「何よ、あたしとじゃ勝負できないって言うの？」

ミーナが眉を吊り上げた。おつと、怒らせるつもりはなかつただけだ。

でも、ミーナが相手じゃもう本気で戦えないから……などと言えばまた拳骨を食らうに決まっている。マルコの癖に生意気！なんてさてどうしようかと思っていると、父さんは僕の頭にもぽん、と手を置いた。

「じゃあ今日はダイアナに頼んでご馳走にしてもらおうか」

「やったあ！」

ダイアナ、というのは母さんの名前だ。幾つになっても仲のよいこの両親は互いのことを名前で呼んでいた。ちなみに父さんの名は

クラウドという。

今晚のご馳走に思いを馳せながら、元気な双子の相方と優しい父さんとそろって道場を出て、温かな母さんの待つ家に戻って行ったのだった。

R - 1 訪問

剣術大会から一夜明けた午後、道場に稽古に来た少年たちの話題は昨日優勝したあたしのことを持ちきりだった。十歳に満たない子供から二十歳近い青年まで様々な年齢の者たちがこぞって褒め称えたけれど……。

昨日から賛辞ばかりで辟易していたから、道場生を振り切って外に抜け出した。

外に出ると春の温かい風が出迎えてくれた。

思い切りその空気を吸い込んで、大きく伸びをする。

「ああ疲れた！ みんな騒ぎすぎなのよ」

「でも楽しそうだったよ？」

誰もいないと思って腕を伸ばしたのに、上から声が降ってきて驚いた。

見ると道場の屋根に足をぶらぶらさせて座る黒髪金目の少年がこちらを見下ろして微笑んでいた。

靴も履かずに7分丈のズボンから裸足の足が飛び出している。身長は2年前に抜かれてから差をつけられるばかりだった。父さんの身長を抜いてしまうのももうすぐだろう。

さらさらの黒髪に黒猫のような金の瞳がおさまる切れ長の眼。背もすらりと伸びてきて顔立ち端正と来ている。

惚けてるくせに見ただけはいいんだから、街の女の子たちの注目の的になっていることを知らないのはマルコ本人だけだ。

「またそんなところに上って」

「へへ、ここ僕の特等席だから」

マルコの身の軽さは父さんの折り紙つきなのだが、いつも屋根や木や高いところを見ると上る癖があるようだった。

特に道場の屋根はお気に入り、稽古をサボってはいいつも特等席に座っていた。

そんな時のマルコは楽しそうで、あたしとは少し距離が出来たみたいに思えてあまり好きではなかった。それを父さんに言うと、『マルコにはきつと私たちには見えない何かが見えているんだよ』と優しく微笑んでくれた。

マルコの金の瞳に映る世界はどんな風に見えているんだろう？
あたしには一生分からない気がする。

「あ。誰か来たよ」

唐突にマルコが言つて、家の前を通る道を指差した。

振り返ると見たことのない人が家の門の前に佇んでいた。あたしやマルコより少し年上だろう、美しいというよりは男前と言ったほうが通用するようなその顔立ちからは幼さが抜けており、完全に大人になった者の表情をしていた。

「こちらはフォーレス様のお宅でよろしいですか」

「ええ、そうですけど。父に用ですか？」

「いえ、先日剣術大会で優勝したミーナ」フォーレス様に用があつて参りました。ご在宅でしょうか」

「ミーナはあたしですけど」

アクアマリン
蒼水星のような瞳をしたその人の服は普段街の人が着ているものとは様相が違う。白地に金の模様が描かれた胸当てに銀の脛当て、腰には一般人が持たない剣を差している。白いマントが風に翻った。

そう、その姿はまるでトロメオで行われた祭りのパレードで見た騎士のように……

どきりとした。

屋根の上からマルコが降ってきた。数メートルはある高さから飛び降りたというのに、軽い音を立てて着地する。

それはいつものことだったが、その男性にとっては驚くべきことだったようだ。

アクアマリン
蒼水星の瞳を少し大きくしてマルコを上から下まで観察した。

「君は？ 剣術大会には出場していなかったようだが、ずいぶん身

が軽いんだね」

「僕はミーナの兄弟だよ。マルコ・フォーレス。よろしくね！」

どんな時も自分のペースを貫けるマルコの性格は正直羨ましい。
でも、もう16歳になったんだから敬語はいくらか覚えたほうがいいだろう。

「どうしたんだい、ミーナ、マルコ」

その時父さんが道場から顔を出した。

「初めまして、ミーナ・フォーレス様のお父様でいらっしやいますか」

その男性を見た父さんの表情がはつきりと強張った。

父さんがこんな顔をしたのは覚えている限り最初で最後だった。

何かが始まるうとしている。きっとそれは父さんが望んでいないことなんだ。その時あたしに分かるのはそのくらいだった。

不安な気持ちを抱えてマルコを見ると、いつものように能天気
に笑ってくれたせいで少し落ち着いた。だから、マルコと一緒にい
ればきっと大丈夫だ。そう何の根拠もなく安心する事が出来たのだ。

父さんは弟子たちを皆帰らせて、尋ねてきた男性と二人道場に閉
じこもってしまった。

いったい何を話しているんだろう？

気になって仕方がなかったけれど母さんが、父さんに任せておき
なさい、と言ったからマルコと二人でじい様の所へ出かけることに
した。

じい様はうちからそう遠くない場所に独りで住む老人で、戦争の
話だとか古い伝説だとか、いろんな事をよく知っていた。あたした
ちの住む土地は昔、グリモワール王国が支配してらしいから、じい
様は今でもグリモワール王国に思い入れがあるんだろう。18年前
に滅んでしまったグリモワール王国について特によく話してくれた。
しかし今ではセフィロト国が支配する土地だ。あまりグリモワール

ル王国のことはおっぴらに話せない。天使崇拜が基本のセフィロト国で、それでもじい様はこっそりとあたしたちに悪魔の話をしてくれた　グリモワール王国が悪魔を崇拜していたから。

おかげで悪魔が野蛮で天使が至高の存在だという偏った一般常識に染まることだけは避けられたけれど、とても外で口に出すことは出来なかった。

そんなじい様は世間の人たちから疎ましがられていた。でも父さんや母さんはじい様ととても仲がよかったおかげであたしたちもよく遊びに行っていたのだった。

R - 2 悪魔

じい様の家にノックもせず入ると、じい様はちょうど占いの最中だったようだ。

占いに使う天文盤はグリモワール王国時代のもので、見つかったらおそらく罰せられてしまうだが、じい様は占いをやめなかった。それは精一杯示した些細な抵抗だったのかもしれない。

「邪魔しちゃった？」

ローブから除く褐色の肌の腕は折れそうに細い。皺の奥の蒼い瞳は未だ光を失っていないかったが寄る年波には勝てないのだろう、ここ数年動作が緩慢になってきていた。

「いや、構わんよ。よく来たなラスティミナ、マルコシアス」

本名で呼ばれると少しくすぐつたいような感覚を覚える。

というのも、ミーナというのは愛称であたしの本当の名前はラスティミナ「フォーレス」というのだ。マルコの名も本当はマルコシアス「フォーレス」。普段は名乗らないから街のみんなはミーナとマルコというのが本名だと思っているだろう。

だがその方が都合がよかった。

実はマルコシアスというのは 悪魔の名前だったからだ。

「あのね、ミーナが剣術大会で優勝したんだよ！」

「またもマルコに言われてしまった。あたしが言いたかったのに！」

「ほう、それはすごいな。さすがはクラウドの娘だ」

「ありがと、じい様！」

じい様のうちにはたくさん本があった。奥の方には隠すようにして悪魔の本も置いてある。もし見つければどうなるかなんて火を見るより明らかなのに。

その本によるとマルコシアスというのは魔界でも屈指の剣の使い手で、優しくも厳しい心を持ったすばらしい戦士だという。本の挿絵のマルコシアスは凛々しい剣士の姿をしており、いつもねじが一

本抜けた様なマルコ本人とは似ても似つかなかった。

あたしはその悪魔のマルコシアスがとても好きで、何度も何度も開いたそのページには折り目がつくほどだった。

「じい様、悪魔の本を見てもいい？」

「あまり大声で言うでない。誰が聞いているか分からんのだぞ。己一人なら構わぬがお前たちまで巻き込んでしまつてはクラウドとダイアナに申し訳がたたん」

「だいじょうぶだよ、じい様」

マルコも続いて書庫に飛び込んだ。

二人で奥から本を取り出して学校では習えない知識を頭に入れるのが常だった。じい様が思い立ったように悪魔の逸話を語ってくれたりもする。

今日は3人の悪魔を使役した天文学者、アレクスター・クロウリーについてだった。

18年前に終結した戦争の真つ最中の話だ。おそらく20年ほど前の話だろう。

当時の国家天文学者アレクスター・クロウリーが戦場となつていた城塞都市トロメオに到着して最初の戦闘で、セフィロト軍はなんと空から襲来した。

まさか空から奇襲を受けるとは思っていなかったグリモワール軍はその予期せぬ事態を受けて混乱に陥ろうとしていた。

ところが戦の悪魔ハルファス、マルコシアス、武器の悪魔サブノックの3人を使役していた天文学者、アレクスター・クロウリーはうるたえる軍の先頭にたった一人で降り立ったのだ。武器の悪魔サブノックが鍛えたといわれる彼の愛剣をまっすぐセフィロト軍に突きつけ、長いストレートの黒髪を風に靡かせて一人でセフィロト軍に立ち向かった。

そして悪魔を使役する天文学者「レメゲトン」として戦の悪魔ハルファスの使う風を操り、何千もの軍を相手に彼が圧倒的勝利をお

さめ、セフィロト軍は彼一人の前に敗走を決める結果となつてしまつたのだつた。

「一瞬にして数百の騎馬隊が風に舞い、まるで木の葉のように吹き飛ばされた。アレイスター・クロウリーの操る凄まじい豪風に草木は根こそぎ折れ、地面は抉れたという」

そんな昔話をじい様はまるで見てきたように臨場感溢れる口調で語つて聞かせてくれた。

「戦の悪魔ハルファスはそれまで契約者を幾人も葬つてきた扱いづらい悪魔だつた。が、アレイスター・クロウリーはほんの短い間に悪魔を支配下に入れてしまった。悪魔との親和性が並外れておつたというわけだ」

「……素敵ね」

じい様の話に何度も出てくるアレイスター・クロウリーという天文学者は悪魔に愛されていると言われるほどに美しい容姿の持ち主だつたらしい。すらりとした長身、腰まで流れるストレートの黒髪、そして美しい紫水晶アメジストの瞳。

あたしはいつしか自分と同じ瞳の色をした彼に憧れるようになっていた。

「やっぱりアレイスター・クロウリーが一番ね。彼の使役したマルコシアスもかつこいいし！ とてもマルコと同じ名前とは思えないわ」

「しょうがないじゃん、僕は人間なんだから」

「そこは問題じゃないわよ」

思わず突っ込んでしまった。このぼんやりした性格を何とかした方がいいと言いたいのだ。

「でも僕はどつちかと言うとフラウロスが好きだよ。灼熱の毛並みの豹なんて、かつこいいじゃん」

「フラウロスは怖いもの。気に入らない使い手を焼き殺してしまつたり……同じ炎なら天使のカマエルの方がいいわ」

こんな風に天使も悪魔もなく自分のお気に入りを主張できる場所
はここだけで、また主張できる相手もマルコ一人だけだった。

こんなことを出来るのは幸福なことだと分かっていた。たとえ一
生使わない知識だとしても、知らないのと知っているのでは大違
いだ。戦争が終了して18年、あたしは生まれる以前の歴史を知る
事が出来た。それだけで世界が違って見えるのだ。

それを許してくれた父さんと母さん、それに実際知識を与えてく
れたじい様、それから共に学ぶマルコ。

あたしはとても幸せな16歳だった。

どのくらい幸せかと言うと、悪魔については人よりずっと知っ
ていたくせに自分の出生について何も知らず、また知らなくていい
と思い込んでいたくらいだ。

R - 3 事実

じい様の所から家に戻ると父さんと母さんがあたしとマルコを呼んでリビングのソファに座らせた。

いつになく不穏な空気が流れていて、思わず緊張した。

先ほど訪れていた知らない男性はいつたい誰だったんだろう？あの様相からするとセフィロト国の騎士のようだったが。

「ラステイミナ。マルコシアスも、よく聞きなさい」

父さんが本名で呼ぶのはとても久しぶりだった。

「大切な話がある」

「どうしたの、改まって」

あたしはマルコと二人顔を見合わせる。

父さんは困ったように笑うと首をかしげながら言った。

「うーん、何から話していいのか私にも分からないんだ」

「何だよ、それ」

隣に座ったマルコがけらけらと笑う。

こいつにはこの重苦しい空気が分からないのだろうか。

「でも二人とも言葉が理解できない年でもないだろう。これから言うことはすべて本当だからとりあえず聞いて欲しい。分からない事があつたらすぐに聞くといい」

父さんはそう前置きしてから、ゆっくりと話し始めた。

「まずは最初に、18年前の戦争のことを話さなくてはいけない。

セフィロト国は今も昔も天使を崇拝してきた。それは国に使える神官が天使を召還し、その力を借りる事が出来るからだということは知っているね」

「うん、それは知ってる」

実際にその神官に会った事もないし天使を見たこともなかった。

けれど、『セフィラ』と呼ばれる神官が天使を使役するというのは、

学校でも最初に習う一般常識だ。その神官は王に次ぐ位を持っている。

メタトロンに始まり、ミカエル、サンダルフォンまでを含む全部で10人の天使。それを司る10人の神官　王都に在るという彼らは全国民の憧れと崇拜の的だった。

「じゃあグリモワール王国のことは知っているかしら？」

母さんの言葉にマルコと二人、こくりと頷く。

じい様のおかげで同じ世代の子供たちに比べれば飛びぬけた知識を持ってしていると胸を張って言えた。

「老師に感謝しなくてはいけないな。すぐ本題に入れそうだね」

そう言って笑った父さんはいつもと変わらないように見えた。

それなのに、父さんはまるで冗談を言うような口調でさらりと続けた。

「きつと賢しいお前たちのことだ。もうとつくに気づいているだろうが、ダイアナも私もお前たちの本当の両親じゃない」

「……突然だね、父さん」

あまりに突然の軽い告白に隣のマルコは思わず笑ってしまったようだ。

あたしは……反応できなかった。

確かに何となく気づいていたことではあるが、はつきりと父親から宣告されるのは16歳の少女にとっては衝撃的すぎたからだ。

その困惑が伝わったのか、父さんも困ったように笑い返してくれた。

あたしはとても混乱していたけれど、必死でその心臓を落ち着けて父さんの言葉に耳を傾けようと努力した。

でも、父さんはまたも突拍子もない事を言い出した。

「きつと最初に言っておくべきことは、ミーナとマルコの両親がグリモワール王国でも非常に高い地位に在る人達だったということだろっ」

「！」

「ああ、だから僕の名前は悪魔のマルコシアスと一緒になんだね」
マルコはいつもと変わらないのんびりとした口調で納得した。
信じられない図太さだ。こいつの心臓にはきつと毛が生えている
に違いない。

「そうだね。両親は君にマルコシアスのように強い心を持って欲しいと願っていたんだろう」

心の準備はしていたはずなのに全くついていけなかった。

ああもう、今日はいつたい何度衝撃を受けたらいいんだろう？

あたしの心臓は果たして耐えられるんだろうか。

頭を抱えていると、父さんはにこりと微笑んだ。

「それでは要点だけ話そう。二人の両親はセフィロト国と実際に戦場で交戦し、セフィロト国軍に甚大な被害をもたらした。それこそ伝説に残るくらいにね」

伝説　そう言われて、一瞬どきりとした。

「しかし二人の両親は重傷を負い、生死不明とされて第一級のお尋ね者として指名手配されたんだ」

「……その口調からすると、僕らの両親は生きてるみたいだね」

マルコがそう言くと、父さんは困ったように眉を寄せた。

「全く、マルコは相変わらず変なところで鋭いな……そうだよ、確かに二人の両親は生きている。だが、これだけは勘違いはしないでくれ」

「なあに？」

「両親は、君たちが嫌いだから捨てたわけじゃない。ある任務のためにあちこちを飛び回っているんだ。何より、お尋ね者だから一所に留まるわけにはいかない。まだ幼かったミーナとマルコを連れて行くわけにはいかなかったんだ」

そう言われても、なかなかピンとこなかった。

何より、あたしとマルコの両親は父さんと母さんだけだ。本当の、と言われて預けられた、と言われて、それでも仕方なかった、と言われてもなんだか他人事のように聞こえた。

「わかったわ、父さん。でも、その前にどうしてその……あたしたちを引き取ったの？」

それには母さんが答えてくれた。

「あなたたちの父親が私の弟なの。つまり私にとってあなたたちは血縁関係で言うとな本当は甥と姪にあたるわけね」

「ああ、だからミーナの瞳の色は母さんと一緒なんだね」

「そうよ。弟の瞳も紫だったわ」

その言葉にどきりとした。

紫の瞳。あたしと同じ色。ずっと憧れてた、伝説上の天文学者^{レメケト}。

「じゃあ母さんたちもグリモワール王国の要職にいたんじゃない？
その、僕たちの生みの親だって人の血縁者なんだから」

「ふふ、クラウドはね、グリモワール王国の騎士団長だったのよ」
母さんは嬉しそうに微笑んだ。

「騎士団長?!」

あたしは思わず口をあぐりと開けてしまった。父さんが強いのは知っていたけれど、まさか騎士団長だったとは!

「昔の話だよ。でも、ミーナが騎士になりたいと言ったときは流石に驚いたけれどね。これは血かと思ったよ。いや、血の繋がりは全くないんだけどね」

そう言っ て父さんは楽しそうに笑った。

いや、そこは笑うところではない。普段から父さんは何事にも動じなくてすごいなあと尊敬していたのだけれど、もしや神経が図太いだけなのではないだろうか?その点ではマルコとてもよく似ている。

血縁関係はないけれど? ああ、それはもういいのよ!

完全に混乱してしまった。

「話を戻そう。とにかく二人の両親はセフィロト国から追われる立場にあるのだ。そして問題なのは、二人がその両親に生き写しの容姿をしていると言う事実なんだ」

あたしとマルコは思わず顔を見合わせた。

物心ついた時から隣にいた顔だ。目を閉じたって思い浮かべる事が出来る。

性格に似合わない切れ長の眼とそこにおさまる黄金の瞳、黙って座っていれば美少年だと絶賛してもらえる端正な顔立ち。象牙色のすべらかな肌は男にしておくのがもったいないくらいだ。

「ミーナなんて出会った頃のラックにそっくりよ」

「ラック……て?」

「あなたの母親の名前よ。とてもかわいいのよ! 本当、瞳の色以外はあなたに生き写しだわ。今も元気にしているのかしら」

「マルコも日に日にアレイに似てきたよ。あ、アレイというのはダ

イアナの弟、つまり本当の父親の名前だよ。その愛想のなさそうな目つきがそっくりだ」

昔を懐かしむように父さんと母さんは目を閉じた。ラックという母親とアレイという父親のことでも思い出しているんだろうか。

これでは話が進まない。

と思っていたら意外にもマルコが先に進めた。

「それはいいけど父さん、どうしてそんな話を急に？ 今日来ていた人と関係あるの？」

「うーん、今日来ていた人というよりは国にお前たちの存在を知られてしまった事自体が問題なのだ」

父さんはそこではあ、とため息をついた。

「何しろ第一級お尋ね者の娘と息子だからね。しかも言い逃れ出来ないほどによく似ている。お前たちの両親を知る者が見ればすぐに分かってしまう。そこで、だ」

どうやらここからがやつと本題らしい。

あたしとマルコはぐつと身を乗り出した。

「この街を離れて欲しい」

「ええっ？」

思わず素っ頓狂な声が出た。ここまで平然としていたマルコもさすがに驚いたようで、二人見事にハモってしまった。

「いや一時的でいいんだ。搜索の手が弱まるまで、少し遠いがカトランジェという街に隠れていて欲しい。そこはお前たちの母親の故郷だからきつとよくしてくれるはずだ」

「カトランジェってどこ？」

「グライアル草原を越えて、ラッセル山を越えたところだ」

「遠いわ！ 馬車で何日もかかるじゃない！」

悲鳴のような声が出た。それはあまりに遠すぎる。

「いつまでそこにいたらいいの？」

「分からない。だが、危険が去ったと思ったら迎えに行くよ。必ず。だからカトランジェで大人しく待っていて欲しい」

父さんの翡翠^{ジェイド}の瞳が真剣な光を帯びた。

あたしはこの目に弱い。どうしても逆らえなくなってしまうのだ。
「分かったわよ。マルコも行くわよね？」

聞くと、マルコはいつになく真剣な顔をしていた。もともと顔立ちは端正で凜としている。真剣な表情をすると近寄りがたい雰囲気をかもし出す。

「マルコ？ どうしたの？」

恐る恐る聞くと、マルコははっとしたように頷いた。

「あ、うん、行くよ」

その瞬間に父さんと母さんの顔が輝いた。

「そうか、よかった。それじゃ、今夜のうちに馬車を手配したから準備してくれ」

「え、今夜？ 急すぎない？」

「その方が都合がいいんだ。いいね、すぐに準備しなさい」

「はい」

仕方がない。きっとすぐに帰れるだろうし、簡単に荷物を用意しよう。

ソファから立ち上がろうとすると、母さんは何処からか小さなオルゴールを取り出してきて、それを目の前のテーブルに置いた。

複雑な紋様が一面に装飾されていた。黒を基調にしたそのデザインはどこかで見た事がある。そう、じい様の家で見た悪魔の本の表紙に記されている悪魔紋章と同じだった。

父さんはゆっくりとそのオルゴールを開いた。

ねじが巻かれていないのかメロディーが流れることはなかった。

「これを持って行くといい」

オルゴールの中から何かの羽根を4枚取り出した。

純白の羽根と、少し根元が黒く染まった羽根がそれぞれ2枚ずつだった。

「お守りだ。それぞれ一枚ずつ持っていなさい」

その羽根はどちらも極上の手触りで、風もないのに手の中でざざ

めいた。

「これ、何の羽根？」

「秘密だ。だが、きつとお前たちを守ってくれるだろう。本物の親からのプレゼントだ。何しろ彼らがお前たちに残したのはこの羽根と、その名前だけだったからね」

ほんの数時間で準備を終えた。荷物はほとんどない。いつも持ち歩いている一振りの小太刀と少ない着替え、それと先ほどもらった二枚の羽根を鞆につめた。動きやすいようにショートパンツと短衣を着て遠出用のごつい皮ブーツを履いた。

マルコもいつもの七分丈のズボンにノースリーブ、お気に入りの黒い籠手をしていた。さすがにサンダルは履いていたが、それすら面倒だと思っているのはよく知っていた。

馬車に乗る前、父さんと母さんはそれぞれ頬と額にキスしてくれた。

「マルコシアスのご加護を」

決して人の前では言えない、悪魔への祈りも込めて。

その加護を受けてから、あたしとマルコは馬車に乗り込んだ。

「ねえ父さん」

マルコは馬車の窓を開けて父さんに問いかけた。

「本当の名前、教えて。父さんと母さんの。それと、まだ見たことない二人の名前も」

「……困った子だ」

父さんはやれやれとため息をついた。

「私の名はクラウド」フォーチュン。元グリモワール王国、漆黒星騎士団の団長だ。ダイアナはダイアナ」フォーチュン。彼女ももと地位の高い貴族出身だ」

漆黒星騎士団の名は、いつだったかじい様の話に出てきた。それは王国で3本の指に入る屈強な騎士団の名だった。

既に滅びた王国ではあるが、それほどの騎士団の団長だったなんて……さらに父さんのことを誇りに思えた。

「だが、残念ながらお前たち両親の名は教えられない。すまないな」マルコは父さんの言葉を聞いて少し悲しそうな顔で微笑んだ。端

正な顔にその表情がとてもよく合っていて壊れそうに危うかった。

「私とダイアナの名も、決して人前で出してはいけないよ。できれば忘れてしまった方がいい」

「うんわかった、ありがとう。父さん、母さん……絶対忘れないよ」
見たことのないその表情に思わずどきりとした。

「行つてきます！」

母さんと父さんはいつもと変わらない笑顔であたしとマルコに手を振った。

あたしも馬車の窓を開けて大きく手を振り返していたのに、マルコは何か考えているような表情で座り込んでいた。

馬車が走り出してからもじつと黙り込んだままだった。

闇の中を走る馬車の中でランプの明かりが一つ揺れていた。マルコの頬には影が落ちていて、整った顔がさらに映えている。

「どうしたのよ、マルコ。眠いの？」

「違うよ」

「じゃあどうしてそんなに黙り込んでいるのよ」

そう言つとマルコの金の瞳が揺らいだ。言つべきか言わざるべきか迷っているのがありありと見て取れる。

沈黙の中で車輪の音だけがやけに耳についた。

苛々して思わず怒鳴ってしまった。

「何よ、はつきりしなさい！」

「わ、分かったよ」

マルコは俯いたままぼつりぼつりと言葉を紡いだ。

「僕の気のせいだといいんだけど……父さんと母さんにもう会えないような気がして」

「えっ？」

予想外の言葉に眉を寄せた。

「だって父さんはグリモワール王国の騎士団長だよ？ 僕らの両親だっていうレメゲトンに負けず劣らずの第一級お尋ね者じゃないか

！

「あつ！」

気づかなかった。本当の両親のことを知らされたショックで、遠い町に移動しなければいけないという切迫感で。

先ほどもからマルコが何か思索に耽っていたのはこれだったのだ。

「僕らより父さんと母さんの方がよっぽど危険だよ。それなのに、僕らを逃がしたのはきつともう逃げられないと悟って僕らだけでも

……逃がそうと……だからこんな夜中にこっそり……」

マルコの声が消え入りそうに霞んでいった。

それと同時にあたしの顔から血がサーッと引くのが自分でも分かった。

何故気づかなかったんだろう。全くその通りじゃないか！

どうして散歩に出るような気楽さで家をでてきてしまったんだろう。王国に狙われるなんて人生を左右するような恐ろしい出来事だというのに。

あたしはそこでやっと事の重大さに気づいた。

王国の追っ手が落ち着いたら、なんてそんな甘い話じゃない。あたしはこの顔をしている限り永久にセフィロト国から追われるという事なのだ。人生全部をかけて逃げなくちゃいけないという事なのだ。

騎士になりたいなんて言っている場合じゃない。

急にすごく怖くなった。

父さんと母さんの元へ帰りたくなった。

「降ろして！　お願い！」

馬車の前面の窓をどんと叩いた。

御者は全く反応する気配がなかった。それでも窓を叩き続けた。車輪の音がかたがたと響いて、街ははるか後ろにまで遠ざかっていった。

M - 3 不安

ミーナに事の重大さを告げた瞬間、彼女は顔面を蒼白にして取り乱した。

馬車を止めると叫び、窓を叩き壁を叩き、拳句の果てになんと馬車から飛び降りようとしたのだ！

「やめてよ、ミーナ！」

慌てて後ろから羽交い絞めにしたけれど、そんなことでミーナが落ち着くはずはない。

剣術と共に古武術も父さんから学んだミーナはむしろ接近戦でその力を発揮する。羽交い絞めにした腕を一瞬でひねり上げ、狭い馬車内で僕をくるりと床に伏せた。

壁に頭をぶつけて気が遠のきそうになる。

でもなんとかミーナの手を離さないでいた。

この手だけは離しちゃいけない。

「離しなさい、マルコ！」

「嫌だ！」

きつと頭がよくてよく気をつく父さんの事だから、僕が気づいちゃいけなかった事にいろいろと気がついてしまった事だって知っていたはずだ。それでも何も言わず送り出した。

だって父さんの翡翠の瞳は僕にこっそりところろ告げていた。

ミーナを頼む、と。

僕の双子の相方は凄まじく強い。剣術大会で優勝するくらいだからその辺の剣士じゃ相手にもならないだろう。それは騎士団長だった父さんの教えと、もって生まれた天賦の才があつてこそそのものだ。でも、その分直情的で考えなしな所もある。時に周りが見えなかったりもする。

僕は確かにミーナに言わせるとボーっとしているかもしれないけれど、彼女よりは周囲を観察しているんな事を考える能力に長けて

いると言えた。

「父さんはすごく強いよ。きっと僕らや父さんたちを捕まえに来る人にだってそう簡単に負けやしないだろう。でも、だからこそ、僕らがいると足手纏いなんだ！」

「でもつ、でもあたしは……！」

「ミーナ！」

ずきずき痛む頭を押さえて起き上がった。

ミーナの肩に両手を置いて、真っ直ぐに紫水晶アメジストの瞳を見つめた。

すでに大きな瞳は少し潤んでいて、頬は激情で真っ赤に染まっていた。

「だいじょうぶ、父さんたちだけなら逃げられるよ。僕らが出来ることがは足かせにならないように身を隠すことだけなんだ」

ゆっくりと諭すようにそう告げると、ミーナは少しだけ力を抜いた。

分かってもらえた。安心してミーナに微笑むと、その頬に雫が伝い落ちた。

「父さん……母さん……」

初めて見るミーナの涙だった。

何かが堰を取り払ってしまったかのように次から次に流れ落ちてくる。

ガラス玉のような雫に僕はすっかり動揺してしまった。まだ幼かった頃、余所見をして馬車と衝突しひどい怪我を負った時だって泣かなかったミーナが大粒の涙を流していた。

どうしようもなく見つめていると、ミーナは倒れこむように僕の胸にしがみついた。

その肩は思ったよりずっと華奢で、強く抱きしめたら折れちゃうんじゃないかと思った。

それでも涙と震えを止めてあげたかったからぎゅっと抱きしめた。少しでも落ち着いてくれるように。少しでも不安が消えるように。

「ミーナ、カトランジェの街で少し落ち着いたら父さんたちの様子

を見に行こう。きっと父さんと母さんが待っていてくれるから」

返事はなかったけれど、ミーナは今すぐ帰る、とも言わなかった。

安らかな彼女の寝顔を見ながら、まだ涙の跡が残る頬にそっと唇を寄せた。

「だいじょうぶ、ミーナは絶対僕が守ってあげるから。」

ミーナを傷つけようとする何者からも。

だって僕らは世界に二人だけの兄弟なんだから。

いつしか周囲の景色は草原に変わっていた。朝日を浴びてさざめく草むらは朝露が光を反射してキラキラと煌いている。

その光は僕らへの加護を祈っているようで思わず微笑んだ。

マルコシアスという名に僕らの本当の両親が込めた願いを思いながら、未来への道のりを思い描きたかった。

馬車は次の日の夜まで走りとおした後、小さな街の宿に到着した。

御者さんはふわりとした茶髪と大きな栗色の瞳をした20歳くらいに見える若い男性だった。年上の女性に好かれそうな柔らかな笑みを湛えているが、腰には長剣を差している。いくらか武術の心得があることは動きの端々からも明白だった。

「宿を用意したから、どうぞ」

「ありがとう」

そう茶髪の青年に礼を言ったミーナはまだやっぱりどこか沈んでいる。

僕も御者のお兄さんにお礼を言うと、ミーナの後を追って宿に入った。

部屋は二つ取ってあってミーナと僕は別れて部屋に入っただけで、考える事がたくさんあって何だか眠れそうになかった。

ベッドにごろりと転がって父さんがくれた二枚の羽根をランプの

明かりに翳してみた。

鳥の羽根よりずっと大きなそれは光に透かすと硝子のように煌く。手に包むと少し熱を持っている気がする。

「天使の羽根？でも、父さんがそんなものくれるはずないよね」

父さんと母さんが今も悪魔を崇拜しているのは明らかだった。口にしなかつたが僕らの両親を今も親愛していることは伝わってきたし、おそらく交流の深いじい様も同じようにグリモワール王国の忠臣だったのだろう。

じい様がこうなることを予想して僕らに知識を与えたという節は、無きにも非^{あら}ず、だ。

僕もミーナも父さんと母さんが大好きだ。たとえ血の繋がりがあろうとなかろうと本当の両親はクラウド〃フォーレスとダイアナ〃フォーレスしかないと思っている。

レメゲトンの両親に興味がないという嘘になるけれど、わざわざ探してまで会いたくはなかつた。僕らを捨てた両親だ。とは言ってもその二人だって国に負われる身なんだから泣く泣く僕らを手放したのだろう、父さんの言うように。

だからって、何で僕らを捨てたんだ、なんて罵る気もない。捨てないで欲しかつたという感情は生憎と持ち合わせていなかった。

いずれにせよ16年前に僕らを捨てた両親よりずっと育ててくれた父さんと母さんの方がよっぽど心配だった。

きつとミーナも同じ気持ちだ。

「父さん」

父さんは強かつた。

最近背も伸びてミーナを相手にするときにはちよくちよく手加減するようになっていたけれど、父さん相手には本気を出したってまだ勝てなかつた。

いつもの優しい笑顔で僕を軽くいなして、強くなつたね、と褒めてくれた。

父さんの翡翠^{ジェイド}の瞳を思い出して鼻の奥がつんとした。

目を閉じて気持ちを落ち着ける。でも父さんの面影は瞼の奥から消えてくれない。

「僕らはいったいどうしたらいいの……？」

カトランジエの街に行く。そして僕らはいったいどうするんだろう。

国から隠れて生きる？ ずっと？ 一生？

父さんも母さんも傍にはいないのに？

馬車の中で口数少なかったミーナを思い出して、唇を噛んだ。もう二度とあんな顔を見たくはなかった。

「分かんないよ……！」

絶望が自分の中で膨らんでいく感覚に襲われて気持ち悪くなる。吐きそうだ。

それを振り切るように目を閉じてベッドに大の字に転がった。

もついい。今日はもう寝てしまおう。

そのまま眠りにつけるかと思ったのに、どうやら下の階が騒がしい。嫌な予感がしたので下りてみることにした。

M - 4 追手

部屋を出ると隣からミーナが顔を出した。

もう眠るところだったらしく、装備を解いてベルトも外し、髪を下ろしていた。

「うるさいわね、寝られないじゃない！」

睡眠を妨害された彼女はひどく不機嫌だった。

こんな時のミーナは危険だ。何をしてくすか分からない。刺激しないように後ろについて静かに階段を下りていった。

宿の受付で騒いでいたのは、昨日の昼に道場を訪ねてきた人と同じ服を着た男たちだった。腰には剣、白地に金の模様が描かれた胸当てをして白いマントを羽織っている。

肩につけた紋章はセフィロト国王家のものだった。

やばい、あれは……。

「何よ、うるさいわね！ 静かにしてよ！」

ええええ！

びつくりして声が出なかった。

なんと隣のミーナが腰に手を当てて男たちを指差したのだ。挑発するような行動を止められず、隣でうるたえる結果となってしまうた。

「眠れないじゃないの。あなた達にあたしの睡眠を妨害する権利、あるのっ？」

「ミ、ミーナ……」

やばいって。あれはどう見てもセフィロト国の追っ手じゃないか！ 白マントの男たちはひそひそと何か呟きあうと、いったん外に出て行った。

宿の主人はほっとしたように扉に鍵をかけた。

「すみませんね、お客さん。どうやらお尋ね者を探しているようで、こんな夜遅くに無理やり入ってきたんですよ。何でも18年前の戦

争でセフィロト国に甚大な被害をもたらした者たちがこの辺りにいるそうだ」

「やっぱりだ！」

僕はミーナの手を掴んですぐ部屋に戻った。

逃げなくちゃ。

「ミーナ、すぐ準備して。逃げるよ！」

「は？」

未だ寝ぼけ眼のミーナは不機嫌そうに首をかしげた。

もう、何でこんな時に！

「さっきのはどう考えたって追っ手だよ。もうここまで来てるんだ。捕まっちゃったら父さんに申し訳が立たないよ！」

父さん、という言葉にミーナは敏感に反応した。

やっと目が覚めたようだ。

紫の瞳をパツチリと開いた。

「あたしたち本当に国に追われるようになったのね」

「悠長なこと言ってる場合じゃないよ！早く！」

いつもと立場が逆だ。普段は僕がミーナにせつつかれていていつの今は僕が主導で動かなくちゃいけない。

荷物をまとめようとした時、階下がまた騒がしくなった。

もう時間がない！

荷物はほとんど捨てて、剣だけ腰に差した。父さんがくれた羽根は籠手の裏に貼り付けてすぐ部屋を飛び出した。

完全に覚醒したミーナも同じことを思ったようで、最小限の装備品を身につけた状態で廊下に飛び出してきた。ベルトに羽根が二本刺さっていた。

「裏口に回るわよ、マルコ！」

いつもの調子が戻ってきたミーナは強い口調でそう指示した。

裏に続く階段を駆け下りようとした時、後ろから抑揚のない青年の声が追いかけてきた。

「どこ行くの？二人とも」

が、振り向く勇気がなかった。声の主が追っ手だという事だけは間違いない。それも、僕の勘からするととても勝てそうにない敵だ。ミーナと二人視線を交わすと、ほとんど飛ぶように階段を駆け下りた。

裏口を飛び出すとすぐそこには茶髪のお兄さんが馬車を用意していた。

僕らが駆け降りてくるのを予測していたのか、後ろの扉を開けてある。

「早く乗って！」

「ありがとう！」

僕らが乗り込むと馬車はすぐ走り出した。そのまますごい速度で街中を駆け抜けていく。

「このままカトランジェへの道を進もう。西へ向かってグライアル草原を抜けて、ラッセル山を越えればすぐカトランジェの街だ」

お兄さんはがたがた鳴く車輪の音に負けぬ張りのある声で言った。

「オレが囷になる。もう少ししたら沼地を通るから、二人とも隙を見て飛び降るんだ。怪我、しないようにね！」

「えっ？」

驚いて聞き返したが、お兄さんはそれ以上答えようとしなかった。覚悟を決めた人の守る沈黙はそれだけで人を黙らせてしまう空気を持つ。

はっとして後ろを見ると追っ手の馬が迫っていた。

「待って、お兄さんはどうするの？」

「大丈夫、オレは追われる身じゃないから」

お兄さんはにこりと笑った。

車輪の音がうるさい。

「お兄さん、どうして僕らを守ってくれるの？ 昨日会ったばかりだっていうのに！」

「……」

僕の言葉にお兄さんの瞳が揺らいだ。

聞き取れるか聞き取れないかそんな小さな声で青年はぽつりと口にした。

「君たちが店長とグレイスの子だからだよ。オレが大好きだった二人の、誰よりも大切な君たちだから。そしてオレに生きがいにくれたクラウドさんとダイアナさんが、誰からも傷つけられないようにと育てた君たちだから」

「店長とグレイスって、あたしたちの親だっという人のこと？ あなたは何者なの？」

「マルコシアスのご加護を。さあ、もう行つて！」

お兄さんはそれ以上続けずに僕らを促した。

追手の馬はもうすぐそこまで迫っていた。もう一刻の猶予もない。「ありがとう、お兄さん。必ずカトランジェで会おう」

まだ何か聞きたそうなミーナを抱えて僕は馬車から飛び降りた。

M - 5 騎士

柔らかい沼地の泥がクッションになって僕らを包んでくれた。ぐちゃ、という音がして泥が体にまとわりつく。そのままいくらか地面を転がって、泥の中に埋まるようにして体が止まった。

馬車が遠ざかる間ミーナの口を手で塞いでじっと息を潜めた。そのまま草陰に息を潜めていると、追っ手の馬が遠ざかっていく音がした。

ふうと一息ついてミーナの口に当てていた手はずすと、案の定マシンガンのように攻撃が始まった。

「何するのよ、窒息するじゃない！ しかもドロドロ……最悪！ この服お気に入りだったのよ、母さんが誕生日に作ってくれたの！ それにあのお兄さんが！ 困だなんてあたしが許さないわ！ 一人で敵をひきつけて……」

ミーナはそこまで言う唇をひき結んで立ち上がった。泥のついてしまった服をパタパタとはいたが、あまり取れなかったようだ。紫の瞳には怒りと共に強い意思の光が灯っていた。

「行くわよ、マルコ」

「え？」

首を傾げて双子の相方を見上げると、彼女は目を吊り上げた。

「お兄さんを助けに行くの！ 当たり前でしょ！」

「えええ？ どうして？ たった今あのヒトが僕らを逃がしてくれたのにわざわざ敵の中に突っ込むような事するの？」

「マルコ、これだからあなたは父さんの道場を継げないって言うてる。人に助けられて、どうもありがとうございましたのうのと生きていくなんて、そんな風に簡単なもんじゃないでしょ？」

それはそうだと思うが、この場合僕はミーナを最優先したからこういう結果になったわけで。

お兄さんよりもミーナの方が大事だった。追っ手の事が分かっていて父さんたちと別れたのも僕がミーナを一番に考えたからだ。

僕が一番はいつだってミーナだったのだ。

「あたしたちは剣士よ。周囲の人を守りたいって思うのは当たり前
の感情じゃない」

「守りたい？」

「そうよ。あなたは執着がなさ過ぎるの。今にも手の中の物すべて
捨ててどっかにいっちゃいそうな気がするわ。もっと人を大切にな
さい。それは剣士にとって最も大切なことよ。鍛錬と思考能力だけ
じゃない、強い剣士に必要な強い願いというものがあなたには欠け
ているわ」

「だったら僕はミーナを守りたいよ。ミーナを傷つける何もかもか
らミーナを守りたい。ミーナさえいればそれだけでいいんだ」

正直にそう言つと、ミーナは目を丸くした。

僕は何か変なことを言つたかな？

「ありがとう、マルコ。それはとても嬉しいわ。でもあたしは強い
の。守ってもらわなくなつて自分で自分の身を守るわ」

それは違つよ。ミーナは強いけど、それでも傷つくことだって辛
い事だつてある。

街を離れた昨日の夜のミーナの涙が、目に焼きついて離れなかつ
た。

それでもミーナはあの時の泣き顔から想像もできないくらいに強
い瞳をしていた。まるで小さい子供に言い聞かせるようにはつきり
と言葉を紡いでいった。

「マルコは強いわ。だってあたしと試合して手加減しているのは今
じゃ父さんとマルコだけよ？」

「……気づいてたの、手加減してたこと」

「当たり前でしょ」

ミーナはいつもの強気な笑顔を浮かべた。

「でもその力はあたし一人じゃなくて、もっと多くの人たちを救え

る力だわ。きつと騎士団長だった父さんがずっとそうしてきたように。だからあたしは守りたいの。世界中の人みんななんて言わない、眼の届く範囲でいい。人がひどい目に遭ってるのは見過ごせないの。だから助けたい。それにそうすれば次に父さんに会った時胸を張れるでしょう？」

ミーナはとても魅力的に笑った。

そう、ミーナはいつだってそうだった。

言いたいことは我慢しないで言っただけに人を傷つけているくせに、その実周囲の人をすごく大切にしているんだ。自分を犠牲にしたって守ろうとするんだ。

僕はそんなミーナが大好きで、大嫌いだ。

「そんな事してたらミーナが壊れちゃうよ」

「じゃあ手伝って。マルコなら簡単でしょう？」

挑戦的な瞳をしたミーナは腰に手を当ててぐいつと顔を近づけた。

「さ、決めなさいマルコ。行くの？ 行かないの？」

ミーナはいつもそうやって僕に選択肢を一つだけ残すんだ。ずるいや。

口に出したらきつと、分かっている！って怒られるだろうから絶対言わない。でも今日ここで誓うよ。

ミーナがみんなを守るといふなら、僕はみんなを守っている君を守ってあげる。

もう二度と涙を見たくないから。

立ち上がって、闇の中揺れるポニーテールを追いかけた。

さっきのマルコの台詞には驚いた。

双子の兄弟に愛の告白なんて、いまだき流行らないわよ！

でもあの端正な顔で真剣な目をして、ミーナさえいればそれだけでいいんだ、なんて言われたら心が揺れないはずはない。少しばかり街の女の子たちの気持ちがわかった気がした。

まあしかし頭のねじが足りないマルコのことで、言葉以上の意味はないんだろう。

どおりできやあきやあ騒ぐ女の子に目もくれないはずだわ。 16
歳にもなって兄弟離れしてなかったなんて！

それでも、マルコは大切な大切な双子の片割れだ。あたしだってマルコが大好きだし、隣にマルコがいないことなんて考えられない。だから嬉しい。マルコも同じようにあたしの隣を当たり前だと思ってくれていたことが。

その気持ちが力になって足を先に進めた。

「さっき飛び降りたときの馬との距離からして、たぶんそう遠くには行けなかった筈だよ。すぐ追いつかれそうな距離だった」

マルコが小さな声で囁いた。

こういう観察眼は信じられないくらい鋭いのに、どうして熱烈な女の子の視線には気づかないの？

ばれないように小さくため息をついた。

その時、先ほど宿の廊下で後ろから追いかけてきた抑揚のない声が草の向こうから聞こえてきた。

沼地を抜けて、足元は固い地盤に戻っている。

ブーツについた泥を軽く落としてから草陰に身を隠し、声の方向へ息を潜めて近づいていった。

馬車は横転していて、その周囲をぐるりと立派な体軀の馬が取り巻いている。その馬のどれもがセフィロトの紋章を背負っていて、暗い中見える人影もすべてセフィロト国の追手だという事はすぐに分かった。

横転した馬車の上には先ほどまで御者をしていた青年が立っていた。

腰に下げた剣にいつでも手を伸ばせるよう警戒しているのがこれほど遠くまでも伝わってきた。きつとあの人は、かなりの腕を持つ剣士だ。

周囲を取り巻く騎士たちが手にしているランプの明かりで、いくらか様子が観察できた。

馬車が横転した場所は少し小高くなっているため、ここからは全体が観察しやすい。

「どこで二人を降ろしたのかな」

最初に聞こえた抑揚のない声が響く。

少し顔を上げてみると、声の主の後姿が見えた。闇に浮かぶ純白の神官服には袖口に青いラインが2本入っている。服の上から白地に金の紋様が刻まれた籠手を装備していた。そして、髪は……まるで闇夜に燐光を放つ夜光蝶のようにはつきりと輝く銀色。ほんの少し青みがかっていることが、ますます澄んだ輝きを添えている。

顔は分らないが、どうやら御者の青年と同世代の男性らしいことは声で判別できた。

茶髪をした御者の青年は、警戒を解かずに静かに答えた。

「何のことか分からないな。オレは最初から一人だ」

「それはウソだよ。僕はちゃんと『見てた』から」

穏やかな口調とよく通る低い声に似合わず、きつぱりと言い切った銀髪の人は、右手を高く天に掲げた。

その籠手から、銀色に輝く刃が飛び出した。

「彼らはどこに行ったの？ 僕らから逃げ回って、いつか諦めると

でも勘違いしてるわけ？」

「いないよ。彼らは二人ともここにはいない」

「ウソつくといい事ないよ？」

切れ味の鋭そうな刃がランプの明かりを反射して煌めいた。

隣のマルコは切れ長の眼を少し細めた。眼を凝らしているようだ。
「騎士つばいヒトが4人。と、あの今喋ってるヒト。馬は全部で5頭いる」

ということは、今喋っている銀髪の男性を抜いて、残り騎士が4人。あたしとマルコの腕なら、奇襲で何とか全員倒せるかもしれない。

「マルコは2人お願い。倒したら、あたしが銀髪のあいつの注意をひくから、すぐに馬を適当に貰ってあのお兄さんと逃げるわよ」

「分かった」

「じゃあ、いちにのさんで行くわよ！」

マルコの金の瞳を見つめた。

いつものように笑い返してくれた。

子供の頃のように、まるでこれからいたずらでもしに行くみたいに屈託ない笑顔だった。

「いち」

「にの」

「さん！」

二人同時に草むらから飛び出した。

マルコは足の速さと身軽さを生かして一足飛びに遠くの敵へと間合いをつめた。

一歩遅れてあたしは一番近くの男に飛び掛った。驚いて動けないでいる男の懐に入り込んで、小太刀の柄で強烈な一撃を叩き込んだ。くぐもった声が漏れて、男の体から力が抜けた。

「何者だ！」

残り二人が剣を抜いてあたしの方を向いた。

「一人は僕が相手だ！」

上から声が降ってきて、男たちのうち一人がつぶれた。マルコが頭上から飛び掛ったのだ。そのまま首に腕を回して締め上げる。

あたしは残りの一人と向き合った。

体格は倍ほど違う。先日 of 剣術大会準決勝であたったオヤジに似ている。

小太刀を抜いて対峙すると、ちょうどマルコが敵を絞め落としたところだった。

「ミーナもさつさとやつつけちゃってよ！」

「分かっているわよ！」

あたしの使う剣はカウンター主体の受ける剣術だ。父さんがずっと教えてくれていたその型は男性に比べて非力なあたしにぴったリだった。

「なんだこのガキ！」

大きな男が切りかかってきた。攻撃されるのは願ってもない。

分厚い剣が振り下ろされるのにあわせて横にステップした。目標を失った剣は地面をえぐる。

返し様に振り上げられた剣先を軽くステップバックしてかわすと、さらに鋭い突きが追いかけてきた。

それに逆らわず沿うように体を回転させて、小太刀を逆刃に持つ

た。

回転力をつけて小太刀を薙ぐ。

「やあっ！」

気合と共に側頭部に殴打を加えた。

「ぐあっ……」

苦しい声を残して最後の男も地面に沈んだ。

なんだ、国家騎士もたいしたことないな。よかった、騎士団試験なんて受けなくて。

少々興ざめしてから小太刀を鞘に納めて振り向くと、ちょうどマルコと白い神官服の男性が対峙していた。

低くてよく通る声がその場に響く。

「なあんだ、やっぱりいたんじゃないか」

銀髪の青年がこちらを向いた。

振り向いた青年の顔はぞつとするほど整っていた。まるで創り物のように美しい陶器の肌に目立つ深い群青色の瞳。あまりに深く冷たいその色に、あたしもマルコも言葉を失った。

その男性は眠そうに半分閉じた瞼で、でも口調だけははっきりとこう言った。

「久しぶり。やっと会えたね……レメゲトン」

レメゲトン　その名はよく知っていた。

今は亡きグリモワール王国に仕えたという天文学者の事だ。彼らは契約の証であるコインを使って魔界から悪魔を召喚し、その力を使役したという。

でもなぜこの銀髪の人はあたしたちをその名で呼ぶの？

「ああ、早く『音』にも知らせなくちゃ。今度は逃がさない」

銀髪の人はひどく興奮している様子だった。

その裏に隠された狂気を見とって、背筋に冷たいものがざつと流し込まれる感覚があたしを襲う。

「グリフィス、僕らを迫害したグリフィス。もう逃さない。今度こそ　殺してやる」

「?!」

殺す。

冷たいほどの殺気を浴びせられ、思わず小太刀を抜刀する。

隣でマルコも剣を構えていた。

しかし、その場に鋭い声が飛ぶ。

「もう、何してんだよ！　逃げろよ、二人とも！」

はっとして見ると、御者のお兄さんは既に馬車から馬を切り離していた。

あたしたちもすぐに目で合図して銀髪の人にくるりと背を向ける。

が、はじかれるように背を向けた瞬間地面がなくなった。

喉元に何かが押し付けられて息が止まった。

「逃がすか、小娘」

低い声が出て目の前に太い腕が伸びた。しまった、最初にあたしが倒した男だ。鳩尾が浅かったのか、胸当てが思った以上に丈夫だったのか。

喉元をつかまれて高々と掲げられた。

必死でもがくが、首が絞まるばかりで抜け出せそうにない。

まさかこんな所で……！

「ミーナっ！」

いったん衝撃があつて、急に喉元が楽になった。一気に入り込んできた空気にむせ返り、息を整えながら目の前の男を見上げると、細身のマルコが巨大な男に組みかかっていた。

「マルコ！」

「先に行つて！」

「でもマルコが」

「早く、ミーナ！」

マルコが必死で男を抑えている間にあたしはよろよろと馬に向か

った。

でも自分よりずっと大きな相手と組み合ってしまったマルコは、自分の力を発揮できないはずだ。マルコが得意とする戦法はそのすばやさ^さと身軽さを生かしたヒット&アウェイなのだから。

それでも渾身の力を込めて大男を組み伏せると、あたしに向かつて叫んだ。

「先に行つてて！　すぐ追いつくから！」

「そんなことっ」

できない、と叫びかけた時だった。

突然ふわりと体が浮いた。

先ほど大男に釣りあげられた時とは違い、まるで何かの力で優しく空に押し上げられたようだった。

「さあ、行くよ。落ちないでね！」

高い嘶^{いなな}きの後、馬はすぐに走り出した。

どうやら先ほどの浮遊感は、馬上に引き上げられたことによるものだったらしい。

馬に横座りの状態で、手綱を取る御者のお兄さんに抱えられていた。

「だいじょうぶ？ 怪我はない？」

「あ、あたしは……」

馬はとても人2人を乗せているとは思えない速度で草原を駆けている。

周囲は真っ暗で分からなかったが、目が開けられないほどに風を切っていることからすぐに分かった。

そこであたしははっとする。

「マルコがつ！」

「すぐオレが助けに戻るよ。君は、このまま馬を走らせて。このまま行けばラッセル山に続く街道に当たるはずだ。そこは石畳で整備されているから道に迷う事はない。まっすぐ西へ、カトランジエに向かって」

「えっ？」

「今度は、絶対に振り向いちゃだめだ。オレの事ならだいじょうぶきつと君が思ってるよりも強いよ、ミーナ」

お兄さんはそう言うのにこりと笑った。幼く見えるその笑顔に、一瞬どきりとする。

というか、考えてみれば密着しすぎだし、何気に顔近いし……！ 長い睫に縁どられた栗色の瞳を見て、柄にもなくどきどきしてしまった。

「さあ、ミーナを頼んだよ」

お兄さんはぽんぽん、と走る馬の首筋を叩く。

そして、同じ調子であたしの頭にぽんぽん、と手を置いた。

「じゃあ、分かったね。今度こそ、追いかけてこないでちゃんとカトランジェを目指すんだ。カトランジェについたら、ルークという人を探して、『アキレア』という名を告げて」

そう言うとお兄さんは馬をとめた。

「君は本当に君の母親にそっくりだよ、ミーナ。姿だけじゃない、そうやって周りの人を助けようとする心も、その強い意志も」

呆然となったあたしを馬上に残したまま。

にこりと笑った栗色の瞳はとても優しい色をしていた。

指笛を鳴らすと、どこからか一頭の馬が駆けてきた。

お兄さんは一人、そちらに乗り換えてさっきの場所に戻るつもりだ。

「ねえ、お兄さん」

「なあに？」

「せめて……名前、教えて」

マルコが父さんたちと別れるあの時、こう聞いた気持ちが少しだけ分かる気がする。

あたしはこの人について何も知らないのだ。素性どころか、名前も歳も、家族も住んでいる場所だって。

せめて、名前だけでも知りたい。

そうすると、御者をしていた茶髪のお兄さんは、もう一度微笑んだ。

「オレは……リッドだよ。リディアルド・ピース。でも、あんまりこの名前は人前で口に出さないで。普段はコードネームのアキレアを名乗ってるから」

父さんが言ったのと似た台詞で青年は名乗った。

「リッド……気を付けて。マルコを、お願い」

「うん、任せて！」

屈託ない笑みが瞼の裏に焼きついた。

馬を駆っていると、風が目に入って乾燥してきた。瞬きすると涙がでて、するとその涙が止まらなくなった。そのままあたしは馬上で泣き出してしまった。

マルコを置いてきた事があたしの心をめっちゃめっちゃに傷つけていた。

あたしがリッドを助けに行くって言ったから。一人目をちゃんと倒しておかなかったから。結局マルコの言うとおり、足手纏いになっただけだったんだ。

全部あたしが悪い。

「マルコ……」

あたしにできることなんて、もうほとんど残されていなかった。暗闇の中で馬を駆り、とにかく言われた通りカトランジエの街を目指すことしかできない。マルコを助けに戻ればまた足手纏いになる。リッド、と名乗ったあの人にすべてを託すしかない。

まだ出会ってからほとんど時間も経っていないのに、何故かリッドという人を信じる事が出来た。素直に言う事を聞いてカトランジエに向かう事も、マルコの事を託すことだってできた。

何故だろう？

最後に見た笑顔が、瞼の裏に焼き付いて離れない。

「また会えますように……！」

小さく、本当に小さくそう呟いて、獣臭い馬の鬣たてがみに顔を埋めた。お願い。みんな無事でいて欲しい。

父さんも母さんも、マルコもリッドも。

誰も傷ついて欲しくない。

そう思うのは間違いなの？ あたしはその前に自分の身を心配しなくちゃいけないの？ 人の事を優先して思っちゃダメなの？

ねえマルコ、教えてよ。

マルコだったら……いつたい、どうするの？

「お願い、リュシフェル……」

無意識に自分の口から出た名が、天使ではなく悪魔のものだった

事に少しだけ驚いた。

やっぱりあたしは、クラウド「フォーレスとダイアナ」フォーレスの娘らしい。

たった一人で追っ手を撒^まいて、遠くカトランジェの街まで行かなくてはいけないというのに、思わず微笑んでしまった。

腰のベルトに差してあった二枚の羽が、微かな音を立ててさざめいた事を、あたしはその時まだ気づいていなかった。

M - 6 油断

ミーナがお兄さんに馬で連れて行かれた。それを見て安心した途端、力が抜けた。

抵抗をやめて短い草の生えた地面に転がる。

「あーよかった」

もういいや。ミーナにはお兄さんもついていることだし、きっと無事にカトランジエの街にたどり着くことだろう。

突然抵抗をやめたことを不審に思ったのか、男は奇異なものを見る目で地面に寝転がった僕を見下ろしていた。

でも、このあとミーナを追いかけられちゃたまらないから、殺さない程度にこいつらに深手を負わせておかなくちゃいけないな。

そう思っ腹筋をばねに立ち上がる。

「なっ！ 油断させておいて！」

油断するお前が悪い。一瞬で抜刀して目の前の大男の大腿を大きく切り裂いた。

一瞬間があつて血が噴出す。

「うあああーっ！」

大男は悲鳴を上げて地面をのた打ち回った。

それを見て、右の手甲から銀色の刃を飛び出させている銀髪の青年はうつすらと微笑んだ。

さっき振り返った時にも思ったけれど、本に描いてある本物の天使みたいだ。どこも歪んだところがない。陶器のように白い肌の中で深淵を映しこむ群青の瞳が目立つ。どこか眠そうに半分瞼が降りてきているのも、なんだか怖かった。

「君も久しぶり、だね」

「……？」

銀髪の青年から発せられた言葉に、思わず首を傾げる。

おかしいな、初対面だと思ったんだけど。僕はちよつとばかりぼんやりしているから……会った事を忘れてしまっているんだろうか？
「いったい何年逃げ回る気だい？ 今度こそ、もう逃さないよ」

何年も、だつて？

ああ、そうだ。父さんは僕の顔を、父親の『アレイ』にそっくりだと言っていた。その父親の瞳の色はミーナと同じ紫らしいけれども？ 紫の瞳、戦争でセフィロトに被害？

それに、アレイっていう名前……いや、そんなはずはない。だつてあの人は、伝説なんだから。

どっちにしても、この人は自分と本当の父親を混同しているのではないだろうか。

「ねえ、たぶん間違ってるよ。人違いだ」

すると銀髪の方はちよつと首を傾げた。そして、今にも閉じそうだった目を大きく開いた。

その途端、この人から感じ取れる闘気が一気に膨れ上がった。
「ああ、そうだね。目の色が違う。顔もちよつと違う。若いし、機嫌よさそうだ……いつ変えたの？」

だめだ。話にならないや。

この分だとミーナの事も、生みの母親と勘違いしてしまっているはずだ。

やっぱりここで足止めしなくちゃ。

「僕はマルコシアス・フォーレス、騎士団長クラウドの息子だ！」
剣についた血を拭う間もなく濡れた刃を閃かせて銀髪の人に切りかかった。

振り下ろした剣を、闇目にも切れ味がよさそうで薄い刃が受け止める。

こうして近くで見ると、ぞつとするほど整った顔立ちがよく分かった。瞼は半分降りていて、それでもまるで彫刻みたいだ。

しかも、この銀髪の方は見た目よりずっと 強い！

切っ先の速度も力も、受け流す技術も……

「ねえ、弱くなったんじゃない？」

剣で押し負けて、いったん距離をとる。

父さん以外では初めて出会う自分より格上の相手、しかもこの戦闘スタイルは初めてだ。

それでも、退く気はないけれど。

銀髪の方は軽く口角を上げた。半分閉じた瞼では、どこか狂った精神を反映した表情にしか見えない。

「いくら夜だからって手加減しなくていいんだよ？」

「手加減なんてしてない」

もう一度剣を両手でぎゅっと握りしめた。

「ふうん、じゃ、人違い？」

「最初からそう言ってるじゃないか」

僕の言葉を聞いて、銀髪の方はすつと刃をおろし、大きなため息をついた。

「なあんだ」

分かってくれたのかな？

そう思っただけ少し手を緩めた。

「でも、別だけど、同じだ……そう、『似てる』……同じだけど、違う……似てる？」

銀髪の方は何かをぶつぶつと呟いた後、きゅっと眉を寄せた。

「君は誰？」

「さっき言ったよ。僕はマルコシアス・フォーレス。きつとあなたが探している人とは別だよ」

僕の本当の父親かもしれないけれど。

「マルコシアス……？」

銀髪の方の目がもう一度ゆっくりと開かれた。

深い群青の瞳がランプの明かりに照らされて、揺れた。

「ああ、そうか。じゃあ君も……敵だ」

こんな時なのに、僕は一瞬にして銀髪の方の顔に釘付けになった。

なんて、美しい。

女とか男とか、そんなもの全部超越している。

「V-A-L-E」

完璧に整った唇から呟かれたセフィロト国の古代語は、学校で習った事があった。

それは

「……がつ……」

目の前に銀髪が揺れている。

胸の辺りが焼けるような痛みを帯びて、喉の奥に熱い液体がせり上がった。

血に濡れた銀の刃が視界をかすめる。

「さよなら」

それはセフィロト国の古代語で『さようなら』。

僕は、そのまま地面に倒れ伏した。

痛い、と言う声も出ないほどの焼け付く激痛に支配された。
やばい。

喉の奥から熱いものがこみ上げてくる。耐えきれず、咳と共に真っ赤な血を吐いた。それはそのまま地面に流れ出て、視界の隅が赤く染まった。

指一本動かせないままに倒れ伏した僕の頭の上から、低く、よく通る声が降ってきた。

「あーあ、やつぱり、弱い」

「……っ！」

その言葉で傷の痛みとは違う熱さが胸の内を焦がす。
弱い？ 僕は、弱い……。

イヤダ

全身が、その言葉を拒絶した。弱い、という言葉を。

大粒の涙を流したミーナの姿が脳裏を過る。そして、誓った言葉。
全身が煮え滾^{たぎ}っているようだ。軀^{からだ}以上に心が痛い。そして熱い。

「まだ……」

心の痛みは熱いエネルギーとなって僕の中を駆け巡った。

「終わってない……っ！」

初めての感覚だった。

手も足も出せずに負けたことが、弱いと言われたことが、僕の中の何かを呼び覚ました。

負けたくない

こんなにも強く思ったのは初めてだった。

動かない、と思ったはずの手足に力が入る。胸のあたりは焼け付くように痛いし喉の奥から熱い血が湧き出していたけれど。

ぽた、ぽたと地面に赤い雫が落ちる。

「あれ？」

不思議そうな声がする。

崩れ落ちそうになる膝を支えて、その声の主を睨みつけた。

「おかしいな、ちゃんと刺したはずなんだけど」

銀髪のヒトの右籠手から飛び出した刃は血に濡れている。彼はそれを確認して、もう一度僕の方を見た。

負けたくない。

その気持ちだけが僕を支えていた。

「仕方ないな、もう一回……」

血を吸った刃がランプの明かりで暗闇の中にゆらりと浮き上がった。

対する僕は、もう体の感覚なんてない。今立っているのが不思議なくらいだ。

でも。それでも。

ミーナを守るって誓ったから。

「強く……なりたい」

よく考えると、こんなにも自分のことで願ったのは初めてだったかもしれない。

そして芽生えたその感情に、応えるものがあつた。

「負けないっ！」

そう叫んだ瞬間、僕の左手の籠手から光が溢れた。

かすむ視界、薄れゆく意識の中に優しい声が流れ込んできた。

「お願いだ。この子に……この子たちに、ありったけの加護と、平穏を」

誰の声だろう。とても優しい女の人の声がする。

それに、とても温かい。目の前に銀色の光が溢れている。

傷の痛みがどんどん遠ざかっていく。それに伴って、意識もはつきりしてきた。

視界を覆っていた銀の光が霧散するように消えた時、目の前には刃を構えた銀髪の人の姿だけがあつた。

傷の痛みがない事を訝しみ、腹に手をやると確かに血でべつとりと濡れてはいたが傷は見当たらなかった。

おかしいな、確かに死にそうな傷だったと思ったんだけど。頭の中に響いた優しい声といい、温かくて柔らかな銀色の光といい、よく分からないことだらけだ。

いずれにせよ、先ほどのダメージからは完全に回復していた。剣をまっすぐに銀髪の人へと向ける。

「負けない」

その言葉をもう一度、口に出して。

するとその銀髪の方は目を半分閉じたままで口角を上げた。

「ああ、なるほど……君はもしかして、あの二人の子供なんだ」

あの二人。どの二人を指しているのかは分からなかったけれど、この話の流れで行くと僕とミーナの両親の事だろう。

「そうかもしれない」

「リュシフェルの加護、マルコシアスの名……間違いないね」

銀髪の方は嬉しそうに笑った。

「もう一度、消してあげるよ。羽根の加護は……一つだけだろう？
もうやり直しは利かないよ」

羽根の加護。

ああそうか、さっきの銀色の光は僕らの本当の両親だという人たちが名前と共に僕らに唯一残したのだと父さんが言っていた。

銀色の光とあの優しい声は、もしかすると……

「ありがとう」

まだ見ぬ、そしてこれからもきっと出会う事がないだろう本当の両親に向けて、こっそりと呟く。

僕の命を救ってくれた。

そして薄明かりの中、銀髪の人をまっすぐに睨みつけた。

手にした剣には先ほどの銀の光の残滓がまとわりついていた。

何故だろう 体が軽い。

細胞の一つ一つが歓喜するような高揚感を抱え、地を蹴った。

M - 8 逃避

体が軽い。まるで背に翼でも生えているようだ。

軽く地を蹴るだけで、僕は楽々と銀髪の人との距離を詰めることができる。

そして、それだけではない。

「不思議だ……」

時間がさつきよりずっとゆっくり回転している。

先ほどは読めなかった太刀筋が、はつきりと目で見てとれる。

人間は死を乗り越えると超常的な力を手に入れる事があるって聞いたことがあるけれど、その類なんだろうか。僕は、この一瞬でずいぶんと強くなったようだ。

銀の閃きを頭上すれすれに見切ってかわし、剣の柄を構えて懷に飛び込んだ。

が、それはさすがにかわされる。

代わりに問答無用で拳がとんできた。

「くっ……」

何とか上体をひねって避けるけれど、体勢が崩れている。すぐには反撃できない！

苦し紛れに思いきり地を蹴った。

すると。

「……あれ？」

一瞬で視界が暗転した。

いや、よく見れば真っ暗ではなくかすかな光の粒がいくつも煌めいている。

ああ、そうか。

「飛び過ぎちゃったのか」

ふっと足元を見下ろすと遙か、ランプの薄明かりが揺らいでいるのが見えた。

僕は、夜空の中に一人飛び込んでしまったのだった。

動体視力だけじゃなく基礎視力もかなり上昇しているらしい。僕の目の前には見た事もないような星の海が広がっていた。

白銀に煌めく「休息の鷺」、それよりほんの少し青みを帯びた「飛翔する鷺」。そして二つを繋ぐ「大いなる懸け橋」。この3つの

星には古い物語が秘められている。その起源は東方だったと聞くが、詳しい事は分からないし、物語の内容もよく覚えていない。でも、それは確か一年に一度だけ会える恋人たちの、悲恋の物語だったように思う。小さい頃、母さんが暖炉の前でゆっくりと僕ら二人に聞かせてくれたのだけ覚えてる。

そしてその周囲を取り巻く銀の粉。光る羽根を持つ蝶が飛びまわったような、煌めく世界が広がっていた。

が、その余韻に浸っている場合ではない。

剣を握る手に力を込めた。

「行くぞ！」

体を捻って上下入れ替える。

すると、周囲の空気の流れが変わった。僕は、ものすごい勢いで落下し始めた。

剣をまっすぐに構え、目を凝らして狙いを定めた。ランプの明かりの中心で、あの銀髪の人が僕を見失って焦っている。

チャンスは、一度きり。

狙うのは 銀色に光る刃。

僕の体はどんどん加速して、闇夜でも薄ぼんやりと燐光を帯びる銀髪に近付いていく。

「うおおおお！」

雄叫びをあげると、深淵を移す群青の瞳がこちらを向いた。

そして、銀の切っ先が迫ってくる。

僕は、落下の加速を生かして、渾身の力でその刃を叩き折った。
「何っ?!」

銀髪の人大きく目を見開いた。

発せられた闘気に、僕は思わず飛び退る。

いったん距離を置いて呼吸を整えた。

先ほどまで眠そうに半分瞼が降りていたのに、今はくつきりとした群青の瞳の収まる眼が僕を睨んでいて、溢れ出す闘気を隠そうともししていない。

「まさか千里眼まで使えるとは思ってなかったよ」

「せんりがん？」

思わず首を傾げると、銀髪の人はずかしくにこりと笑った。

それだけでその場の威圧感が増す。

全身の高揚感が薄れている。僕の剣を取り巻いていた銀色の霧も消えかかっている。さらに、ゆっくりと回転していた世界がもとの速さに戻っていく。

貫かれたはずの腹は全く痛くならなかったから感知しているのだろうけど、ここでこの身体能力　おそらくそれは、本当の両親だと言う人が僕に残してくれた羽根の加護によるものと思われるがを失ったら、また先ほどの繰り返しだ。

主武器である銀の刃は折ったけれども、他にも武器を隠し持っている可能性の方が高い。

僕はこの銀髪の人に勝てない。何しろ、この人と僕じゃ実力が違い過ぎるのだから。

でも、ここで倒しておかないと先に逃げたミーナが……

「マルコッ！」

そこへ、鋭い声が飛んだ。

はっと見ると、そこにはミーナを連れて逃げたはずのお兄さんの姿があった。黒毛の馬を駆り、闇の中から僕の方へ一直線に駆けってくる。

「ミーナはちゃんと逃がした。今度は、君も逃げるんだ！」

「あ」

僕も敵の銀髪の人突然の乱入で油断している隙に、お兄さんは

その柔な見た目からは信じられないくらいの力で僕を馬上へと引き上げた。

その間も馬は足を止める事はない。

「全く君たち兄弟ときたら、無茶ばかり……さあ、行くよ！ 捕ま
つて！」

僕がしっかりと馬にまたがった時には、銀髪の人も横転した馬車も倒れた聖騎士団の人たちもずっと後ろへと遠ざかっていた。

M - 9 再会

「あ、あの……」

「全く本当に君たちは無茶ばかりするんだから！ 何で戻ったりしたの！」

「……ごめんなさい」

お兄さんの剣幕に、僕は素直に謝った。

すると、彼は一つため息をついただけで許してくれた。

「まあ、いいや。今度こそカトランジエへ向かおう」

「ミーナは？」

「先に向かっている。彼女は街道沿いだから道に迷う事はない」

先に行った、しかもお兄さんがここにいてるってことは、ミーナは

……

「一人なの？ ミーナは今、一人なの？」

あり得ない。そう思って見上げると、お兄さんはひどく驚いたような顔をした。

「だめだよ、ミーナを一人にしちゃ！ 何するか分からないよ？」

それに……寂しくて、泣いてるかもしれない」

父さん、母さんと別れたあの日みたいに。

「ねえ、追いかけてよう！ すぐに！」

真剣な目でお兄さんを見つめると、彼は馬を停めた。先ほどの場所からかなり遠ざかっている。ここまでくればもう大丈夫だろう。

困ったように笑った彼の笑顔は壊れそうに儚くて、脆くて、危うい優しさを秘めていた。

どうして彼は、時に酷く悲しそうに笑うんだろう。

「君たちは本当に……」

ぽつり、と呟いた彼は、優しい手で僕の頭を撫でた。その感触は、何故だか父さんを思い出させた。

「離れたくないんだね」

そんな問いに、寸分の隙もなくこくりと頷いた。

だってミーナと離れるなんて、そんな事あり得ないから。生まれた時からずっとずっと一緒にいた。隣にいるのが当たり前だった。お互い何があってもすぐ助けられる距離にいたかったから。

「本当はオレ達が囷になつて、街道を行かずに草原を突っ切るつもりだったんだけど……もしかすると、隠れずに3人で街道を歩いた方がむしろ目立たないかもしれない。敵も白昼堂々街道を通って逃げるなんて思つてないはずだしね」

「また囷つて言つた！」

僕が頬を膨らますと、お兄さんはぎよつとした顔をした。

「そんなことしたらまたミーナが助けようとするよ！ それじゃ逆効果だ」

そう言つて強固に主張すると、お兄さんは一拍置いた後、さもおかしそくに笑いだした。

不思議に思つて首を傾げると、彼はこう言つた。

「店長と同じパーツでそんな表情かおしないですよ！ にっ、似合わない

……」

いったい僕の本当の父親はどんな人間だったんだろう？

謎は深まつていくばかりだ。

一晩中馬を走らせ、元グリモワール王国の東都トロメオの方角がうつすらと太陽色に染め上げられていく頃、僕らは昔王都だったユダイスコキートスを繋ぐ街道にぶつかった。

お兄さん　どうやらリッド、というらしい　話を聞くと、ミーナはそれほど遠くには行っていないはずだ。少し急げばすぐに追いつく事が出来るだろう。

街道沿いに軽く馬を走らせながら、隣を走るリッドをちらりと見る。

背はそんなに低くないんだけど、童顔のせいですごく幼く見える。

ぱつと見なら20歳ちよつとくらいなんだけど……本当の年は幾つなんだろう？ ひよつとすると、ものすごく年上かもしれない。大きな栗色の瞳は感情をよく映すし、おそらく年下の僕が言うのもなんだけど、まるで子犬みたいな印象を受けた。

「ねえ、リッド。リッドは父さんの知り合いなの？」

「ああオレはクラウドさんの2番目の弟子だよ」

「えっ？ そうなの？」

「君たちの事は生まれた時から知っているよ。いや、生まれる前から、かな？」

本当に、このヒトは幾つなんだろう？

父さんの2番弟子って、もしかしてものすごく上の兄弟子なんじゃないだろうか。しかも僕らの事を生まれる前から知ってるって口ぶりからして、年の差は3つや4つじゃなさそうだ。

疑いの目で隣を走る茶髪の青年を見つめた時、ちょうど街道の先を歩く馬が一頭見えた。

そこには黒髪ポニーテールの少女が乗っている。

僕は、迷うことなく馬を走らせた。

「ミーナっ！」

大きな声で双子の兄弟を呼ぶと、彼女ははつと振り向いた。
その紫水晶アズリストにみるみる驚きが広がっていく。

「マルコ！」

何より聞きたかった声が響く。

僕は馬を飛び降りた。彼女も同じようにしてこちらに駆けってくる。この距離が、いつもよりも遠く感じた。

「よかった、マルコ！」

ミーナが最後の一步をジャンプして僕に抱きついた。

こんなにも感情をあらわにするミーナは珍しい。

僕らはこの一晩の不安全部を取り除こうと、首が締まるくらいにきつく抱き合って、そして満足するとどちらからともなく離して笑

いあった。

そうしてひとしきり無事を確かめ合い、遅れて追いついたリッドに頭を下げた。

「ありがとう、リッド!」

「いや、いいんだ、二人が無事なら　さあ、今度こそカトランジエに」

「嫌よ」

リッドの言葉を、ミーナがきっぱりとした口調で遮った。

「ミ、ミーナ?」

「カトランジエには行かないわ」

僕はびっくりして口を大きく開けたまま硬直してしまった。

マルコが大口を開けて固まっている。

仕方ないとはいえ、その間抜けな表情をやめなさい！ せつかく綺麗な顔してるのに……勿体ない。

昨日まで付けていなかったマントを羽織っている双子の相方をちらりと見てから、もう一度リッドに視線を戻した。

「今、なんて……？」

リッドも栗色の瞳を真ん丸にしてこっちを見ている。驚きに声も出ない、といった風体だ。

でも、あたしはもう決めていた。

「カトランジエには行かないって言ったの」

もう一度そう言つと、マルコもリッドも愕然となった。

うん、なかなか面白い光景ね！ 切れ長の目の端正な顔をした少年と、童顔で柔らかな笑みを湛える青年。女の子がいたらどっちが好み？って話題になること間違いなしの二人が、揃いも揃って目の前で口をあんぐり開けてるのだ。

幸いな事に早朝で周囲に人は見当たらないが、こんな街道のと真ん中で3人が問答していれば目立つことこの上ないだろう。

リッドは何かあたしとマルコを促して街道を外れ、草原にぽつぽつと生える木の根元に馬を落ちつけた。

落ち着いてすぐ、あたしは追い討ちをかけるように言い繋いだ。

「街に、戻りましょう。カトランジエに行っても何も変わらないわ」

「ちょ、ちょっと待ってミーナ。それがどういうことか分かってるの？」

慌てたリッドに、あたしはもう一度、にこりと笑う。

街を出てから、もうたくさん泣いた。弱音も吐いたし、こんなにも遠くまで逃げてきた。怖い思いをして、命の危険も乗り切つて。

そうしたら、全部がすっきりして未来への道筋がはっきりと見え

た。

「分かっているつもりよ。その代わり、カトランジェに逃げるのが
どういう事かも分かっているつもり」

栗色の瞳をまっすぐに見つめて。その隣の金の瞳に笑いかけて。

あたしはゆっくりと言葉を紡いでいった。

「カトランジェに逃げてどうなるの？ これからずっと国から隠れて暮らすの？ 父さんも母さんももういないのに…… そんなの、あたしは嫌よ。父さんも母さんもいないなんて、何の悪い事もしていないのに堂々と暮らせないなんて」

昨日の夜、一人馬を進めながらずっと考えていた。

逃げているのはあたしらしくない 前に進むのにそれ以上の理由なんていなかった。

「あたしの、あたしたちの人生はあたしが決めるわ。国なんかに決めさせない。もちろん、父さんと母さんだって国に渡したりしないましてや、処刑なんて……」

さすがに言葉に出せなくて、いったん口を噤んだ。

声も出せずにいたリッドの栗色の瞳を見上げて、あたしは宣言した。

「あたしは、自分が望まない事なんてしたくないわ。父さんたちとも、マルコとも離れない。逃げない。もしそれを国が邪魔をするのなら、説得でも迎撃でもなんでもいい、あたしの人生だから納得させてみせる！」

言葉にしたら、覚悟が出来た。

命を惜しんで逃げ隠れていたら、それはあたしにとって死んでい
るのと同じだ。それならあたしは、命を賭けて自分の居場所を勝ち
取りたい。

ただし相手は『セフィロト国』というその大きさをすらも分からないほど強大なものだ。生半可な事では無理だろうし、今の時点でい
ったい何から始めたらいいのかも分からない。追手の騎士を撃退し
続けるとか、王様に会って説得するとか、無茶な上に全く効果のな

さそうなことしか思いつかなかったけれど。

案の定マルコは同じ事を思ったようで、首を傾げて、言った。

「でもさ、街に戻っていったいどうするの？」

「父さんと母さんに会うわ。そして、今度こそ傍を離れたりしない。あたしたちだけ逃がそうなんて、許さないんだから」

「でも僕らが戻っても何もできないよ？ だから……」

分かっている。そんな事、分かっている。

昨日だってあたしがリッドを助けるなんて言って戻ったからマルコが危ない目に遭った。

「でも嫌なのっ！」

ここまでくるとほとんどあたしの我儘だった。

「あたしには何も出来ないかもしれない、足手纏いになるかもしれない……それでも、あたしは……」

マルコは困ったように切れ長の目を歪めた。ミーナは言い出したら聞かないからな、という心の中が丸見えだ。

代わりに、リッドがこれまでのような笑顔ではなく、ひどく真剣な目をしてあたしを覗き込んだ。

「ミーナ、我儘はいい加減にするんだ。もう何度も言ったように、カトランジェにいったん身を隠して。クラウドさんとダイアナさんもそれを望んでいる。君たちを守るにはそれが一番いいんだ」

これまでにないきっぱりとした口調。優しい面影はどこかへ影を潜めている。

馬上で微笑みかけられた時のように、あたしは一瞬どきりとした。

「もうそれは何度も聞いたわ」

「じゃあ分かってくれるまで何度も言うよ。君たちは、セフィロト国から追われてる。それは、君たちの両親が18年前の戦争でセフィロト軍に多大な被害をもたらしたからだ。それも、二人とも両親に生き写しだから言い逃れできない」

「それも聞いたわ」

「君が納得するまで何度だって言うよ、ミーナ。君が剣術大会で優

勝して、国家騎士団から勧誘がきた。その時、セフィロト国に気づかれてしまったんだ。君たちが、そして君たちの両親が生きていることが

「それも聞いたわよ」

頑固に言い張ると、リッドは大きな眼をちよつと細めた。

マルコはその隣でじつと押し黙っている。

「じゃあこれは知ってる？ 昨日の夜オレたちを襲った銀髪の人がいただろう？」

「ええ、いたわ」

「彼は『セフィラ』と呼ばれる、この国に10人しかいない天使を召喚する神官の一人だ。とても、君たちが敵う相手じゃないんだよ」

それを聞いて、さすがにあたしも一瞬口を噤んだ。

『セフィラ』とは、この国が崇拝する天使を召喚する神官に与えられる称号。国に10人しかいないという彼らは、過去を捨てて天使と契約し、その力を使役するという。それは学校で最初に習う事で、全国民が知っている事だ。

もし彼らに反抗するならばそれはすなわち天使への背徳　あたしは、とんでもないものに喧嘩を売る事になる。

何より、あたしは天使が好きだった。もちろん悪魔も好きだけれど、莊嚴で流麗、華美な天使たちにだつてずっと憧れていたのだ。

「あの銀髪の人、美の天使ミカエルを召喚する第6番目のセフィラ、ティファレトと呼ばれる神官の一人だよ。昨日は夜だったから天使の力を使う事は出来なかったけれど……次に会えば、きっともう命の保証はないから」

そう言うと、リッドはずっと隣で話を聞いていたマルコのマントをさつと取り払った。

「あつ……」

マルコが焦った声を出す。

あたしも声を失ってしまった。

マントの下に隠されていたのは、すでに乾いてしまった赤いモノそれは、マルコの服の全面にべつとりとついた血だった。量が半端ではない。いったいこれは、誰の血なの？

マルコは、慌ててもう一度マントをはおり直したけれど、もう遅い。その光景はあたしの目にしつかりと焼きついた。

「これが、銀髪の彼に戦いを挑んだ結果だよ。一步間違えば、マルコは……もうここにはいなかったかもしれない」

「いったい何があったの、マルコ。怪我したの？　今は大丈夫なの？」

ざつと血の気が引いた。

マルコはじつと口を噤んでしまったけれど、代わりにリッドが口を開いた。

「グレイスの……君らの母親の残した羽根が、マルコの命を救ったんだよ。マルコの羽根が一枚なくなってるでしょ？」

マルコは返事をしなかった。ただ、ぎゅつと唇を噛み締めて俯いた。

こんなマルコは初めてだ。

「だから、君たちはまず自分の命を守るのが最優先。その他の事は、まだ先に考えるべきことなんだ」

リッドの声はあたしたち二人の心の奥底まで沁み込んでいった。彼は必死でマルコとあたしを守ろうとしてくれている。もちろん、父さんと母さんもそうだった。この羽根をくれた本当の両親だという人たちもきつとそうなんだろう。

戦う相手の強大さが分かっているから、その無謀さも困難もすべて承知しているから、こんなにも真剣に向き合ってくれるんだ。

でも、違う。

あたしは、そんな事を聞きたいんじゃない。

胸に刺さるほどの優しさを知っても、あたしは自分の中の想いと周囲の矛盾を消化できなかった。

ひとつ、深呼吸するとひんやりとした朝の爽やかな空気が体中を駆け巡る。朝日は既に山を離れて真っ青な空への階段を登り始め、少し離れた街道を人が行き来し始めた。

世界は、あたしの事になんて興味ない。

これから人生最大の我儘わがままを通して言うのに、あたしの心はこの上なく凪いでいた。静やかで穏やかで、どんな言葉でも受け止められる気がした。そして、どんなことを言われても絶対に揺るがない気がしていた。

この穏やかな心を見守るのは天界の長メタトロン？ それとも悪魔の王リュシフェル？

あたしには分からない。

天使の事も悪魔の事も好きだけれど、もしかするとこの気持ちには信仰とは少し違うのかもしれない。東の方の人たちみたいに、天使を崇め奉り、絶対的なものとして妄信することはないし、毎朝祈りを捧げるわけでもない。それどころか、困った時に口から洩れた名は悪魔のものでした。

あたしにとつての天使や悪魔は、もっと身近なものだ。強いて言えば、大空を翔ける鷹を見て心躍るような。

どうして、人は他人の信じるものを受け入れてあげられないのだろう。なぜ天使も悪魔も認めることができないのだろう。

あたしの事を守ろうとしてくれた二人を、まっすぐに見据えた。

「ねえ聞いて、リッド。マルコも」

何となくマルコに対して抱いていた違和感。リッドの言葉に頷けない自分。

その葛藤の理由がようやく分かった。

「あたしはね、守られたいわけじゃないの」

どういうわけかあたしは女の子に生まれてしまったから、世間一般的には守ってもらうのが自然なんだろう。

でも、あたしはそれを望んでいない。

「マルコには前にも言ったでしょう？ あたしは……強い。でも、何の力も持ってないわ。セフィロト国に楯突くどころか、父さんや母さんを救うことだってできない。でもね、あたしは守って欲しいなんて思っていない」

これはきつとあたしが騎士になりたい、と願った時に気持ちに似ている。

「何の力もないのなら、これから手に入れるわ。弱いつて言うならこれから強くなる。でも、その可能性を試す前に『守る』なんて言う体のいい名目であたしの事を囲って、閉じ込めないで！ どうせならあたしを『助けて』よ。強くなるために、力を貸して」

やっと分かった。あたしがずっと望んできた事。

先ほどと同じように、二人揃って呆けた表情でこちらを見ている様はどこか滑稽で……あたしは思わず笑みを漏らした。

「お願い。あたしは逃げたくもないし隠れたくもない、守られたくもないのよ」

とてつもない我儘を言っている事は分かっていた。

でも、ここを譲ったら、あたしはあたしでなくなってしまう。それじゃ、生きているなんてとも言えない。今度父さんに会えた時、胸を張れない。母さんに笑顔を向けられない。

人生の意味、なんて大層な事を言うつもりはない。

ただそれだけがあたしの中の真実で、望みで、すべてだっただけ。「街に戻りましょう。あたしはどんなに苦労しても、たとえ命が危険だって父さんと母さんの傍にいたい」

すると、じつと黙って聞いていたマルコがぽつりと言った。

「僕も……ミーナと同じだよ」

リッドが驚いてマルコを見る。

マルコは金色の瞳に強い意志の光を灯していた。これまでに見たことのないその色は、周囲の人を黙らせてしまうような不思議な強さを秘めていた。

「あの人はすごく強かったよ。あの、銀髪のヒト。僕は何も出来ないまま、ここ、刺されて、血がいつぱい出た。このまま死ぬのかなって思っただけど……」

マルコはマントを脱いで血に染まった腹部に手をあてた。

「銀髪の人がね、僕の事を『弱い』って言っただ」

やっぱりマルコは一度、酷い怪我をしたんだ。リッドの言葉からするとその傷はもうふさがっているようだけれど。

「『弱い』って言われて、僕、すごく嫌だった。強くなりたい、負けたくないってすごく強く思った」

「マルコ」

そんな風に自分の意思を表に出すことの少ないマルコが、それも強くなりたい、というあたしと同じ願いを持っていた。

「僕もミーナと一緒にだよ。僕は、強くなりたい。父さんが僕らだけ逃がさなくちゃいけないなんて事にならないように。あの銀髪の人、たとえセフィラだったとしても負けたくないよ」

マルコの言葉に、あたしは少し驚いた。

あたしはこれまで一度だってマルコがこんな風に自分の望みを口にすることなんてなかったから。こんな風に真剣に人に語りかける事なんて滅多になかったから。

同時に、とても嬉しかった。マルコがあたしをたった一人の兄弟として大切に思ってくれていた事が分かった時と同じように、あた

しはさらにもう一つマルコとの繋がりを手に入れる事が出来た。

「でも、戻るのは反対。またミーナが無茶するでしょ？」

「何だよ！」

そこまで言っていて、何で父さんたちの元に戻るのには反対なの？！

「最初に言ったよ。僕が一番大切なのはミーナだから。ミーナが危険な目に遭うのは、ダメ」

「だからあたしは大丈夫だって言ってるでしょ?!」

リッドは、そんなあたしたちを見てひどく苦しそうな顔をしていた。

こんな我儘を言えば、一番辛いのは彼だろう。

何も言えずに唇を結んだ彼が、目を細めた時だった。

突然、街道の方から地を鳴らす蹄の音が鳴り響いてきた。

はつとして振り向くと、街道の石畳を割らんばかりの勢いで黒馬が数頭、駆け抜けていくところだった。乗っているのはいずれも純白の甲冑に身を包んだ聖騎士たち。

のんびりと街道を歩いていた人々を蹴散らすようにして西の方角へ向かって行った。

「あたしたちの追手かしら？」

「いや、逃げる時簡単に細工してきたから、オレたちが街道を通ることはそれなりに誤魔化せただけ……」

リッドはそう言ってからあたしたちを木の根元に残し、街道を行く人々に話を聞きに行ってしまった。

残されたあたしたちは木の根元に並んで座る。昔からずっとそうしてきたみたいに。

「ねえ、マルコ。怪我した時……痛かった？」

「うん、痛かったよ。声がぜんぜん出なかったもん。指だって動かなかった。そしたら、羽根が光って、銀色の光が溢れてきて……そ

うそう、すごく、優しい声がした」

「優しい声？」

マルコの言葉に思わず聞き返すと、彼はにこりと笑った。

「うん。あれきつと、羽根をくれた母親だって人の声だよ。優しくてもすごく寂しそうな声だった。そしたら怪我してたところがだんだん痛くなくなつて、気がついたら治つてた」

「ふうん、不思議ね」

「あ、それから、何故だかわからないんだけどすごく体が軽くて、いろんなものが見えた」

マルコの説明は相変わらずよく分からない。

「いろんなものが見えた？ 体が軽い？ いったいどういう事？」

「銀色の力でさ、守られているみたいな感じだったよ。あの銀髪の人はその『加護』って呼んでたけど。それがあれば、なんとかあの人もそれなりの勝負ができるんじゃないかなあ？」

マルコはのんびりと言ったけれど、あたしはその言葉に反応した。「それ、どういう事？！ もっと詳しく教えないさ！」

もしかするとそれは、あの銀髪の人に対抗する術への糸口になるかもしれない。

そんな予感がした。

ところが、ずいぶん時間が経つというのに、道行く人に話を聞いてくると言つて行つたきり、リッドが戻つてこない。

不思議に思つてマルコと二人、街道の方へ近づいてみる。

すると、リッドは街道の端で話し込んでいた。相手の男性は道行く人なのだろうか、それにしてもリッドのリアクションが深刻そうだった。

マルコはあたしの方に目で合図すると、一人で気配を消し、リッドと話す男性のところへ向かつて行つた。

こういう行動はマルコの方が数段得意だ。考えられないくらいに身軽だし、気配を消すのもうまい。本当なら鹿にでもなるはずだっ

たところを、間違えて人間に生まれてしまったんじゃないだろうか？
うまく背の高い草に身を隠しながら、音も立てずリッドに寄って
行ったマルコの後姿を見てそう思った。

ミーナと目配せしてから、ゆっくりとリッドに歩み寄っていくと、少しずつ話の内容が聞こえてきた。

「じゃあ、やつぱり……」

「とりあえず救出を急ぐべきだな。一刻の猶予もない。すぐ動ける者は何人いるか分かるか？」

「オレが無理だから残ってるのはランプとブラシカ、それに……ダリア」

リッドとぼそぼそと話している人は、どうやらやつぱり知り合いらしい。

近くで見るとかなり背の高い人だった。リッドが見上げているという事は僕や父さんよりもずっと上だ。黒いマントを羽織っているために服は分からなかったけれど、彼から受ける威圧はとても一般人とは思えなかった。薄汚れた布を頭に巻いていて髪色はよく分らなかったけれど、まるで舞台俳優のような端正に整った顔立ちで、藍色の瞳が強い意志を持って輝いている。年は30前くらいだろうが、年齢を感じさせない凛とした空気を纏った男性だった。

「いったい何者だろう　いや、それを言うならリッドの素性だつて父さんの二番弟子だという以外はよく分かっているのだけれど、旧セフィロト国領に入ってしまったえば手が出し難くなる。その前に……ん？」

うまく気配を消して隠れていたと思ったのだが、リッドと話していた長身の男性はふいに僕が隠れている草むらを藍色の瞳で射抜いた。

あっちゃあ、ばれちゃった。

それにつられてリッドもこちらを見て、大きくため息をつく。

「マルコ、出てきて。そこで何やってるの？」

もう隠れても仕方がない。僕は草むらから立ち上がって二人のと

ころへ向かった。

が、長身の男性は大きく目を見開いて僕の顔を凝視した……そんなに変な顔してるかな？

長身の男性は藍色の瞳をいっぱいに大きくして呆然と呟いた。

「……ウォル先輩」

「ね、そっくりでしょ」

リッドが肩をすくめる。

ウォル先輩って言うのも僕の父親の名前なのかなあ？ アレイに店長にウォル先輩　僕の父親はいつたいいくつの名前を持っていたんだろう？

それにしても会う人会う人、みんな僕を本当の父親だって人と勘違いしすぎだよ。そんなに似てるの？

「この人、リッドの知り合い？」

「仕事仲間だよ。彼も君たちの両親の事は……長身の男性はじつと僕を見降ろした後、複雑そうな表情のまま口を開いた。

「俺はセイジだ。そうか、お前がマルコシアスか」

「僕を知ってるの？」

「噂にはな」

セイジ、と名乗った男性を近くで見ると、その体躯のよさと隠しきれない闘気に威圧された。

この人もリッドと同じ、おそらく凄腕の剣士だ。もしかすると同じように父さんの弟子なのかもしれない。リッドは二番弟子、といったからセイジが一番弟子なんだろうか？

それよりも、さっき二人が話していた事の方が気になった。

「ねえ、さっきの話……救出するとか言ってたけど、何のこと？」

そう言つと、あからさまに二人の表情が強張った。

こんな時、僕の勘はよく働く　それがいいことか悪いことかは分からないけれど。

「もしかして、捕まったの？　父さんと母さん」

いまや滅びたグリモワール王国の騎士団長だったという父さんなら、セフィロト国から手配をかけられていないはずがない。加えて母さんも地位の高い貴族だったという。

二人の沈黙が何より雄弁な肯定だった。

心臓が早鐘のように鳴り響いている。全身の血がざあっとひいた。とっさに声が出せなかった。

どうしよう。これがミーナに知られたら……

そう思った時、背後で何かが動く気配がした。

ああ、どうしてこんな嫌な予感ばかりが当たるんだろう。

振り向けば、強い意志を秘めた紫水晶アメジストでもってこちらを見つめる双子の相方の姿がそこにあった。

彼女はくるりと踵を返すと、馬を繋ぎとめてある木の方に向かって駆けだした。

「待つて、ミーナ！」

慌てて追いかけるけれど、もう遅い。

ミーナは小太刀で馬を繋いだ革紐を切断すると、ひらりと馬に飛び乗った。

「ミーナ！」

僕も慌てて馬の紐を解いてその背に飛び乗った。

揺れるポニーテールを追いかけるけれど、馬の選択を間違っ
てしまったらしく全然追いつけない。

草原を颯はやの如く駆けていくミーナ。

もう追いつくのは無理かと思った時だった。

「レラージュ！」

後ろから鋭い声が飛んだ。

刹那、僕が駆っていた馬の隣をふいに何かが通り過ぎて行った感覚があった。

そして呆れたような声がした。

「まったく、とんでもない娘だな……いったいどっちに似たんだ？」

「……！」

僕は目を疑った。同時に慌てて馬を止める。

高い嘶きと共に僕の乗っていた馬はその場に立ち止まった。

「放してよ！ 何するのよ！」

嘘だろう？

さっきまでずっと後ろにいたはずのセイジが僕の目の前にいて、ミーナの襟首を捕まえて掲げているのだ。しかもミーナが乗っていた馬の手綱を反対の手で握っている。馬が逃げようとすごい力で引っ張っているはずなのに、セイジは全く動じていなかった。それどころか強く引きつけて落ち着かせてしまった。

先ほどまでとは段違いの不思議なオーラが彼を取り巻いているのが分かる。その圧倒的な力は、まるで陽炎のようにセイジの全身から立ち上っている。

それに、レラージュって言う名前。

「破壊の悪魔」

僕がぽつりと呟いたのに気付いて、セイジは口角を上げた。

思ったよりも幼い感じのする、明るい笑顔だった。

レラージュって言うのは、グリモワール国時代に崇められていた『破壊の化身』と呼ばれる悪魔の名前だ。『レメゲトン』と呼ばれていた天文学者 セフィロト国でのセフィラに当たる役職らしいが契約の証のコインを使って魔界から召喚し、使役したという話をじい様がよくしてくれた。

セイジは何故先ほどその名を呼んだんだ？ そして、いったいどうやって全力で駆ける馬からミーナを引きはがし、馬を止めた？ マントが翻って見えた服は何の変哲もない、黒のアンダーウェアに皮製の上着を羽織っただけの身軽な装備だった。ただし、腰には長身にふさわしい立派な長剣が下がっている。両手に黒地に赤の紋様が入った指の部分のない手袋をしていた。

「放してっ！ 行かせてよ！」

「駄目に決まってるだろうが」

ミーナはじたばたと両手を振り回したけれど、どうやらリーチと力の差があり過ぎてセイジに触れる事も出来ず、得意の武術も役に立たないようだった。

あの人は一体、何者なんだ？

馬から降りて呆然と佇んでいると、後ろからリッドが追い付いてきた。

「ありがとう、セイジ。ミーナ、ダメだつて言っただでしょ？」

「もう何するのよ！ 父さんと母さんが捕まっただんでしょ？！」

こんな所にいる場合じゃないわっ……！」

「落ち着け。お前が一人で行ってどうにかなる事でもないだろう」
セイジの言葉で、ミーナはぐつと詰まった。

ふう、と息を吐いたセイジはぱつとミーナを放した。が、ミーナは逃げ出そうとはしなかった。

「どうやら自分の無力さは実感しているようだな」

その代わりに紫水晶をいっぱいに吊り上げてセイジを睨みつけた。馬から降りたリッドはほっとした顔をしてミーナに手を差し出した。

「だいじょうぶ？ セイジは乱暴だから……怪我はない？」

その言い分に、セイジは眉を寄せる。

「お前な……アキレア、俺が止めなかったらどうなったと思っているんだ？」

「うん、でも悪魔の召喚はやり過ぎ」

「手加減しただろうが」

「ミーナは普通の人間なんだよ？ しかも女の子だ。襟首つまみあげるなんて論外だよ、セイジ」

リッドが言うと、セイジはやれやれ、と肩をすくめた。

ん？ なんか今、会話の中にとっても不思議な言葉があったような……？

ミーナも同じ事を思ったようで、セイジを睨んでいた視線を緩めて僕の方を見た。

「ねえ、リッド」

ミーナが恐る恐る尋ねる。

「なあに、ミーナ」

「今、悪魔の召喚って言わなかった……？」

リッドはミーナの問いに満面の笑みで答えた。

「言っていないよ、ミーナ」

あれ、そうだったけ？ じゃあ、僕の聞き違いかな？

そう思ったけれど、ミーナは眉を吊り上げた。

「言ったわよ。確かにあたし、聞いたわ。『悪魔の召喚はやり過ぎ』って……聞き違いなんかじゃないわ。そうよね、マルコ？」

突然聞かれて僕は困った。

でも、きつとミーナが言うからそうなんだろう。

素直に頷く事にした。

するとミーナは腰に手を当て、セイジの方にびしりと人差し指を

突き付けた。

「どういう事？ 第一、あなたは何者なの？ リッドの知り合い？ 悪魔の召喚なんて、グリモワール王国時代のレメゲトンじゃあるまいし……」

しまった、止めておけばよかった。

気がつけばミーナはいつもの調子に戻っていて、口からは怒涛の勢いで文句が飛び出していた。

「しかも何？ 初対面で人の襟首つかんで何のつもりなの？ 挨拶もなしに。最初に挨拶くらいしなさい、ちよつと背が高いからって偉そうにしないでよ！」

えええ、それはちよつと違うんじゃない？！

ミーナの剣幕に、セイジは藍色の目を見開いた。

「……ほんと、誰に似たんだ？」

ぼそりとそう言つて、ミーナに睨まれる。

そしてもう一度ひよい、と肩を竦めてから軽く微笑んだ。

「俺はセイジ。アキレアの仕事仲間みたいなもんだ。猫みたいな扱いして悪かったな、ラストイミナ」

「セイジね。それは本名？ じゃないわよね。だってアキレアって言つのは確かリッドのコードネーム……そうよね、リディアルド＝ピース？」

それを聞いたセイジはぎよつとした顔をした。

「おい、アキレア。お前本名教えて……」

「ちよつと口が滑っちゃつて」

「……」

頭を抱えたセイジを尻目に、ミーナはさらに追い討ちをかける。

「じゃあ、次の質問。あなたは悪魔を召喚するの？」

ずばりと聞かれてセイジはうるたえたようだ。はたから見ても分かるほど目が泳いだ。

それを見逃すミーナではなかった。

「出来るのね。いったい、あなたは何者？ あたしが納得するまで

教えてくれなかったらどんな手を使っても父さんたちを助けに行くわよ？」

困った顔をしたセイジは、リッドと顔を見合せて大きなため息をついた。

どうやら二人とも観念したらしい。

「じゃあ、オレたちの事を話すから、ミーナはもうワガママ言わないでね？」

「いいわよ」

ミーナはあつさり頷いたけれど、僕は不安で仕方なかった。

だってミーナがああ強気の目をした時は、いつだってロクな事を企んでやしないんだから！

M - 12 相性

街道の傍ではあまりに目立ってしまうため、4人に増えた僕らは先ほどのように草原の中にぽつりぽつりと見られる大木の陰に身を寄せた。

いつの間にか太陽は頂点に近くなっており、図らずもお腹がなつてしまった。

それを見たセイジは彼の馬に括つてあつた荷物から炊事道具一式を取り出して昼食の支度を始めた。

思ったよりもいい人なのかもしれない。

と、思っていたらそれがミーナに伝わってしまったのか、問答無用で睨まれてしまう。　どうやらミーナは彼が気に入らないみたいだ。

マントを脱いだセイジは上着も脱ぎ、ハイネックのアンダーウェアだけになった。服の上から推察していた通りの鍛え上げられた体は、同性の僕から見ても惚れ惚れするくらいだった。ポケットのたくさんついた機能的なズボンからはナイフやら金属の串やらが次から次へと出てくる。

それが面白くてじっと見てみると、セイジはにこりと笑った。

「一緒にやるか？」

思わず頷くと、ミーナの冷凍視線が突き刺さった。

が、誘惑には勝てない。

僕はセイジの隣に座り、ナイフでいい大きさに切られた干し肉を串にさし始めた。これを焚火で簡単に焼くつもりらしい。その間に彼は、隣で小麦粉を練って簡易パンを作り始めていた。

「これは普通のパンと違ってそれほど寝かさなくても作れる。焼くんじゃないか茹でるのがポイントだ」

「へーえ」

セイジは馴れた手つきでパンを丸めていった。

肉を焼きながらそれをじーっと見てみると、セイジはふいに唇の端をあげた。

「お前、顔は問答無用で親父似だが、中身は完全に母親似だな」

「……？」

首を傾げたが、セイジは笑うばかりでそれ以上教えてくれなかった。

ミーナはその間もずっとリッドを問い詰めようと努力したらしい。僕とセイジがそろって二人の元に昼食を運んだ時には、すでにリッドは死にそうな顔をしていた。

ミーナは僕に向かって嬉しそうに言う。

「リッドってあたしたちの兄弟子だったのよ、知ってた？ マルコ」
「うん」

「何だ、知ってたの」

ミーナは少しがっかりしたような顔をした。

「セイジもそうなのかしら？」

「俺は違う。そもそも使う剣術の系統がこいつとは全く違うからな」
確かにリッドとセイジじゃ体格も力も全然違う。同じ剣術を使うとは到底思えない。

「まあいいわ。これで全員そろったし、話してもらうわよ。いったいあなた達は何者なの？」

ミーナのストレートな問いに、リッドとセイジは困ったように顔を見合せてポリポリと頭をかいた。

やがて、リッドが口を開く。

「僕らはクラウドさんが指揮権を持つ隠密部隊のメンバーだよ」
「隠密部隊？」

僕とミーナが首を傾げると、リッドは困ったように笑った。

「クラウドさんもダイアナさんも元々グリモワール国の貴族だった事は聞いたよね？ その時代の名残で、今でも彼らを陰から守る組織が存在するんだ」

その続きはセイジの方から語られる。

「本当なら俺達のような隠密組が、こんな風に表立って行動する事はないんだが、今回は緊急事態だった。手があいていて、さらにはセフィラを相手にできる者となると片手で数えられるほどしかない。そこでアキレアが直接動いたわけだ」

「本当ならセイジは君たちに会わず、こっそり隠れてセフィロト国を攪乱する予定だったんだけど……見つかったからね」

リッドはそう言って笑った。

父さんたちが所有していた隠密部隊　そんなものの存在、全く知らなかった。グリモワール国が滅びた後も組織は解散せず活動を続けているらしい。蔭ながら、父さんたちを守るために。

「これで満足？」

リッドはそう言って肩をすくめたが、ミーナは首を横に振った。

「まだよ。まだ、悪魔の召喚の話を聞いていないわ」

「やれやれ、しょうがないねえ」

話してあげて、とリッドが促すと、セイジは不本意だという表情を隠そうともせずのため息をついた。

ミーナはそれを見てまた不機嫌そうな顔をする。

どうやらこの二人、相性があまり良くないらしい。どうしてだろう、セイジはいい人だと思うんだけど。僕から見てもすごくカッコいいと思うし、強そうだ。ミーナは強い人が好きだと思ってたけど、違うのかなあ？　でも、リッドの事は気に入ってるように見えるんだよね。

うーん。

首を傾げていると、セイジはぼそり、と呟いた。

「俺は悪魔のコインの所有者だ」

ん？　何だって？　コインの所有者？

えーと。

「コインって……グリモワール国の天文学者が作ったっていう、悪魔との契約の証のコイン？」

半信半疑で聞くと、セイジはこくりと頷いた。

「ああ、初代国王のユダ・ダビデ・グリモワールが、稀代の天文学者ゲーティア・グリフィスと共に、魔界から72の悪魔を召喚した。その証に、創ったコインのことだ」

「?!」

レメゲトン、と呼ばれたグリモワール国の天文学者が悪魔を魔界から召喚する時、コインを使用したという。今ではもはや伝説ではないが、それはかつて72あり、18年前の戦争の際もレメゲトン達はそれを使って天使と壮絶な戦いを繰り広げたそうだ。

セイジは、そのコインを持っているという。

「……ほんとなの？」

ミーナが恐る恐る聞くと、セイジはさらにぼつりと続けた。

「信じる信じないは勝手だ。が、話せと言ったのはお前の方だ」

「セイジはオレたちの幹部の一人なんだ。組織の中で悪魔を召喚するのはセイジ一人だ」

「幹部なのはお前も一緒だろう、アキレア」

「うん、まあ、そうなんだけどね」

あはは、リッドは笑ったが、僕らは口を開けて固まってしまった。

セイジが悪魔のコインを持ってるって？ しかも、契約して使役するって？

現実味のない話だった。

だってグリモワール王国は18年前に滅びている。その時にほとんどの天文学者が命を落としたはずだった。メフィア・ファウス^{レメゲトン}ト、アレイスター・クロウリー……名を馳せたレメゲトン達はもういない。悪魔のコインだってほとんどなくなってしまったはずだ。それなのに、目の前にいるこの男性はそのコインで破壊の悪魔レラージュを召喚するという。

「ああもう、何で俺はこんなにペラペラ喋ってんだ？」

「ほんとにね。どうしたの、セイジ」

「半分はお前が喋らせたんだろうが！」

セイジはそう叫んだものの、すぐ溜息をついてがっくりと項垂^{うなだ}れた。

「もう半分はやっぱり……お前たちの顔のせいだろうな」

そう言われて、僕とミーナは顔を見合せて肩を竦めた。

みんなそう言うけど、本当にそんなに似てるのかなあ？

ミーナにそっくりな母親と僕にそっくりな父親。グリモワール国時代の重要人物で、どうやらこれまでの感じからするとずいぶん慕われていたらしい。敵国からはかなり恨みをかけているようだ。

何だかとても不思議な感じがした。

セイジ達はそれっきり、父さんたちの話題には触れなかった。

それはいいのだが、ミーナまで何も言わないのはおかしい。ミーナがこんな事で諦めるはずないんだ。いったい、彼女は どうするつ

もりなんだろう？

さすがに追手が迫っている今、街にはもう入れない。だから街道を少し外れたところで野営する事にして、草原には珍しい大木の陰に馬を寄せた。僕には木の名前なんて分からないけれど、いっばいに手を回しても抱えきれない太い幹の大樹は、僕らを守るようにどつしりと構えていた。

準備をするリッドとセイジから少し離れて、僕はミーナを問い詰めた。

「ねえ、ミーナ。何を考えてるの？」
するとミーナは、ニコリ、と笑った。

焚き火の明かりがミーナの顔を照らしだしていて、いつもよりずっと大人びて見える。紫水晶アメジストが穏やかな灯りを包有していてどきりとした。

「あきらめてないんでしょう？ どうする気なの？」

何も知らないまま行動されるより、事前に知っておいた方が対応できる。

そう思ったのだが、僕は少しか自分を過信していた。

だって僕はミーナの命令を断る事なんて、出来やしないのに！

「マルコ、あなたはリッドから目を離しちゃだめよ。あたしは絶対セイジについて行くから」

「……どうということ？」

僕が首を傾げると、ミーナは残りの二人に聞こえないようひそひそ声で、でもはっきりと主張した。

「二人は、父さんたちが捕まったって言ってたわ。それも、救出の手が足りないらしいわ」

「うん、そう言ってた」

「二人とも幹部だって言ってたわ。マルコの話と総合すると、あの二人のうちどちらかが父さんの救出に向かうはずよ。おそらく、今夜中に セイジの可能性が高いわね。あたしはセイジについている事にするわ」

「もしかして、ミーナ……」

分かってたはずだ。双子の相方があんなことで諦めるはずもない
って。

「マルコはリッドから目を離しちゃ駄目よ？」

「え、僕？」

思わず大きな声を出すと、即刻ミーナの手が僕の口を塞いだ。

「静かになさい！ 気づかれたらどうするの？！」

幸い彼らは気づかず、テントの準備をしているようだったけれど、
ミーナはふう、とため息をついて腰に手をあてた。

「マルコ、あなたは本当に父さんたちが捕まったって聞いても何も
しないつもり？」

「それは」

「あたしは嫌よ。知った以上、安寧の地を目指して一人逃げる事な
んでできないわ」

ミーナはきつぱりと言い切った。

「いや、確かにそうなんだけど、そんな事をしてまたミーナが危険
な目にあったりしたら……」

銀髪の人に受けた刃の痛みを思い出して、腹部をぐつと押さえた。
今回は運良く命を拾ったけれど、次はどうなるか分からない。

『死ぬかもしれない』と思った瞬間の恐怖は本物だった。

「じゃあいいわよ。あたし一人で行くわ」

「ミーナっ！」

やっぱり僕には、双子の相方を止める事なんてできないんだ。

僕にはなんの力もないし、少々ぼんやりしてるし、何の役にも立
てない。それはきつとミーナも一緒だ。

それでも何か行動を起こそうとする事の出来るミーナがとても羨
ましかった。だって僕にそんな勇氣はない 僕はいつだってそう
だった。

欲しいもの、好きなもの、大事なもの。僕はいつだってそんなも
のを諦めてきた。失くした時に辛いから。壊れた時の喪失感を味わ

うのが怖いから。それなら大切なものなんて、最初っからいらない。
「どうして、ミーナ……」

その唯一の例外がミーナなのに。ミーナにだけは泣いて欲しくないのに。誰にも傷つけさせないと心の底から主張できるのに。

何故ミーナはその小さな手で、沢山の物を守ろうとするんだろう。自分の危険も顧みず自分の願いを口にすることができのだろう。

「マルコ？」

突然黙ってしまった僕を訝しむようにミーナが覗き込んでいる。それが分かっていたのに、僕はミーナの顔を見る事が出来なかった。

それを後悔したのは、次の日、目が覚めてからだった。

思った以上に疲労していたためにぐっすりと眠りについた僕は、朝日が昇るくらいに、リッドの切羽詰まった声で起こされたのだ。

「マルコ、起きて！」

寝起きでぼんやりする頭を抱えて起き上った僕にリッドはこう告げた。

「ミーナがいらないんだ！」

一瞬で、目が覚めた。

あたしの睨んだとおり、真夜中に人の動く気配があった。
きつとセイジが出発するんだ。

そつと起きあがると、隣ではマルコが安らかな寢息を立てて眠っていた。

昨日マルコはきつとあたしに呆れたに違いない。ここまできてもまだカトランジェに行くことを頑なに拒否したんだから。危ない目に遭わせたくないって、あんなに心配してくれたのに。

「ごめんね、マルコ」

それでもあたしは自分の心に嘘をつく事は出来ない。

「先に行つて待つてる」

この優しくて、ほんの少し臆病な双子の片割れを連れて行くには、多少無茶をしてもあたし自身が動くしかない。

きつとマルコならあたしの後を追ってきてくれるはず。

そして、リッドも。あたしがセイジにくつついて行けばきつとりッドも放つておけないはず。マルコを連れて、後からついてくるはずだ。まだ出会ってからほんの少ししか経っていないけれど、彼があたしを守るためならきつと遠くからでも飛んできてくれるだろう。つてことを期待していた。

どうしてだろう。彼の屈託ない笑顔が瞼の裏に焼き付いている。

「ごめん、リッド」

こつそりと闇に呟いて、あたしは寢床を離れた。

マルコはどうまくはないけれど、あたしだってそれなりに気配を消すことができる。

そつと繋いである馬に近寄った。眠っていた馬をそつと起こし、手綱を取る。

「少しだけ、あたしに力を貸してね」

ぼんぼん、と首を撫でると、その黒馬は分かった、と頷くように首を振った。その馬にひらりと乗って、息をひそめた。

ぼそぼそ、と小さな話し声がする。きつとリッドとセイジだ。何を言っているかは分からないけれど、きつと打ち合わせでもしているんだろう。

あたしはそつと馬を進めた。

あたしにもマルコみたいな視力があつたらよかったのに　闇の中では目を凝らしてもほとんど何も見えなかった。

彼より先に街道にたかなくちや。戻れないところまで先回りしなくちや意味がない。

「急いで」

野営地を少し離れてから、手綱をとって足を速める。

柔らかい草に覆われた地面を踏みしめる鈍い蹄の音と、草を蹴散らす音だけが響いている。周囲は一面の闇。握った手綱と頬を擦って行く風、それから全身に伝わる振動だけがあたしの感覚のすべてだった。

ふつと空を見上げて方角だけ確認する。

異国の王妃の名をとったカシオペア座を目印に、街道に突き当たるのを待った。

が、いくら駆けても街道が見えない　当たり前だ、だって周囲は闇に包まれていて何も見えないんだから。

やばい、このままじゃセイジを先回りするどころか……

あたしは一度馬を停めた。

すでにどっちから来たかも分からない。

心臓の音が耳元で響く。冷汗が背中を伝った感じがあつた。

「……どうしよう」

瞬きしても視界が変わらない、恐ろしい闇があたしに迫ってくる。それが怖くてギョツと目を閉じた。

そうすると肌が鋭敏になってひやりとした空気の流れが感じられた。風に揺れる草木の音があたしを包み込んで駆け抜けていく。耳元で響いていた自分の心臓の音は遠ざかって行って、呼吸が穏やかになる。

まるで自分が宙に浮いてしまったかのような感覚にあたしは酔いしれた。

そしてその時、あたしの感覚に触れるものがあった。

視覚とも嗅覚とも聴覚とも違う、全く別のもので掴んだその感覚は、確実にあたしの中に入り込んできた。何も見えないことが逆にあたしの感覚を最大限にまで広げている。

「何だろう、この感じ……」

それは、ある方向から少しずつ『何か』が近づいてくる気配だった。

どこか懐かしいような、不思議な感覚。

それだけでなく、その気配はあたしの腰のあたりからも感じ取れる。

その感覚を頼りに手を伸ばすと、腰のベルトに差した羽根が手に触れた。極上の手触りが指の先をくすぐり、少なからずあたしの心を落ちつけた。

そうすると、ある一つの気配が感覚の中で収束した。

「人じゃないものの気配だ……」

実際に目の当たりにしたセイジの力 全力で走っていた馬と同じ速さで地を駆け、乗っていたあたしを馬から引き剥がして、さらに手綱を人間らしからぬ力でもって無理やり引いて止めてしまった事 を考えると、悪魔のコインを持つ、というのはどうやら嘘ではないらしい。

マルコとリッド、セイジの話から推測すると、悪魔の『加護』を受けると身体能力が向上したり、怪我を治癒出来たりと、悪魔の力の一端が使えるようになるのではないかと予想できる。

きつとこの羽根は、その加護の一部。

それと同じ、でももっと強い気配が近づいているという事は、コ
インを持ったセイジの気配に相違ないだろう。

それも、この気配は一度気付いてしまえばもう拭えないほどに深
く、あたしの中に入り込んできた。

「見つけた」

この力があればあたしは距離を置いてセイジを追いかける事が出
来る。

もう一度目を開けて闇を確認し、手綱をとった。

R - 1 2 追跡（後書き）

明日からまた多忙な期間に入るため、ストック分をここ数日ですべて更新しました。おそらくいったん更新をお休みすることになると思います。

復活時期は分かりませんが、できる限り早く戻ってきます（最長で7月初旬まで無理、ということになりますが……汗）

次に更新した時も、よろしくお願いします。

0 8 5 ・ 1 5 早村友裕

適度な距離をとりつつ、セイジの馬を追う形になった。

まるであたしの感覚を掴み取ったように、馬も足を進める。何も見えない暗闇でもまるで見えているような足取りで軽快に駆けて行く。

セイジやリッドには気づかれていないかしら？

ただそれだけが心配だった。少なくとも戻れない距離　セイジがどこまで進むかは分からないけれど、少なくとも元グリモワール東都トロメオまでは確実に戻るだろう。

街道沿いに行くかは分からないけれど、少なくとも丸二日は走り通しのはずだ。

「がんばれる？」

走りながら馬の首を撫でると、大丈夫だという風に鼻を鳴らした。頼もしい限りだ。

最初にリッドの馬車をひいていた2頭のうちの1頭、美しい毛並みの黒馬だ。ずっとリッドが乗っていたのだが、暗闇の中で最も走れそうな馬を選んだ結果、勝手に連れてくる結果となってしまった。とはいえ、セイジの馬だって彼の立派な体躯に見合う駿馬だ。

あの口の悪さと性格の悪ささえなければ、見とれてしまうような端正な顔立ちの美男子だし、すらりと引き締まった長身も人目を惹く。それもかなりの腕を持つ剣士らしい　最もあたしが好みとするタイプなんだけど。まるであの伝説のレメゲトン、アレイスターⅡクロウリーのよう。

でも、あの藍色の瞳を思い出ただけで苛々する。

ほとんど初対面だって言うのにあの物言い！　あの態度！

「腹立つったらありやしないっ！」

そう言えば、ずっと頭に布を巻いていたけれど、彼の髪色はいったい何色なんだろう？

「もしかしてハゲとか？」

本人が聞いたらあたしたちの関係はさらに悪いものへと変化してしまうだろう台詞を吐いて、あたしはまた闇に視線を移した。

あたしはセイジの気配を追って、一晩中走り続けた。

やがて背後の草原を朝日が割ってくる。風のほかには何の感覚も音もなかった世界に少しずつ息吹が戻り始め、動物たちの生命活動も始まったようだ。

街道の先に小さな街が見えてきたため、あたしは馬の歩を緩めた。明るくなつてくると、だんだんとあたしの感覚も鈍くなってきた。光や音が悪魔のコインの気配を薄れさせてしまっている。

「……セイジはあの街にいるみたいね……たぶん」

しばらく休むつもりかもしれない。夜中走り通しだったのだ。あたしだってもうくたくただった。

でも、ここで気は抜けない。おそらく、追手はこの辺りまで迫っているだろう。

馬から降りてこっそりと街に近付き、入口付近を観察する。どうやらそこに聖騎士団の姿はないようだけれど、堂々とこのまま街に入るわけにはいかない。

さて、どうしようかと迷っているうちに、街に紛れていったセイジの気配を見失ってしまった。

ますますもってどうしたらいいんだろう。出てくるまでここで見張つていようか？ それとも、何とかして街に入つて……。

街から見えない位置に馬を隠し、一息つく。

馬も疲れていたんだろう、木陰に留めてやるとすぐにしゃがみこんだ。

「ごめんね、ありがとう」

つられてしゃがみ込んだ時、唐突な眠気があたしを襲ってきた。

あ、まずい。このままじゃ……

立ち上がろう、と思ったがもう遅かった。

馬の腹に倒れ込むようにして頭をもたげたあたしは、すぐに睡眠の波に飲み込まれていった。心地よい風が吹き抜ける草原で、少し獣臭い馬の腹に頭を預けて。

夢の中で、優しい声がした。

心の底まで響いてくる深いバリトンがあたしを優しく包み込んだ。

「……本当にすまない」

その声はすぐ近くで響いている。

胸を裂くその声は酷く悲痛で、心の奥に突き刺さった。あたしの中の、最初の記憶。

あなたは、だあれ？

力強い腕に抱かれ、安心しきったあたしの心は満たされていた。

日中の日差しの強さで目が覚めた。

はっと起き上ると、まず目に入ってきたのは信じられない光景だった。

「なっ、なんでセイジがここにいるのよー?!」

「何度起こしても起きなかったのはお前だろうが」

温かさの欠片もない声に、一気に目が覚めた。

「っ、だっ、セイジっ、いつから……気づいてっ……?!」

「最初からだ」

寛いで水筒の水を飲んでいるセイジに、怒りが爆発する。

最初から、最初からって事は、真っ暗な中あたしが後ろから追いかけているのを知っていてあの速度で一晩走りとおしたって言うの

……?!

「アキレアは気づいていない、あいつは変な処で鈍いからな」

しかもこいつはあたしがついて来るのを止めなかった。

「……あなたにいったい、何を考えてるの?」

「別に何も」

「あたしを追い返してカトランジェに送ろうとは思えないの？」

「そうされたいのか？」

「それは嫌だけど……」

てつきり見つかったら追い返されると思っていたあたしは、なんだか拍子抜けした。

水筒の水を飲み終えたセイジは真っ直ぐにあたしを見つめた。

「ついて来るならそれなりの覚悟を決めろ。そうすればそれなりにサポートしてやる」

「つまり、父さんたちの元へ連れて行ってくれるっていうこと？」

「大人しくしているならな」

あたしはびっくりして硬直してしまった。

「本当に連れて行ってくれるの？」

「何度も聞くな。置いて行くぞ」

「あつ、待つてよ！」

「本当は休んでいる暇などない。食料と水を調達したのだから、すぐに行くぞ」

あたしは慌てて馬を起こし、セイジを追って駆り立てた。

R - 13 露呈（後書き）

長らくお待たせしました。
更新再開、かもしれません。

一瞬でも気を許しかけたあたしが馬鹿だったわ！

セイジはあたしの体力などお構いなしに、出来る限りの速度で馬を駆っているようだった。とても他に何を考えている余裕もない。ずっと馬に乗っているから全身の疲労が酷い。

太陽が傾いて朱に染まっても、セイジは馬を止めなかった。

ずいぶん東までやってきた。今晚中走り続ければ、あたしたちの街まで戻るくらいの速さだろう。それでもずっと周囲に広がるのはただの草原だから自分がいまいつたいどこにいるのかなんて事も分らない。

少しは止まったり休んだりして事を知らないの？！

と、思っていたらセイジは少し速度をゆるめて、追っていたあたしの横に並んだ。

「太陽が落ちる前に少しだけ休もう。夜中は休まず走りたい」

「……分かったわ」

あたしも歩を緩めた。

疲労と眠気で体が傾きそうになる。が、この男に弱みを見せたくない、という一心で踏みとどまった。そんな事もきつと彼にはお見通しなんだろうけど。

美しく整った唇の端を少し上げて、馬の足を停めた。

「疲れたか？」

「疲れてなんていないわよ」

強がってはみたけれど、息の荒さを隠しようがない。それどころか、馬から降りると地面にがくりと膝をついてしまった。もう足が立たない。

ああもう、悔しい！ こいつにこんな所見せたくない！

と、思っていたらぐいつと腕を掴まれて立たされた。リッドに支えられた時とは違う、強引な力に思わず頬を膨らますと、セイジは

どこか楽しそうに笑って見下ろしていた。

「どうした、礼くらい言え」

「……」

ありがとうなんて言いたくない。目を逸らすと、押し殺したような笑い声が聞こえた。

思わず睨むと、セイジはさもおかしそうに笑っていた。

セイジから渡された水筒を手に、あたしは草原に座り込んだ。

彼は隣で佇み、周囲の様子を窺っている。

「ねえ、セイジ」

「何だ？」

「悪魔のコイン、見せて」

そう言つと、セイジは少し迷つたが、腰のベルトに括つてあつたチェーンを外してこちらに寄越した。そのチェーンの先には掌で握つてしまえるサイズのコインが一枚括つてあつた。銀の縁にはめ込んであるがコイン自体はくすんだ黄金色で、どこか禍々しい雰囲気があつた。

「破壊の悪魔レラージュのコインだ。グリモワール王国時代に作られたもので、全部で72枚あるがいくらか失われている」

あたしが本で読んだ事が本当なら、レラージュは緑のフードをかぶつた幼い姿の射手らしい。顔を見たことのある者がおらず、また使役したレメゲトンの人数も極端に少ない。その力はほとんど謎に包まれているという悪魔だった。その矢に中ると、傷口が腐り落ちるという噂もある。

「これ、どうしたの？ どこで手に入れたの？」

「……業務秘密だ」

業務秘密？ 怪しいものね。

あたしはコインをセイジに返して、体力回復を図るべく口を閉ざした。

するとセイジは、まるで世間話でもするようにさりと云った。

「これからすぐトロメオに向かう。クラウドさんとダイアナさんは現在そこに監禁されているらしいからな。うまくいけばそこで救出、無理ならば旧国境のカーバンクルで待ち伏せする」

ん？ いまとても重要な事を言ったような？

あたしは思わずとてつもなく上の方にある彼の顔を見た。夕日の赤に照らされた横顔は端正で、ため息が出るほど美しい。セイジにはきつと赤が似合う。燃え盛る炎のような紅蓮。

「はつきり言って人手が足りない。この状況で動けるのが俺とアキレア、それにアキレア配下のダリア。主要戦力が3人、後は最初から入り込んでいるブラシカが動けるか動けないか……何より、俺達は裏部隊だからあまり派手な行動は出来ない。残念ながらお前達を全面に押し出すしか誤魔化す方法はなさそうだ。せいぜい働いてもらおう」

「何の話をしてるの？」

思わず聞き返すと、セイジはちらりとあたしを見下ろして、また視線を草原に戻した。

「作戦は先にブラシカが練っているはずだ。合流地点は旧東都トロメオ正門跡、そこでブラシカと落ち合う事になっている。他のメンバーもトロメオに集う」

「ブラシカ、ていうのも同僚なの？」

ところがセイジはまたもあたしの言葉を完全無視して続けた。

「アキレアはお前達を使うと知れば確実に反対するだろうからな。どうにもあいつは甘い」

「ねえ、何のことよ！ あたしを無視しないで！」

立ち上がってセイジの正面に回ると、藍色の瞳をまっすぐに見つめた。

彼は一瞬驚いた様子を呈したが、すぐにまた唇に笑みを湛えて視線をずらした。

「その瞳でこっちを見るな。その顔を俺に向けるな。どうにも落ち着かん」

「……！」

口元は笑っているが、目は笑っていないかった。それどころか、声がひどく苦しそうで胸をキュツと締め付けた。

「……いたいもう……何なのよ。」

あたしは叫ぶ気もなくして口を噤んだ。

「……ラストイミナ」

ふいに名を呼ばれて、顔をあげる。

すると、辛苦を映じた藍色の瞳があたしを見下ろしていた。

「覚悟はあるか？」

「……いたい何の覚悟だろう。」

そんなあたしの気持ちが通じたのか、セイジは滔々と語った。

「お前はまだクラウドさんたちの事をよく知らないはずだ。俺達のような隠密部隊を抱えていた事すらも知らなかったのだから……それをすべて、知る覚悟はあるか？ 受け入れて、ついて来る覚悟はあるか？」

「あるわよ」

考える前に即答していた。

「知る覚悟も何も……あたしたちには知る権利があるはずよ。今みたいに知らないままできて危険な目に遭ったりするのはもうたくさん。どんな事であろうと、事実を教えて欲しい。もうあたし、何も分らない子供じゃないのよ？ 本当の両親があたしたちを捨てたのが『幼かったから』っていう理由一つなら、もうそんな言い訳は通用しないわ」

だって、知らなかった。父さんたちが、今は亡きグリモワール王国の重要人物だったなんて。本当の両親が第一級のお尋ね者だったなんて。こんな風にセフィロト国から追われる日が来るなんて知ろうとしていなかった。

あたしたちはきつとそうやって育てられた。何も知らないように、幸せな時を刻んでいけるようにとたくさんの人たちが守ってくれていた。

じゃあ、今度はあたしが父さんたちを守ろうとしてもいい番じゃない？

そのために、力が欲しい。

「あたしは父さんや母さんやマルコと一緒にいたいだけよ。それ以外、望んだ事はないわ」

セイジは、しかしながら、それ以上何も言わなかった。

ただ分かったのは、いまあたしたちが向かうべきは旧東都トロメオで、そこで仲間の『ブラシカ』という人と合流するのだという事。そこで父さんたちの状況が報告され、救出作戦が練られるとの事。

要するに今は、トロメオへ向かうしかないということだ。

でも、あたしはやっぱり知らなかった。

旧東都トロメオで、もう後戻りできないような大きな運命の渦に巻き込まれて行くのだという事を

ミーナがいなくなってから、リッドの顔からは完全に笑顔が消えていた。

朝から晩まで馬を駆るけれど、ミーナとセイジに追い付ける気配は全くなかった。それなのに、もう目の前には旧東都トロメオが迫っていた。

僕らが住んでいた街からほんの少し南に下った場所にあるこの都市は、もともと堅固な城壁を持つ城塞都市であつたらしい。18年前の戦争で城壁も門もすべてが破壊されてしまったため、今でもその瓦礫が外堀を埋めたままになっている。

遠くから見てもその大きさが分かる。

グライアル平原のほぼ中央に佇むそれは、まるで今は亡きグリモワール王国の墓標のようだった。

「……とうとう来ちゃったな」
ぼつり、とリッドが呟く。

セイジがこの旧東都トロメオで仲間と落ち合う手はずになつている、というのは道すがらリッドが教えてくれた事だ　ミーナもきつとこの辺りにいるに違いない。

「ねえ、マルコ。もしも、もしもだよ？　クラウドさんが、君たち兄弟に内緒でとんでもない事を企んでたつて分かったら、どうする？　協力する？　それとも……」

リッドはそこで口を閉じた。

なんだかよく分からない。でも、リッドやセイジのいる部隊を全く僕らに気付かせなかった父さんの事だから、他にもいろいろやっていたつておかしくはない。何しろ僕らは父さんと母さんが元グリモワールの貴族だつてことすら知らなかったんだから。

「分かんないよ、リッド。だって僕は何も知らない。いったい父さんが、リッド達が何をしているのか知らないのに協力するかなんて

分かんないよ」

「うん、そうだね……そうだよね」

そう言って笑ったリッドは、とても辛そうだった。

いったい何が彼をそうさせているのか僕には分からなかったけれど、これだけは分かっていた。

きっともう、僕もミーナも日常には戻れない。父さんと母さんを無事に助け出せたとしても、僕らの存在はセフィロト国に知れてしまった。

僕はミーナより少しだけ状況を理解しているつもりだ。

国に追われるのがいっただいどういうことか　敵を迎撃し続けるか、国外逃亡するか、おそらくその二つしか選択肢はない。

「とりあえずブラシカと合流してしまおうか。きっとあの門の辺りで待ってるはずだ。おそらく、セイジやミーナと一緒に」

平原に取り残された戦の遺物。崩れ落ちた外壁と焦げた門跡。これからの僕らの進む未来を不安にさせるようなそれは、僕の瞼の裏にはつきりと焼きついた。

敵を倒し続けるか、逃げるか　その時に僕はまだ、3つ目の選択肢がある事に気付いていなかった。

そう。一番当たり前で、一番難しい、たったひとつの答え。父さんや母さんが、まだ見ぬ本当の両親が僕らに安寧を与えるためにずっとずっと追い求めている結論がある事を、僕は見落としていたんだ。

それを知った時、もう後戻りできない状況に追い込まれているのだと気づいたんだ。

門に近付いて行くと、都市入口の両脇に聖騎士団がずらりと並んでいるのが見えた。

あれではトロメオに近付く事も出来ない。

「ま、予想はしてたけどね」

リッドはそう言うと、一度馬を停めた。

石畳の街道は西に近付くにつれてだんだんと損傷がひどくなっていき、トロメオへと続く道は完全に轍で出来た土の道と化していた。トロメオは王都ユダと違い、実際に戦場になった土地だ。そのため、昔は旧東都トロメオと旧王都ユダをつなぐ立派な街道だったものが破壊されたままになっているのだった。

佇んだ僕らの横を、荷馬車が何台も通過していった。

いったいどうするんだろう、と思っているとリッドはトロメオの門を越えず、崩れた城壁に沿って裏手に回っていった。

いくらか進むとそこは戦争で職を失った人々や孤児たちが屯する^{たむろ}ほぼ野ざらしの集落になっていた。棒を何本か立てて薄汚い布をかぶせただけ、夜露をしのぐために作られたのであろうテント状のものが林立している。それはあたかも一つの街のように中心を貫く街道に沿って並んでいるのだった。

そんな中を馬に乗って歩いたのでは酷く目立ってしまう。

と、思っていたらそのテントの一つから小さな影が飛び出してきた。

「アキレアさんっ！」

幼い声。短い手足をぱたぱたとさせて駆けてきたのは、まだ幼い少年だった。歳は10にも満たないだろう。顔も手も土に汚れて真黒だが、大きな琥珀色の目がきらきらと輝いている。

「アンバ、久しぶりだね」

馬から降りたリッドは、駆け寄ってきた少年を軽々と抱き上げた。少年は嬉しそうに歓声を上げてリッドの首に手を回す。

「セイジさんはもう来てますよ。一緒に来たお姉ちゃんがすぐに眠っちゃって……案内します」

幼い割にはきはきとしつかりした敬語が出てきた事に驚いた。

が、それより何より『セイジと一緒にいたお姉ちゃん』という単語にざわりと全身が総毛だった。

はやる気持ちを抑えて、リッドと二人、少年の案内で小さなテン

トの一角に入った。

入り込んだテントの中はひどく狭かった。僕もリッドも腰を曲げないと入れないくらい天井　　といってもただの薄汚れた布なのだが　　からランプが一つ下がっている。面積だけなら大人が優に10人は座れるだろうが、いかにせん高さがない。

土埃の匂いが立ち込める中、麻を敷き詰めた簡素な床には見覚えのある黒髪が零れていた。

「ミーナっ」

彼女の瞼はしっかりと閉じられている。

慌てて駆け寄って頬に触れ、体温を感じてほっとした。呼吸も安定しているし、どうやら眠っているだけの様子だ。

「大丈夫、少し無理をしたせいで疲れて眠っているだけだ」
後ろからセイジの声がした。

はっと振り向くと、そこには燃えるような紅髪をした長身の美丈夫が立っていた。炎を思われるような紅蓮の髪、深い藍色の瞳、黒衣をまとう引き締まった体躯　　女性が10人いたら10人とも振り返るだろう。

何しろ、同性の僕が見ても見とれてしまったくらいだ。

「それでも、文句ひとつ言わずについてきた。女の身で、大した奴だ」

ずっと頭に巻いていた布をとり、目立つ紅髪をあらわにしたセイジは、天井に当たらないようかがんだまま歩いてきて僕の隣に腰を落ちつけた。

びっくりしている僕の視線に気付いたのか、軽く首を傾げる。

「……綺麗な髪だね」

何とかそれだけ言うと、セイジはひどく微妙な表情をしてこう言った。

「それは……女に言うセリフだぞ、マルコシアス」

お前はきつと女つたらしになるよ、というセイジの台詞の意味を
考える間もなく、外の馬を繋ぎとめたリッドも狭いテントの中に入
ってきた。

「ああよかった、ミーナ」

心の底から安心した顔をして、リッドはミーナの髪を一度、二度
撫でた。

そしてセイジに向き直るといつもの笑顔をどこかに潜めて、大き
な栗色の目を細めた。普段からは考えられない真剣な表情をした彼
の声からは微かな怒りが滲み出ていた。

「いったいどういふつもり？ …… なんて、聞くだけ無駄だよな。

利用するのは許さない、って言ったはずだ。例えそれが最も効率的
な手段だったとしても」

「西に向かう途中、ラストイミナがついてきた。それだけだ。俺は
利用するためにこいつを連れてきたわけじゃない」

「それでも、結果は同じだよ。こんな所まで連れてきて…… オレた
ちの代わりに矢面に立たせる気だろう？ 両親を取り返す、という
名目を立てて隠れ蓑に利用しようっていうのが見え見えだ」

「本人達はそれを望んでいるようだが？ それを止めるのは横暴じ
やないのか。保護の名の元にこいつらを閉じ込めて、それはお前の
エゴだ」

「詭弁だよ。ミーナとマルコの気持ちをいいように利用するなんて
有り得ない」

「では、本人達に選ばせたらどうだ」

セイジの言葉にリッドが口を噤んだ。

話が全く分らない。

セイジはミーナを無事にここまで送り届けてくれた。全然悪い人
には見えないのに…… 僕らの事を何かに利用しようとしている？

リッドは何を隠している？　僕らが知らないのは何？　父さんたちは僕らに何を望む？

どうすればミーナは……笑っていられる？

僕は口を閉ざした二人の間に割って入り、きちんと正座をして二人と向き合った。

リッドもセイジも驚いたように僕の方を見ていたけれど、気にせず続ける。

「リッド、僕らはどうしたらいいの？　父さんたちをどうやったら助けられる？」

きつとミーナの一番の願いは、父さんたちを助ける事。

それなら僕は、それを一番にするよ。

「お願いだよ、リッド、セイジ。教えて。僕は何だってするよ。危険な事ならミーナを巻き込まない。僕、こう見えても強いんだ。あ、実はミーナよりも強いんだよ？　ミーナには隠してたんだけど、ばれてたみたいなんだ。びっくりしたよ。うん、でも、まあとにかく僕はその辺の騎士になら負けないから、きつと役に立てると思うんだ」

結局自分でも何が言いたかったのかよく分からない台詞になってしまった。

言いたい事は伝わったかな？　首を傾げてセイジを見ると、なぜか彼は首元に笑みを湛えていた。

「ほんと、お前は母親似だな。顔は問答無用で父親似だが」

いつだったか聞いたような台詞と共に、大きな手が僕の髪を撫でていった。

「ワガママなのか気を使うのか、自信あるのか消極的なのかよくわかんねえ。本気なのか冗談なのか、全力なのか適当なのかも　お前の母親も、そうだったよ」

「僕の母親……？」

まだ見ぬ本当の母。僕にこの羽根とマルコシアスという名を残したという両親。

少しずつ、その存在が僕の中で膨れ上がっていた。

「あきらめる、アキレア。もうこうなったら止められないのはお前だつて分かつてるだろう？ こいつは間違いなく、あの二人の血を継いだサラブレッドだよ」

セイジがそう言うのと、リッドは口を閉ざしてしまった。それが諦めからくる肯定だというのは、リッドの表情を見れば明白だった。

「お前が話さないなら、俺が全部話す。ついて来い、マルコ……覚悟があるならな」

何故だろう、ドキドキする。これから自分の目の前に新しい世界が広がっていると思うと、全身の血が騒ぐ。もっと知りたい。もっと強くなりたい。

心の奥底で僕が叫んでいる。

あの銀髪のヒトにやられそうになった時、僕の中で何かが変わった。

ずっと大切な物を作らなかった僕が、自分の為に何も願った事などなかった僕が一步前に踏み出した。

強くなりたい

そう思わせるのは、僕自身の魂？ それとも僕の中に流れる血？

「セイジ。僕は、もっと強くなりたいんだ。だから」

力を貸して。お願いだ。

この強い願いだけは真実。僕がきつと一生追い続けるであろう夢。初めて芽生えたこの思いを手放したくなかったから、セイジの内に秘めた熱い心を映し出したような紅髪を見失わないよう、土の道を駆け抜けた。

元東都トロメオの崩れた外壁に沿うように作られたこの街は、おそらく戦で住処も職も失った人たちが集う場所だ。その年齢は様々で、最初に出迎えてくれたアンバのような子供もいれば、よぼよぼのおじいさんもいた。

ああ、悪魔の事を教えてくれたじい様は、元気にしているだろうか？

ほんの少し故郷に思いを馳せていると、ふっと藍色の瞳が振り向いた。

「この辺りでいいだろう」

気づけばテントばかりが集まった集落の端まで来ていた。

この辺りは周囲の草原と様相が違う。

ぼつりぼつりと生える木々どころか、一本の草もない。土の色も黒っぽく、まるでこの辺りだけ大火事にでも遭ったみたいだった。少し遠ざかったトロメオは、やはり前時代に取り残された遺跡のように悲惨な様相を呈していた。

僕らが小さい頃、セフィロト国の弾圧に大きな反発を示した組織があった。旧東都トロメオを拠点とし、グリモワール王国を再建しようとする悪魔崇拜の集団だ。その組織はここを中心に散々暴れた末、セフィラによって鎮圧されたらしい。

この都を修復しないのは、セフィロト国がその力を明示しておくためのかもしれない。

もう二度と、グリモワール王国の遺影を追う者が出ないように。そのトロメオを目を細めて見つめたセイジは、自嘲気味にぼつりと呟いた。

「……不思議だな。この場所に、お前と共に帰って来る日がこようとは」

「この場所、少し変だね。ここだけ火事でも起きたみたいだ」

思ったままを口に出すと、セイジはにこりと笑った。

「流石だな、マルコシアス。確かにここは一度焼けている。悪魔の遣った地獄の業火と天界の輝炎の衝突によって不毛の地となった。あの集落の者たちは『フラウロス・エステート灼熱の遺産』と呼んでいる場所だ」

「フラウロスが?!」

思わず目を輝かせると、セイジはもう一度、僕の頭に手を置いた。

「お前、悪魔が好きか?」

「うん、大好きだよ」

「そうか……よかった」

そしてセイジは少しずつ、少しずつ話し始めた。

父さんと母さんが隠していた事。セイジとリッドが望む事。そして、僕らの両親の事

フラウロス・エステート

何もない大地に転がる真黒な岩に二人並んで座る。よく見るとこの真つ黒な岩も焼けているようだ。ごつごつとした手触りは、慣れ親しんだ岩とは少し違う。まるで熱を持っているような手触りとは、裏腹にヒヤリとした感触が背筋を通る。

セイジの端正な横顔を見ながら、掌を通して伝わる灼熱の獣フラウロスの力を実感していた。

「さあ、何から話そうか」

「んと、まず、父さんと母さんはグリモワール王国の貴族だったって言ってたよね。んじゃあ、セイジとリッドも元々騎士団にいたりしたの? あ、年齢的に無理かな?」

「いや、そうでもない。俺は戦争前に騎士団に入っていた。クラウドさんが団長をしていた漆黒星騎士団だ」
ブラックルビー

「へえ……っえっ? 戦争前?!」

戦争が終わったのは18年前、始まったのは確か20年前だから、その前に騎士団に入ってたって……?」

「セイジ、いったいいくつなの?!」

「あー、今年で幾つか。忘れた」

「えええええ?!」

もともと結構年上かもしれないとは思っていたが。

よし、この問題は深入りしないようにしよう。だって、セイジがどんなに少なく見積もっても30歳半ばでことは、そのセイジに不遜な口をきくリッドがそれほど違う年とは思えない。

リッドの事を気に入っているらしいミーナのためにもここには手を付けずに置くべきだろう。

「えっと、んじゃ、それはいいとして……」

ああもう、焦ったら何を聞こうとしてたか忘れちゃったよ。

困って視線を泳がせていると、セイジはまるで僕の心を読み取ったかのように静かに話した。

「俺は悪魔の力を使役する。何故か、と一度聞いたな。答えてやる」

セイジはチェーンに括られたコインを取り出した。

鈍い金色を反射するそのコインは、微かに熱を帯びているようにも感じられた。コインの中央に記されているのは、僕の記憶が確かなら、破壊の悪魔レラージュの紋章だ。

「俺がこの悪魔と契約したのはグリモワール王国時代だ。当時の俺は漆黒星騎士団員だブラックルビだった。が、お前の母親は俺の才能を見出し、そこから連れ出した」

僕の母親の話をする時、セイジの目にはとても優しい光が灯る。

それはきつと気のせいではないはずだ。

「お前の母親は強かった。もちろん、お前の父親もな。彼らは最高の、『レメゲトン』だった」

レメゲトン。

僕とミーナの両親は、魔界から悪魔を召喚して戦う天文学者、レメゲトン。

「案外反応が薄いな。予想してた……ってどこか？」

セイジの言葉に、そうかもしれないと思う。

心の片隅で何となく気づいていた。僕らに託された羽根が悪魔のものだとしたら。貴族の高い地位に在った父さんたちと交流が深かったというなら。

セイジが悪魔を召喚してミーナを捕まえた時、その予想は確信に変わったのだと思う。

「そこまで気づいていたなら分かるだろう、お前の父親の名は」

「アレクスター・クロウリー、かな。メフィア・ファウストと共に戦争で数々の伝説を残したレメゲトン」

ミーナの紫の瞳は父親譲りだと母さんが言っていたのだから、その名にたどり着くまでそうかからなかった。

「正解だ、マルコシアス」

セイジはにやりと笑った。

僕の名は、代々クロウリー家を守ってきた戦の悪魔が持つ名と同じだ。戦の悪魔マルコシアスは真っ直ぐな心を持つ、魔界屈指の剣士だという。

「そして、お前の母親の名は ラック・グリフィス」

グリフィス、という名には嫌ほど聞き覚えがある。

「初代国王ユダ・ダビデ・グリモワールと共に72の悪魔を魔界から呼び出し、コインを創った始祖。その末裔に当たるラック・グリフィスの子供であるお前とミーナは、稀代の天文学者ゲーティア・グリフィスの唯一の子孫だ」

これまでお話のなかにしか出てこなかった名前が、一気に身近に

なる。

そして、父さんたちの話が、これまでリッドとセイジが言っていた事が、隠していただろうことがすべて頭の中でつながっていく。
「クラウドさんもダイアナさんもそれをお前たちに告げる気はなかったようだ。ただ、平穩に暮らして欲しい、と願っていたのだ……お前とラスティミナだけは、こんな世界に引きずり込みたくない」と常々言っていた」

「うん、そうだろうね」

いまや滅びた王国の重要人物、それも禁止された悪魔崇拝の象徴ともいえる職についていた両親をセフィロト国が見逃すはずはない。その子である僕らの事も。

「だが、お前たちはそれでいいか？ 守られて、隠されて、裏でこそこそと動かれて面白いはずがないだろう？」

セイジの言葉に、僕は深く頷いた。

「だから、これを話すのは俺の独断だ……後でクラウドさんに叱られるな、これは」

大きくため息をついたセイジ。

実はまだ何の实感も湧いていなかった。まるで、突然逃げると言われたあの夜のように、言葉だけが上滑りして僕の中を通過していくみたいだ。

父さんたちが僕らに『本当の両親は別にいる』と告げた日から、僕とミーナの時間は止まっているようだった。何を信じて、何をすればいいのかわからない。地に足がつかない感覚。

もし僕が本当にアレキスターⅡクロウリーとラックⅡグリフィスの子で、生粋を極めたようなレメゲトンの血筋だったとしても、僕にはなんの力もない。ただ人よりちよつと剣がうまいだけだ。

ああ、あと、勘がいいのも人よりすぐれてる点かな？

「んじゃあ、父さんと母さんは、僕らの本当の両親は、僕とミーナの為に世界を創り変えてくれるつもりだったの……？」

「勘がいいな、マルコシアス」

セイジがにやりと笑う。思わずつられて笑ってしまった。

選択肢は二つだと思っていた。

迎え撃つか、逃げるか。

でも、僕らにはもうひとつ選択肢があったんだ。みんなずっとそれを僕らに隠していた。僕らを危険な目に遭わせないために。

「セイジたちは……父さんたちは、きっとグリモワール王国を再建するつもりなんだね」

もう一つの選択肢。それは、奇しくもミーナがずっと願った事。

自分の居場所は、自分で勝ち取る。

そう、父さんたちは僕らの為に安心して暮らせる土地を創るつもりだったんだ。きっと。それがどんなに危険で大変で無茶な事か分かっているはずなのに。

思わず顔を手で覆った。

泣きたいわけじゃないのに胸が苦しかった。自分達がどれだけ愛されているか、どれだけの力で守られていたかを知って、どうしようもなく心が熱くなったのだ。

何も知らなかった。父さんたちが、本当の両親が僕らに残そうとしてくれたものはこんなにも大きい。

「僕も……手伝えるかな」

ミーナが笑っていられる世界を作るために。父さんたちみんなが幸せになれるように。

俯いたまま聞くと、セイジの大きな手が肩に置かれた。

ふっと視線を上げると、藍色の瞳が僕を覗き込んでいた。

「マルコシアス。これは、本当に俺個人の提案だが」

セイジの真剣な瞳が僕を射抜いた。

「悪魔を使役する気はないか？」

背筋がぞわり、とした。

セイジの迫力に押されたというのもあるが、何より自分自身の奥底から湧き上がる衝動を抑えられなかったからだ。

本気で心の底から願った事をかなえるために。

僕は笑った。

「あるよ」

力が、欲しい。強くなるために

風邪をひいた時、稽古で頭を打って昏倒した時。いつだって、目を開けた時に最初に見るのは父さんの美しい翡翠ジェイドの瞳だった。

でも、今回は違っていた。

目の前にあるのは淡い茶髪、それから優しい光を灯した栗色の瞳。目が覚めた？ ミーナ」

丸っこい、子犬のような眼が笑いかけている。ふわふわとした髪が薄明かりに揺れていた。

ああ、この笑顔を見ると安心する。まるで父さんというみたい。

「リッド……あたし……セイジが……」

「ああ、まだ起きなくてもいいよ。ずっと走り通して疲れただろう？ だいじょうぶ、クラウドさんもダイアナさんも無事だ。助け出す手はずは既に整っている。決行まではあと二日あるから、ゆっくり休むといい」

優しい声と共に、額に温かい手があてられる。

少しだけ甘えたい気分だ。

「んじゃあ、もう少しだけ寝てもいいかなあ……？」

子供みたいにそう言いながら、額にあった手をぎゅっと握りしめた。

答えの代りに握り返してくれた手のぬくもりを感じながら、あたしはもう一度意識を手放した。

あたしは、思ったよりずっと疲れていたらしい。生まれ育った街を離れて、敵と遭遇して戦闘、それからすぐに休みなしで東へとんぼ返りしたのだ。これまで動いていたのが不思議なくらいだった。でも、十分に睡眠をとったあたしの頭は冴えわたっていた。

麻の敷き詰められた床から抜け出し、そっとテントの外に出た。

ちょうど朝日が昇る頃。草原の露がきらきらと輝いて、あたしを出迎えてくれた。

「いったい今日は、いつなんだろう？」

「おはよう、ミーナ」

声の方を見ると、リッドがこちらに向かって歩いて来るところだった。

これまでに見た事のない漆黒の騎士服に身を包んでいる。リッドは童顔でこそあれ、背が低いわけではない。腰に差した剣も合わせたように黒鞘で、金に近い淡い茶の髪とよく似合っていた。普段の優しい彼とは少し違うその凜とした雰囲気、少しだけどきりとした。

一瞬見とれたが、すぐにはつとした。

この間は寝ぼけてたけど、あたしはリッドの言いつけを破ってここまで来ちゃったんだ。もしかすると怒られる……？

「よかった、元気になったみたいだね。今度はあんまり無理しちゃう駄目だよ？」

あたしの不安に反して、リッドはにこりと微笑んただけだった。

その表情にどこか陰りが見えるのは、気のせいなんだろうか？

「あの、リッド……」

「なあに？」

「怒ってる？」

恐る恐るそう聞くと、リッドは声をあげて笑った。この人がこんな風に笑うのは初めてだ。

「怒ってないよ、大丈夫。でも 心配した」

優しい栗色の瞳があたしを覗き込んでいた。

そんな安心した目で見ないでよ。怒ってくれた方がずっとマシだ。「ごめんなさい」

素直に謝ると、彼はやっぱり優しい表情であたしに微笑みかけていた。

ただ、おかしいなと思ったのは、双子の相方の姿が見当たらない

ことだった。

普通なら、あたしが目を覚まして真っ先に駆けつけてくれるはずなのに。あたしが眠っている間、傍にいてくれるはずなのに。

どうして？

何とも言えない不安が胸の内を駆け抜けた。

リッドによると、マルコはセイジと一緒に少し遠くまで出掛けているらしい。明日の夜、作戦実行までには戻るという事だったけれど、リッドはあまり詳しく教えてくれなかった。

そしてあたしはというと、リッドに連れられ、この作戦に参加する人たちと打ち合わせをする事になった。

リッドに連れられて入った、集落で一番大きなテントにはすでに数名のメンバーが集合していた。倉庫のようなその場所で、各々が樽や木箱に腰かけて寛いでいる。

この中だったらリッドが一番若いだろう。

「遅いぞ、アキレア」

一番手前にいた40歳くらいの男性がぎろりと睨む。あたしはそれだけですくみあがってしまった。

リッドの後ろに隠れるようにして様子をうかがう。最初に貫くような視線をくれた男性は、頬に引き裂かれたような大きな傷跡があつて怖かった。手入れされていない茶髪はあちこちに跳ねているし、目つきは猟犬のように鋭い。

残りはリッドより少し年上の女性が2人と、男性が2人。

その中でも異質な、美しい薄紫のヴェールを纏った女性がゆつくりとこちらに歩み寄ってきた。肌が抜けるように白い。身を包む淡い桃のドレスは床の辺りに広がってひらひらと舞っていた。

近くで見るとどきりとするような儚さと美しさを持った女性だった。

「クラウドさんの娘さんかしら。私、ブラシカです。占い師としてセフィロト軍に潜入しております」

「あ、はじめまして。ミーナ＝フォーレスです。よ、よろしく願います！」

思わずぺこりと頭を下げると、ブラシカさんは銀に近い淡い金髪を揺らして笑った。

「可愛い娘さんね。話に聞いた通りだわ」

「ブラシカはオレやセイジと一緒に、クラウドさんが抱える組織の幹部の一人だよ。あと一人、ディサという幹部がいるけれど、今回は不参加」

「幹部はリッドとセイジをいれて4人なの？」

「ああ、そうだよ」

リッドはにこりと笑った。

「あとは右からコレオプシス、彼はオレ直属の部下だ。隣は同じくオレの部下のダリア」

リッドは最初の猟犬のような男を指し、次にその隣の女性騎士を指した。

「最後に、ディサの部下のアメシエラとシラン」

最後に、一番奥に座っていた二人の男性を示した。

「オレ達は、クラウドさんの率いた隠密部隊のメンバーだ。今回、君とマルコがクラウドさんを助けだすのが大前提。セイジも含め、オレたち7人はその補助をするという形をとる事になる」

彼は最後に彼ら全員を示して、こう言った。

「オレたち隠密部隊『B L O O M^{ブルーム}』が、君を全力で支援するよ、ラスティミナ」

R - 16 計画

現在セフィロト軍に侵入しているという占い師のブラシカを中心に、作戦会議が開かれた。

とはいえ、あたしはほとんどそこに座っているだけ。旧東都トロメオの地図を広げて議論を交わす大人たちの間に入れはしないこんな時、自分の無力さが身にしみる。

あたしには本当に何の力もないんだ。

だから力を貸して、とリッドに頼んだはずなのに……これまでにない焦燥があたしを追いたてていた。

「で？ もう一人、息子の方はどうなっているんだ、アキレア」

さらに、ふつと耳に入ったその言葉に反応する。

そうよ、マルコはいつたいどこへ行ったの？

「彼もすぐに戻るよ。今はセイジが連れ出している」

リッドが静かに答える。その声には微かな絶望が含まれていた。

「セイジが……？」

それを聞いた獵犬のコレオプシスが眉を顰めた。同時に、占い師ブラシカも息を呑んだ。重い沈黙がその場を包む。

「いつたい、何？ セイジはマルコをどこへ連れて行ったの？」

「それは……誰の意志だ？」

「マルコ本人だよ。彼がセイジを選んだんだ」

あたしの中の何かが警鐘を鳴らしている。間違いない、マルコは今、ひどく危険な状況にある。生まれる前から一緒だったあたしにはそれが敏感に感じ取れた。それは、みんなの切羽詰まった表情からも見て取れる。

怖い。怖い。いつたいどこに行ったのよ、マルコ！

「大丈夫。セイジの判断と、マルコの意志を信じて。オレはあの二人なら大丈夫だと思った。だから許可したんだ」

リッドがはつきりとした口調で告げる。

「……臨時首領がそう言うのなら異論はない」

ああ、だめだ。心臓の音が耳元に鳴り響いている。怖くて全身が震えている。息が詰まる……キモチワルイ。吐きそうだ。

必死で息を整える。が、余計に頭が混乱する。

リッドにはそれが伝わってしまったらしい。あたしを落ちつけるように頭にぽん、と手を置いた。

「ミーナ。ごめんね、眠っていたから知らせなかったんだ……その代わり、マルコからの伝言を預かってるよ」

「マルコが……？」

「うん。ミーナの事、すごく気にしてたよ。本当はちゃんと話していきたくったんだけど、時間がないからって、オレに伝言を残して行っただ。彼はこう言っていた 絶対に戻るから。父さんと母さんを助けに、ミーナを守るように、僕は強くなるから。だから待っていて。お願いだから、泣かないで」

その言葉を聞いて、少しずつ心が軽くなっていくのを感じていた。マルコも父さんと母さんを助けるために最善を尽くすつもりなんだ。どんなに諭しても父さんたちの救出にあたしたち自身が向かう事をあれだけ拒絶していたマルコが。

よかった。

「ミーナ、これから作戦における君の動きを説明するよ。これは、君にしかできない事なんだ。君たちが協力を申し出てくれたからこそできる作戦だよ」

あたしはあたしが出来る事をしよう。だって、力が欲しいと願ったのはウソじゃない。リッドはあたしが望んだとおり、力を貸してくれたのだ。マルコも、自分でできる事を精一杯やっている。

それじゃあ、言い出しっぺのあたしがこんな所で震えているわけにはいかないだろう。

「ありがとっ、リッド」

大丈夫。

あたしはまだ 戦える。

だって手も足も動く。頭だって使える。目も見えるし、音も聞こえる。

それ以上、何を望む？

「あたしは元 ブラックルビー 漆黒星騎士団長クラウド^{II}フォーレスの娘、ラスティミナ^{II}フォーレス。父さんと母さんを助け出すために、力が欲しいの。あたし一人じゃ何も出来ないから……お願いです、みなさんの力を貸してください」

絶対に負けない。

相手がセフィロト国でも、たとえあたしがずっと憧れていた天使だったとしても、父さんと母さんを奪う事は許さない。

だってあたしには、マルコがいる。リッドがいる。助けてくれる人たちが、守ってくれる人たちがいる。守りたい人たちがいる。

「蛙の子は蛙、か……」

猟犬のコレオプシスがぼつりと呟いた。

「まったく、ウォル先輩とまるで同じセリフを吐くとはな……血は争えないな、ラスティミナ」

そう言ってがりがり、と頭をかいたコレオプシスはあ、と大きく息をついた。

「……もちろんだ、ラスティミナ。俺達はそのためにここへ来た。クラウドさんを助けるという目的のために集った仲間だ。今さらよそよそしい言い方はやめてくれ」

そう言ってくれたコレオプシスは、先ほどまでと違って全然怖くなかった。笑うときゆつと目じりが上がって、まるで体は大きくても優しい犬みたいだ。

つられて微笑むと、皆笑い返してくれた。

きっとこの人たちと一緒になら父さんたちを取り返すことができる。だからマルコ、さっさと帰ってきなさい！

作戦決行当日、早朝。日が出ないうちにあたしたちはひっそりと旧東都トロメオの正面門に移動した。

薄暗い中だというのに多くの聖騎士団員が門を守っていた。それもおそらく手練が多い。こんなに遠くても彼らがよく組織され訓練されていることが伝わってくる。数十の騎士たちを前にして、あたしの心臓はこの上ないくらいに力強く拍動していた。

この警備の多さはブラシカから聞いた情報が本当であるという事を示している。

「クラウドさんとダイアナさんは、日の出とともに旧セフィロト国領に搬送される事になっている。チャンスは一度」

それは、作戦とも呼べないような強行突破。いったん父さんたちの拘束を外してしまえば、アメシエラという隠密部隊のメンバーが用意してくれた馬車に乗せ、ほとんど開けていない土地が広がる南の山岳地帯に向かって走る予定だった。

あたしはリッドとアメシエラ、そして助け出した父さんたちと一緒に南へ向かう。残りのメンバーで足止めをする。なんとも無謀な作戦だ。悪魔を召喚できるセイジがいれば随分と負担が違っらしいが、彼はマルコと出ていったきり、まだ戻ってきていない。

もちろんここに集ったのはいずれ劣らぬ力を持つ隠密部隊のメンバーばかりだ。とはいえ、相手は数十の聖騎士団。単純計算で一人あたり10人以上を相手にする計算になる。

むろん仕方がないのは分かっている。だって、父さんたちが捕まってから1週間も経っていない。十分な作戦を練る時間も人員を集める余裕も、あたしたちには何もなかったのだから。何より、あまり大人数で動くと悟られてしまう。10人弱、最低限で、最高の精鋭たちだった。

それでも、忘れかけていた恐怖が舞い戻ってきてあたしを震えさ

せる。それは、どんなに待っても帰ってこなかったマルコの事も関係あるだろう。

「いったいどこに行つたのよ、マルコ！ 帰ってくるって言つたじゃない！」

でも、口を噤んで俯いたあたしの肩に、優しい手が触れる。

「絶対にオレの傍を離れちゃ駄目だよ、ミーナ。そうしないといざという時に守れないからね」

一緒に草陰へと身を潜めたリッドが耳元で囁いた。

だから近いって！

あたしは自分の顔が真っ赤になるのを感じていた。この人はわざとあたしを動揺させて楽しんでいるんじゃないだろうかと思えてくる。

でも、その優しい手に触れるとすごく安心する。

「リッドがついていてくれるならあたしも安心して戦えるわ」

この人は、父さんたちを助け出した後もあたしと一緒にいてくれるだろうか。ずっと守ってあげるから、と隣で優しく微笑んではくれないだろうか。

って、あれ？ あたしいったい何を考えているの？！

自分の中に沸き上がった妙な妄想はなかった事にして、きつとトロメオへの入り口を見据えた。

「さあ行くよ、ミーナ。君は思ったようにやればいい。後の事は全部オレ達に任せてさ」

「うん、分かった。ありがとう、リッド」

今は、父さんと母さんを助け出すことだけを考えよう。

あたしは、単純に捕まった父さんたちを助けに追いかけてきた娘を演じればいい。ある意味、あたしは囷だ。攻撃の主軸はリッドの部下のダリアとコレオプシス、そして補佐がシラン。

リッドの補佐のもと、あたしは思いつきり暴れるつもりでいた。

もちろんみんなあたしの剣の腕をかってくれていて、一つの戦力として数えてくれている。

それが本当に嬉しかった。

「さあ、来たよ」

太陽は今にも山の向こうから顔を出そうとしている。日の出は近い。

薄明かりの中で、正門から黒々とした鋼で作られた馬車がゆつくりと姿を現した。

最初に、トロメオからの増援がすぐには来られないように、正門から離れるまで待つ。

静かに馬車を追うあたしの心臓は今にも破裂しそうだ。あの中に、父さんと母さんがいる。

「アメシエラとの合流地点はもうすぐだ。準備はいいかい、ミーナ」
「ええ、大丈夫よ」

完全にトロメオが遠ざかったところで、事前に用意しておいた馬に乗る。

馬車を護衛するのは数十人に及ぶ騎馬隊だ。夜明け前の独特な空気が満ちたこの草原の真つただ中を進む仰々しい隊列は、まるで黄泉へと向かう葬列のようだ。

もうすぐで、打ち合わせした地点に差しかかる。

「行きましよう、リッド」

トムボーイ・プリンセス

「うん、行こうか。おてんば王女」

「もう、イジワル言わないでよ！」

大丈夫、この人があたしの隣にいる限り、あたしは安心して戦える。

あたしは手綱を強く握った。

薄明かりの草原の中、馬を駆る。

あの監獄のよう鉄くろがねの馬車を追いかけて。

「待ちなさい！」

心の底から叫んだ。絶対に行かせたくなかった。

だって、セフィロト国に連れて行かれてしまえば、父さんと母さんに待っているのは処刑。今は亡きグリモワールの忠臣として、戦犯として裁かれてしまう。

そんな事は絶対にさせない。

「父さんたちを返しなさい！」

馬を駆って、馬車の前面に回り込んだ。

行進はいったん停止。おそらく責任者と思われる白馬に乗った銀の甲冑の騎士が前に進み出た。

「……ミーナ」フォーレス様ですね。既に国外へ逃げたものかと思っ
ていました」

この甲冑の聖騎士には見覚えがある。美しい蒼水星の瞳 アクアマリン あ
の始まりの日、剣術大会で優勝したあたしを迎えにきた聖騎士だ。

これは何かの因果だろうか。

「ですが、好都合です。あなたの捕縛命令も出ています。育ての親
と共に処刑されるのなら本望でしょう」

彼は腰に差していた銀鞘の剣を抜いた。

背後の部下に馬車を進めるように言い、数名の部下を指名してあ
たとしとリッドの前に立ちふさがった。

あたしたちが敵をひきつけた後、他のメンバーが処理をしてくれ
るとはいえ、早く倒して馬車を追いたい。だって、あの中には父さ
んたちがいる。

「気を抜いちゃ駄目だよ。目の前に敵に集中して……リーダー格は
オレが相手をする」

刹那、隣をリッドが馬で駆け抜けていった。

あたしも行かなくちゃ 小太刀を抜刀して敵に向かって行った。

一足早くリーダー格の騎士がリッドに切りかかる。

が、彼はその剣筋を読みきって最小限の動作で捌いた。この剣は知っている。あたしと同じ、ひいては父さんと同じ剣術だ。

相手の力を利用し、いなしてかわす柔の剣。剣術以外で父さんが得意としていた古武術の合気道に似た性質を持つその剣は、力のない女であるあたしだけでなく、セイジのような体格を持たないリッドにとっても有効な武器になる。

あたしなんかよりずっと精錬されたその剣筋に一瞬見惚れてから、あたしも自分の敵に向き直った。

一人で多人数を相手にする場合、最も避けるべきは周囲を囲まれること。

武器が小太刀一本であるあたしが攻撃できる方向は視線の方向、半分だけ。正面からと背後から、同時に攻撃された場合は状況にもよるがおそらくあたしの身体能力では避けられないだろう。

しかも、敵の剣を一度でもまともに受ければこんな細い小太刀は簡単に折れてしまう。

大丈夫、神経を研ぎ澄まして。

父さんは一対一の剣道だけでなく、多人数相手の戦闘もあたしに叩き込んでいた。そして、古武術。非力なあたしは自分の力を知り、相手の力を読み、それをうまく総合して自分に有利な状況を作らなくてはいけない。

常に先を読みなさい。父さんはいつもそう言った。

マルコもあたしと同じ剣術を習っていたが、戦闘スタイルは全然違う。マルコは身軽さとその鋭い五感を生かしたヒットアンドアウェイの戦法で、敵の攻撃を見ながら紙一重でかわし隙を見て反撃するという、マルコにしかできない特殊なスタイルだ。それに対して

あたしは、剣技と古武術そして体裁きからの先読みを生かした、カウンター主体の受ける戦法。何より、非力なあたしは相手の力を利用する事に重点を置いている。

でも、今回は5人を一斉に相手するのだ。少しばかりマルコの戦闘スタイルを取り入れた方がいいだろう。

「あたしは騎士団長クラウド」フォーレスの娘、ミーナ」フォーレスよ」

傍から見れば勝負は完全に決まっている。細い小太刀を携えただけの少女に、大人が5人、それも聖騎士団の剣士が切りかかったのだ。

きつとリーダー格の男もあたしのことをなめていたに違いない。剣術大会をダントツで優勝したのはまぐれでも何でもないので！

「全員そこを退きなさい。あたしは父さんを助けに行くのよ」

静かに呟いて、あたしは馬の鞍の上に立った。体格差がある以上馬に座ったままでは互角に戦えないからだ。

足場が不安定？ そんなの、あたしの未来に広がる不安に比べれば全然たいしたことないわ！

一人目は案の定、狙い通りに足もとを狙って切りつけてきた。予測された攻撃を避けるのは簡単。そしてその次の処理も一瞬だった。

鞍を蹴って飛び上がったあたしは、迷うことなく剣を握るその騎士の手を思いつき蹴りつけた。

間髪入れず逆足で防御されていない喉元に蹴りをたたき込む。

細い小太刀は攻撃力が低い代わりに、古武術による攻撃において長剣ほど邪魔にならないという利点もある。

「うぐっ……」

くぐもった声を上げた騎士の肩につき、膝を足場にして顔面に強烈なひざ蹴りを叩き込んでやった。

ぐしゃ、とつぶれた感触があつて声もなくその騎士は崩れ落ちる。そしてあたしはそいつが落馬する前に、いったん自分の馬に戻っ

た。

追い討ちをかけようとする残りの騎士を振り切って、いったん距離を置く。

これは普段ならマルコが得意とするヒットアンドアウェイの戦法だ。攻撃を終えたらすぐさま距離をとる。そして、また隙を窺って攻撃し、また距離をとる。

マルコほどではないが、あたしにだってあの仰々しい胸当てや脛当てで機動力を削いだ騎士たちに劣らないくらいの素早さはあるのだ。

心臓が耳元で鳴り響いている。

大丈夫、これならいける！

あたしは再度攻撃を仕掛けるべく、手綱をとった。

攻撃予測、そして古武術と剣術の合技によって、あたしは順調に一人ずつ、戦力を削いでいった。

あと一人！

胸当てと腰当ての隙間を小太刀で切り裂かれて体をくの字に落馬した騎士には目もくれず、あたしは最後の敵を見据えた。

「この娘、ちょこまかと……！」

額に浮かんだ青筋をぴくぴくとさせて、それでもあたしの危険度に気付いて距離をとった最後の騎士は、あたしの数倍は経験を積んでいるであろう壮年騎士だった。

もしこんな事になっていなかったら、あたしが騎士を志していたら、大先輩になっていたかもしれない。そう思うと不思議な感じがした。

軽く息を整えてその騎士と対峙する。

真剣勝負の直前に漂う独特の緊張が全身を駆け抜ける。

最後の一人、意表を突く事は出来ない。だからと言って、このまま馬に跨って真っ向勝負を挑めば確実に負ける事は目に見えている。何とか馬から引き摺り下ろして地面で勝負するしかない。

頬についた返り血を汗と一緒に手の甲で拭い、両手で小太刀を握

りしめる。

さあ、どうしたらいい？

そして、最後の一人を倒すイメージが頭の中で固まった時、あたしは馬の腹を蹴っていた。

地面に横たわった5人の騎士を見降ろしながら息を整え、剣を鞘に収めた。思った以上に体力を使ってしまった。

「お疲れさま、ミーナ」

すぐ傍で声がしてびくりとした。

振り向くと、そこにはいつもの優しい笑顔を湛えている彼の姿。

「リッドの方は？」

「あ、うん、あのくらいなら大丈夫」

にこり、と笑ったリッドは息ひとつ乱していない。

「それより、すぐに追いかけるよ。既にコレオプシスたち3人は奇襲を仕掛けている。ほら、馬車がそこで足止めを食らっているだろう？」

リッドの差した方向を見ると、少し離れた場所で馬車が停車していて、その周囲では馬に乗った騎士と打ち合う隠密部隊メンバーの姿が見えた。

風に乗って微かに剣の交わる音がする。

もうずいぶん明るくなってきた周囲は、霞もやも晴れ、今まさに日の出を迎えようとしていた。

「さ、行こう。クラウドさんたちを助けなくちゃ」

馬車の所に到着した頃には、ほとんどカタがついたところだった。コレオプシスは先に血のついた大槍をぶん、と振り回し、ダリアは降伏した騎士を縛り上げるところだった。

アメシエラもすぐにやってきた。

「足止めする必要もないな。あつけない」

コレオプシスが鼻を鳴らす。こちらの騎士にもそれほど手こずらなかつたようだ。

体格のいいコレオプシスが身の丈の倍近くある大槍を振り回して

いる姿は、さぞ勇猛だったことだろう。

リッドもにこにこ、と笑う。

「そうだね。ミーナもちゃんと5人倒したよ。それで満足？」

「ああ、異論はない」

異論？ いったい何に？

それを聞く前に、リッドがにこりと笑って言った。

「これなら全員で一斉に撤収できそうだ。合流地点は覚えてるよね？ そこまで一気に……」

と、彼はそこで口を噤んだ。

みるみる表情が強張っていく。彼のこんな表情を見たのは初めてだった。驚きと失望と衝撃、それから絶望がすべて一緒にやって来たかのような顔をしたリッドの横顔を、今まさに顔を出した太陽の光が照らしだした。一筋伝った汗がすう、と顎まで伝う様も。

ふいにリッドは顔を歪めて額に手をあてた。

「ふふ、言われてみれば当たり前だよ。オレたちが来る事なんてお見通しってわけだ」

苦しげな顔をしたリッドの視線の先には、止まっている馬車があるはずだ。

いったいリッドは何を言っているの？

でも、あたしの中の感覚が警鐘を鳴らしている。背後にとんでもないモノがいると知らせている。

この感覚は、セイジを追ってきた悪魔の気配に酷くよく似ていて、でも全く正反対のものだった。

背筋をぞわり、と何かが這い、それを察知したかのように背後から声が飛んできた。

「来ると思ってたよ、レメゲトン」

よく通る低い声が、声に連れられ、リッドの視線を辿って振り向いたあたしの目に飛び込んできたのは、見覚えのある銀髪だった。

「今度こそ、逃がさないよ」

白い神官服に身を包んだ銀髪の人、あたしに向かってそう言っ

た。

この人はなぜ、あたしをまた『レメゲトン』と呼ぶの？

「絶対に来ると思っていたよ。だから僕は罪人輸送の警護なんて申し出たんだ」

丹精込めて創られた彫刻のように整った顔立ち。覗き込む事を許さない深い群青の瞳は、この早朝の光で見てもやっぱり闇を包有していた。半分閉じた眠そうな瞼も、陶器のように白い肌も、あの時と変わっていなかった。

「今度こそ逃がさない。僕らを迫害したグリフィスの末裔」

何？ どういう事？ グリフィスって、グリモワール王国建国の時代に悪魔召喚の基礎を確立してコインを作ったゲーティア「グリフィスの事？ それがあたしの何の関係が……」

上ってきた朝日が何もかもを照らし出す。

強張ったリッドの顔も、呆然となっている隠密部隊メンバーの顔も。

「朝日だ。僕らの時間だ。天使が空からやってくるよ」

意味不明の言葉を呟いて、その銀髪の人 は両手を大きく広げた。

その途端、リッドが鋭い声で叫ぶ。

「逃げるんだ、ミーナっ！」

「え、でも父さんが……」

「言っただろう！ あいつはセフィロト国に10人しかいないセフィラの一人……セフィラが何かは、言わなくても分かるよね？」

その剣幕に、あたしは声を失った。

「この間は夜中だったから天使を召喚できなかったんだ。でも、今

……太陽が昇ってしまった」

あたしの前にリッドが立ち塞がる。

「早く逃げて！ 今度こそ！ 振り向かないで！」

その悲痛な叫びは、この状況の切迫を表わしている。

が、その銀髪のセフィラは残酷だった。

リッドの肩越しに、完璧に整えられた唇がゆっくりと動くのが見

えた。

ミカエル

確かにそう動いた。

そして、次の瞬間には、その場を眩いばかりの銀の光が包んでいた。

R - 20 天使

足が竦んで動かない。信じられない光景が目の前を占めている。

「……くそっ」

あたしを背にかばった彼の、らしくない悪態が事態の緊急性をよく示していた。

あんなに懂れていた天使様が目の前にいるっていうのに、どうしてあたしはこんなにも心の底から震えているの？

あの銀髪の人が『ミカエル』と呟いた刹那、目の前を銀の光が覆って、気が付けば

「これが、美の天使ミカエル……」

大きな6枚の翼を持つ天使。純白の衣を身に纏い、頭上に金冠を湛えている。そればかりではない。ゆるく波打つ銀髪が彫刻のように整った頬を彩っている。哀愁に満ちた群青の瞳はこの世の理すべ^{ことわり}てを憂いているかのように沈んでいた。陶磁器のような肌は滑らかで、仄かに光を放っているようにさえ見える。

是も否も超え完成された美。

人は人である身を越えたそれを目にした時、全く動けなくなってしまうのだ。

銀髪のセフィラの背後に現れたのは、荘厳な美の天使ミカエル。人々の信仰を集め、敬い愛されるもの。そして あたしが、ずっと懂れていた天使。

歓喜とも怒りとも怖れともつかぬ感情で心の底から打ち震えながらも、あたしはその美貌に釘付けになっていた。足が動かない。瞬きすらできない。呼吸すら困難になる。

「コレオプシス、ダリア！ 二人はクラウドさんたちを！」

「遅いよ」

声とほぼ同時だった。

銀髪の人が動いた、と思った瞬間、一番近くにいたダリアが腹を

折って地面に崩れ落ちた。腹部を押さえた手の間から、赤い液体が漏れる。

疾い！

目を見張った瞬間、大槍を構えたコレオプシスの背から血が噴き出した。

「うそ」

信じられなかった。

だって二人はたった今、20人以上の騎士を倒したばかりなのだ。それほどの腕を持つ二人がたった一瞬で……

「アメシエス、ミーナを頼む。シランはオレの援護を！」

きっぱりとした口調で指示したリッドは、腰の剣を抜いた。

冗談でしょう？！

彼は天使に戦いを挑む気だった。

「無茶よ！」

思わず叫ぶ。だって、背後にミカエルを従えた銀髪の人とはこれだけ距離があるのに、震えが止まらないくらいの圧力がかかっているのだ。それも、コレオプシスとダリアが一瞬でやられた。二人ともそれぞれ十人以上の騎士を倒す力を持っていたというのに！

そうでなくとも、天使に戦いを挑むのは論外だなんてこと、どんなに小さな子供だって知っている。何しろ相手は天使なのだ。万人が憧れ、敬う美しい有翼のモノ。

するとリッドはふっと振り向いて、微笑んだ。

これまで何度もあたしを安心させてきた、優しい笑顔だった。

「あ……」

声を出せないでいるあたしを背に、リッドは天使を従えた銀髪のセフィラへと向かって行った。

「行きましよう、ミーナさん」

黒衣を纏った隠密部隊メンバーのアメシエスがあたしの手を引く。「でも」

「大丈夫です。アキレアは幹部であると同時にセフィラと単騎で戦

闘できる数少ない戦闘員です」

頭と口元に黒い布を巻き、目以外の表情はほとんど読み取れないが、アメシエスが嘘を言っているようには見えなかった。

あたしが思っている以上に、リッドは強い。それは彼自身が言っ
た事だ。

今だって、箆手から銀の刃を飛び出させて銀の光を纏ったセフィ
ラに、臆する事無く立ち向かっている。それも、流れるように美し
い剣の型で、舞うように。

あの笑顔は消えていたけれど、代わりに現れた彼の凜々しい横顔
に釘付けになった。

なんてきれい。

「行きますよ、ミーナさん。早く！」

アメシエスが急かす。

あたしは、一歩後ずさる。

これでいいの？ あたしは、またあの人を置いて逃げるの？ 前
回マルコを置いて逃げたように……

嫌だ。

もう二度と、あんな思いはしたくない。

一晩中馬上で泣きまくって、この上ないくらいに後悔して、やつ
とここまで辿り着いたのに。

「嫌よ」

今度こそ、彼を助けない。

それに、あたしを助ける、と言ってくれたコレオプシスが、ダリ
アが地に伏したのだ。あたしの為に。父さんを助けるために。

だったら、あたしは一人逃げるわけにはいかない。

「逃げたくない」

あたしを守ると言ってくれた人を、助けてやると言ってくれた人
たちを守りたい。世界中の人すべてなんて言わない。目に映る人だ
けでもいい。それが無理だったら、自分の大切な人だけでもいい。
力のないあたしにも出来る事があるのなら。

「あたしは、守りたいの」

強い気持ち。強く激しく、そして穏やかな願いだった。

そして、それはあたしのすべて。

強い願いに、確実に反応するものがあつた。本当の両親が名前と共に残したという羽根。今回の旅の最初からずっと腰のベルトに差し込んであつた。

純白の羽根から光が漏れる。

力強い朱の光があたしを包み込んだ。

僕はミーナに何も言わず、セイジに連れられてトロメオを離れていた。こんな事は生まれて初めてだった。自分の願望を優先してミーナと離れ離れになるなんて。

セイジは鮮やかな紅髪をターバンのような布で隠している。すごく綺麗だから見せたらいいのに。

それも、馬を進めるうち、だんだんと見覚えのある風景が見えてきた。

「セイジ、もしかして、帰ってない？」

「ん、まあ、お前にとってはそのなるだろうな」

セイジが向かうのは明らかに故郷の街だった。

「大丈夫なの？！」

まだ聖騎士団や追手がいるんじゃない……

「何も街に入るわけではない。街はずれに墓地があるだろう、そこで待っていてくれ。すぐに連れてくる」

「連れてくる？ 誰を？」

セイジはくりりと振り向いて笑った。

「お前もよく知っている人だ」

僕は追手がいるであろう場所を避け、街はずれにある墓地に向かった。

ここは街の人でも滅多に来ない。墓場独特の冷たく陰鬱とした空気が辺りを満たしていた。街の規模に比べて墓地が異常に広いのは戦争中にこの辺りで亡くなった人が非常に多かったからだ。戦場となった旧東都トロメオからほど近い場所にあるこの街では負傷者の手当てが行われたりもしていたらしい。

馬を下りて、墓地の地面を踏みしめた。

足元でかさかさに乾いた土が舞う。

僕は墓地の中央のぽっかりと開けた場所に腰を落ちつけた。この地面も乾いていて、指でなぞると簡単に黄土色の土が剥がれた。

これから、僕は悪魔と契約するんだという。

全然実感が湧かなかった。

でも、僕は悪魔の事を軽く見ているわけじゃない。むしろよく知っている分、その恐ろしさだって人より分かっているつもりだ。契約に失敗すれば命を落とす事も、その力が制御しきれなければ何が起こるのかも。

それなのに全然怖くなかった。

むしろこれから悪魔に会える事が楽しみで仕方がない。僕がこれから会いに行くのは、いったいどの悪魔なんだろう？

「炎だったら断然フラウロスだな」

僕は灼熱の毛並みを持つという豹、炎の悪魔フラウロスが大好きだった。

最後にフラウロスを使役したのは、戦争の直前にレメゲトンに就任したというグリフィス家の末裔にあたる女性レメゲトンだったという。これまで名前すら知らなかったのだが、ふと気づけば最も身近な存在と化していた。

「ラックⅡグリフィス、か」

僕の本当の母親だというその人は、稀代の天文学者ゲーティアⅡグリフィスの子孫だ。十代のうちに何年も契約者のいなかった炎の悪魔フラウロスと契約し、戦争でも多大な活躍をしたという。

すべて文献には残っておらず、じい様に聞いた話だった。

もしかすると、じい様が敢えてその人の名前を教えてくれなかったのは、僕がその女性の子供だと知っていたからなんだろうか？

ああ、でももしその人が生きているのなら、今でもフラウロスを使うんだろう。僕が契約することは不可能だ。

じゃあ、いったい誰だろう。

ぼんやりと青い空を見上げていると、ふと人の気配がした。

「待たせたな、マルコシアス」

セイジの声がして、足音が二つ、近付いてきた。

「うっん、全然」

そう言いながら振り向くと、セイジはすっかりやせ細った褐色の肌の老人を連れていた。

「あつ、じい様！ 無事だったんだね！」

いつも僕らに悪魔の事を教えてくれたじい様。もしかすると、僕らの煽りを受けて捕まっているかもしれない、と危惧していた僕はほっとした。

家から出ると、じい様の小ささにびつくりした。思った以上にじい様は弱っているみたいだ。

「マルコシアス……こんな時が来るやもしれんと、危惧しておったよ」

じい様は皺の奥に刻まれた青い瞳を悲しそうに歪めた。

「自ら戦いの中に身を投ずるのじゃな。まるでお前の両親がそうして来たかのように」

「うん、だって僕は 強くなりたいから。ねえ、じい様ももしかして、レメゲトンだったんでしょう？」

「ああ、そうだ」

僕の質問には代わりにセイジが答えた。

「ヨハン＝ヴァイヤー老師。グリモワール国のレメゲトンの長老だったお方だ。王国時代にも、多くのレメゲトンの契約に立ち会っていらっしやる。現在では魔法陣を書く事の出来る数少ない生き残りだ」

「そうだったのか」

にこりと笑いかけると、じい様はもう一度悲しそうに微笑んだ。

「何度経験しても慣れることなどできぬ、若い者達が命を賭して魔界へ向かうを見送るなど」

「老師、今回はマルコシアスの強い希望です。また、私自身も彼にその力があると判断しました。この時代、彼が自身で生き抜くには

「力が必要なのです」

「分かっておる」

じい様はそう言うのと、ずっと支えてしていた杖を僕に向けた。

まるで何かを確かめるように。

「マルコシアス。調べるまでもなくお前は十分な悪魔耐性と並はずれた親和性を示すだろう。だが、慢心するでない。悪魔はいつ人に牙をむくや知れん」

僕はこくり、と頷いた。

「うん、でも、何より僕、悪魔に会ってみたいんだ」

そう言うのと、じい様は微かに笑んだ。

「ああ、いいじやろう。すぐに魔方阵を用意する　お前が契約するのは、風を操る事が出来、また海を統べると言われる第41番目の悪魔フォカロルじゃ」

「フォカロル！」

フォカロルは大きな驚の翼を持つ人の姿をして現れるという。海を自在に操るだけでなく、風をも手中に収めている。比較的人間に有効な悪魔で、墮天であるという説と墮天ではないという説の二通りがある。

セイジに手渡されたコインをぎゅっと握りしめ、未来を見据えるように前を向いた。

じい様は杖を使って地面に模様を描いていった。

二つの三角形を互い違いに重ね合わせた星の中央にコインと同じ悪魔の紋章。さらに周縁部には古代語を書き連ねていく。直径が僕の身長くらいありそうな大きな魔方阵だった。

「魔法陣は魔界とつながる。コインを握ったまま悪魔の名を呼べ。そうすれば契約の場へと自然に導かれる。そこで悪魔と対話し、契約を成立させる」

「……？ よく分かんないよ、セイジ」

「まあ、実際やってみろ。悪魔との契約に必要なのは強い意志。ただそれだけだ。特にフォカロルは強い意志を秘めた願いしか叶えんと聞く」

「うん、わかった」

こくりと頷くと、セイジは微妙な顔をしてため息をついた。

「本当に大丈夫だよ……？ 俺、不安になってきたよ、ウォル先輩……」

「大丈夫。きつと、悪魔と契約してくるよ」

だってミーナを守るために、父さんたちと一緒に暮らす為に、僕は力が必要なんだから。

それより何より、もう負けたくない。僕は、強くなりたい。

「無事で帰ってこいよ、マルコシアス。作戦決行まで2日しかないんだ、それに間に合わなければ意味がない」

「分かってる」

準備が出来た、というじい様の声で、僕はコインを手にしたまま魔方阵の中央に入った。

大きく、一つ深呼吸。

「気を付けてな」

「ありがとう、じい様、セイジ」

ドキドキする。目の前に、新しい世界が広がっていくのはどうしてこんなにも気持ちを高揚させるのだろうか！

掌のコインをぎゅっと握りしめた。

ゆっくりと息を吸い込んで。

「フオカロール！」

その瞬間、目の前を黒い霧が覆った。

魔方阵の外縁を渦巻くようにして現れた黒霧は、数秒後に霧散した。

そして霧の向こうに広がったのは、これまでと全く違う光景だった。

足もととはごつごつとした岩で覆われている。そんな大地に生命の兆しはない。

それより何より、足元の地面が途切れて崖になった向こう、目の前に広がっていたのは 暗黒の空と暗黒の海だった。とはいっても、内陸に住んでいた僕は海なんて見た事がないからきつとこれは海だろう、と思ったただけだ。

「すげえ……」

遠くは霞がかっていて空と海の境界がはっきりしない。ここに立っていると自分の上下も分からなくなってしまうそうだ。

そうしてぼんやりと佇んだ僕の耳に、静やかに澄んだ声が届いた。

「客とは珍しい。すでに時代は終わったはずだったが」

はっとすると、目の前には大きな茶色の翼が浮いていた。その翼に包まれるように、線の細い青年が首を傾げている。教会の曖昧な海と空を背景に、第41番目の悪魔フオカロールは空に浮いていた。

ぼろぼろになった短いタンクトップを来ただけの上半身は、線が細いとはいえ、病的な感じのしない褐色の肌だ。淡い金髪を長くのばして後ろで緩く括っている。細くつり上がった目にはめ込まれた光の加減で緑にも見えるセピアの瞳に、特別な感情は見られなかつ

た。

ふと視線を足元にやると、膝までしかないズボンからのびる彼の足は人間のものではなかった。しいて言うならネコ……いや、豹のように走ることには長けた大型肉食獣のものだ。羽根と同じ色の毛がびつしりと覆い、先には鋭い爪も付いている。

手にしているのは細く長い槍。黒塗りのシンプルな柄を持つそれからは禍々しい気が発せられていた。

「はじめまして。フォカロールさん？」

ぺこりと礼をすると、彼は驚いたように目を見開いた。

「その瞳　黄金獅子か。見違えた」

「おうごんしし？」

僕が首を傾げると、その悪魔は表情を変えずに淡々と述べた。

「お前の前世、遠い昔の血だ。我らを創り、秩序化し、すべての根源となった『人間』」

「僕の名前はマルコシアスだよ、フォカロールさん」

「あの剣士と同じ名を語るか、黄金獅子」

「両親が僕にくれた名前だ」

「そうか」

刹那、目の前に何かが飛んできた。

黒塗りの柄の細長い槍の切っ先　それが僕の鼻先に突きつけられたのだ。さすがに悪魔の速度は段違いだ。僕は眼がいいけれど、それでも全然見えなかった。

でも、その攻撃に殺気は全くない。

「臆せぬな。それは血が成す業か？　それともお前自身の意思によるものか」

少し難しい問いに、僕は首を傾げた。

考えてからゆつくりと返答する。

「ええと、怖がらないのはだって、フォカロールさんからは怖い感じがしなかったからだよ。それに、僕は貴方に助力を仰ぎに来たのであって、戦いに来たわけじゃない」

僕は腰に差していた刀を鞘ごと引き抜いて、地面に放り投げた。

「僕、強くなりたいんだ。この間、すごく強い人に会ってどうしようもなくやられたんだ。でも、次に会う時は、絶対に負けたくない」
真っ直ぐにセピアの瞳を見つめ、揺るがない瞳の中に強さの欠片を求めた。

「お願いだよ、フォカロル。力を貸して。僕は強くなりたいんだ」

強くなりたい 最初に思ったのはあの銀髪の人に負けた時だ。
手も足も出なかった。胸を貫かれて血がいっぱい出た。

両親が残してくれたという悪魔の羽根の加護とリッドの助けがあったおかげで何とか生き延びる事が出来たけれど、次に会えばまた同じようにやられてしまうのは目に見えている。

それだけは絶対に嫌だ。

大切な物を作らず、ただミーナの傍にいて彼女を守ろうとするだけだった僕が、初めて強く願った事だった。

「強くなりたい、とな。それは敵を殺すためか？ 命を奪い、打ち負かし、何になる？ 古来から人間は闘争の果てに何を得た？ 互いの命を削り、徒に奪っただけではないか」

確かにフォカロルの言う通りだ。力を持った拳句、起こるのはいつだって戦争。たくさんの人が傷つき、傷つけられ、命を落とす最悪の歴史の繰り返しだ。

僕が今から悪魔と契約してしようとする事は、同じことなのかもしれない。グリモワール王国を再建しようだなんて、誰の血も流さずに起こすことは不可能だってわかっている。

でも、違う。

僕の動機は、敵を倒すことにあるんじゃない。それだけは間違えちゃいけない。

「違う、僕は敵を殺す為に強くなりたいんじゃない」

「何が違う？ 他に力を得て何が出来る？」

「僕は」

何も願わない僕の、たったひとつの願い。

「負けたくないんだ」

ミーナを守りたい、父さんたちと暮らしたい 確かにそれは間違いないけど、僕の中の一番じゃない。

僕が一番願うのは、『負けない』という事。もう二度とあんなにも悔しい思いをしたくないって事。

するとフォカロルはふいに口角をあげた。

「何とも単純で純粋な、強い願いだな、黄金獅子。我はそのような願いを最も好む」

初めてフォカロルが笑った。細い眼をさらに細めて口角をあげる。声は出していなかったが、どこか嬉しそうだった。

「負けたくないとは、何と人間らしい願いか」

悪魔は、大きな驚の翼を一振りして僕と同じ大地に降り立った。そしてふいに顔を近づけて、フォカロルは耳元に囁いた。

「契約を許そう」

「ほんと！」

嬉しくて思わず笑うと、フォカロルはこの近距離でもう一度だけ槍を一閃した。

今度も逃げなかった。そのまま突っ立っていたら当たるのは分かっていたんだけど、フォカロルから殺気が感じられなかったからだ。槍の切っ先は、僕の筆手を切り裂いた。その隙間から、赤い割れ目が見えた。

「痛っ……」

「また避けなかったな。今度は見えたはずだが？」

「だから、フォカロルは殺気がないんだ。だから避ける必要がない」
そう言くと、フォカロルはもう一度笑った。

軽く切れてしまった僕の手の甲をとると、そこに軽く唇を寄せた。その妖艶な仕草に図らずもどきりとしてしまった。この人は、悪魔なのに！

「血の契約を。力が欲しくば我の名を呼ぶがいい。お前が前世に作ったコインの契約の証として現世に馳せ参じよう」

「ありがとう、フォカロル！」

その時、何もない上空からコインが降ってきた。それをしっかりと握りしめた時、また目の前を黒い霧が覆った。

「本当にありがとう！」

最後に叫んだ言葉がフォカロルに届いたかは分からないが、最後に見た彼は微笑んでいたように見えた。

目の前の霧が消えていく。

徐々に景色がもとの墓場に戻ってきた　　と思うのだが、辺りは真っ暗だった。

「あれ？」

思わず素っ頓狂な声を出すと、暗闇からセイジの声がした。

「早かったな、マルコシアス……流石だ」

「ん？　何で真っ暗なの？」

しばらくすると目が慣れてきて、月明かりと星明かりで周囲の様子が見渡せた。

契約に行く直前と同じ、街はずれの墓地。すでにじい様の姿はなく、セイジ一人だけが暗闇に腰を落ち着けていた。

「あれ？　何で？　魔界に行く前は昼だったのに……」

「向こうとこちらでは時間の進み具合に差がある。向こうでどれだけ過ごしたかは知らないが、こちらではすでに丸一日以上たっている」

「ええっ?!」

びっくりした。

「作戦はこの夜が明けてすぐだ。急いでトロメオに帰るぞ、マルコシアス」

「あ、うん！」

その時僕は、掌にコインを強く握りしめている事に気付いた。最初と違ってコインが少し熱を帯びている気がする。

「フォカロルはどんな悪魔だった？」

「伝承どおりだった。最初は表情がなくて怖い人になって思ったんだけど、僕が『誰にも負けたくないから力が欲しい』って言ったら、

ちよつと笑つてた」

「……そうか。フォカロルが好むのは強い意志だと聞く。そのようなシンプルな願いで契約を欲したお前を気に入ったのだろう」

セイジはそう言つて笑つた。

「さあ、すぐに戻ろう」

コインをぎゅつと握りしめ、僕はこくりと頷いた。

早く戻らなくちゃ。父さんたちを助けるために。ミーナとの約束を守るために。

逃げたくない　そう思った瞬間、腰のベルトに差しであった羽根がまばゆい光を放った。迸はいつつた真紅の閃光はあたしを取り巻き、まるで生きているかのように全身を覆いつくした。

温かい。

まるで誰かの腕に抱かれているかのような。

「体が軽いわ」

背中に翼が生えたみたい。指の先どころか、細胞一つ一つまであたしの思い通りに動かせそうなくらいだ。

この感覚に覚えはなかったけれど、包んでいる光は泣きそうになるくらい懐かしい香りがした。全身の血が沸騰しそうなくらいに歓喜を叫んでいる。

ラスティミナ

「あたしを呼ぶのはだあれ？」

どこからか呼ぶ声がする。

耳に馴染むバリトン。とても優しく温かい響き。

何故だろう、全身の感覚が鋭敏になっている。

頬に触れる風も、遠くに響いていた剣戟も、靄がかかっていた草原の向こうまで見渡せる気がした。そして、五感とは別にあたしの何かに触れる感覚　あの夜に感じた悪魔の気配が、今ははっきりと感じ取れた。

目の前の天使と似ていて、でも正反対の気配が二つこちらに向かつて近づいて来る。

きっとマルコもセイジと同じように悪魔と契約したんだろう。

「早く来て、マルコ」

あたしに黙って勝手に、とか心配掛けて、とかいろいろと言いたい事はある。

でも、今はただ双子の相方に会いたかった。

「それまでにはあたしが倒してるかもね」

ゆっくりと腰の小太刀を抜く。

ここ何日かの戦闘と、先ほど連続して5人の騎士を倒したことで小太刀にもかなりの負担がかかっていた。何より殺生を避けて峯を使い過ぎたせいだろう、ほんの小さなものだがひびが入っていた。

ぎゅっとその柄を握り、アメシエエスの声を振り切った。

大きく両手を広げた美の天使ミカエルが銀髪セフィラの頭上で見守っている。

それに対するリッドは、ひどく小さく見えた。

銀のブレイドとリッドの剣が交差して、凄まじい金属音が波紋する。先ほどまで絶対に入れないと思っていたこの戦いに介入する隙が見えてきた。

リッドと共闘する場合、あたしは剣を使わない方がいいだろう。

小柄な体を生かして古武術で対応するのがベストだ。

天使の加護を受けたセフィラと、生身のリッドでは勝負は最初から見えているようなものだ。いかにリッドが強いと言っても相手は

『天使』なのだ。

天使

どくりと一つ、心臓が脈打った。

ああ、本当にあたしは天使に背くんだ。小さい頃からずっと身近だった、美しい天界に住まうという彼らに。人々を救い、導く白い翼を湛えた彼らに

「こんな日が来るなんて思ってもみなかったわ」

胸を裂かれそうな想いが駆け抜ける。

あたしは熱狂的な天使崇拝者じゃないけれど、それでも、天使が大好きだったから。

でも、それでも、信仰なんかより大切なものは時に存在すると思う。

「ごめんなさい」

その信仰があたしから父さんと母さん、それにマルコを奪うのだとしたら、あたしはもうそれを崇拜する事なんて出来ない。もし天使達があたしに攻撃するのなら、あたしだってみすみすやられてしまうわけにはいかない。

苦渋の決断だった。

それでもあたしにはまだ『悪魔』という味方がいたからここに立っていられる。もし、天使だけを信じて止まない人があたしの立場に立たされていたら、と思うと胸が苦しくなる。

セフィロト国はそんな事をしていたりはしないのかしら。

余計な詮索はそこでやめにして、あたしは戦場へと身を投じた。

真紅の光があたしを包み込んで、力を与えてくれていた。これはきつと『悪魔の加護』と呼んでいたものだろう。

体が軽い。目も耳も、いつも以上に機能していた。

そのまま、人にはあり得ない速度で地を駆け、勢いを利用して銀髪のエフィラに攻撃を仕掛けた。死角からの足刀、避けた所にさらに連続突きのコンビネーション。

ところがセフィラはそのすべてを避け、リッドとあたしからいったん距離を置いた。

リッドは息を整えながら隣のあたしに向かって叫ぶ。

「ミーナッ！ 逃げてって言ったじゃないか！」

すでに左腕には深い切り傷があるし、背も裂かれて赤いものが滲んでいた。

「そんなこと出来ないよ！」

そんなになるまであたしのことを守ろうとしてくれたヒトを置いて一人で逃げるなんて、そんな事はできない。リッドの援護として残っていたシランも既に地に伏している。彼は本当にたった一人で天使に立ち向かっていたのだ。

ふわふわとした淡い茶色の髪についた血を見て、胸が抉られるよ

うだった。

何より、すぐそこに父さんたちがいるはずなのだ。ここでチャンスを逃したら、もう二度と会えないかもしれない。

「大丈夫よ、リッド。だって今のあたしには悪魔がついているもの。本当の両親が残してくれたっていう悪魔の加護があたしを守ってくれる……だから、お願い。一緒に闘わせて」

この加護がいったい何時までもつのか分からなかったが、微かに感じた悪魔の気配がセイジとマルコのものなら、あと少しすれば到着するはずだ。

彼らがいれば、もしかすると。

「あと少し、あと少しでセイジとマルコが戻ってくるわ。あたしじや無理かもしれないけど、きっとあの二人が帰ってきたら父さんたちを助けられるわ」

そう言つと、リッドは少し躊躇つたようだった。

が、すぐにいつもの優しい笑顔に戻った。

「……仕方ないな。ミーナは、オレが守るって言ったもんね。無茶だけはしないでね!」

「うん!」

あたしはリッドと目配せして、再びセフィラに飛びかかっていった。

この人を倒さなかったら、きつとあたしたちに未来はない。

国に背くことを決めたあたしたちには、これから先もずっと、多くの追手と刺客が襲ってくるだろう。この人は、その中の一人にすぎないのだ。セフィラは全部で10人もいる。ただそのうちの、一人。

もし本気で父さんたちと暮らそうと思ったのなら、たった一人のこの銀髪のセフィラに負けるわけにはいかなかった。

「さあミーナ、集中して。オレが攪乱する。ミーナは不意を突いて攻撃を。とどめは……オレがやる」

そんな簡単な指示で、リッドは加護を持つあたしより先にセフィラへと剣を向けていた。

「生身でミカエルの加護を受けた僕に勝てると思っているの？」

低くてよく通るセフィラの声が、剣同士がぶつかり合う金属音の合間に聞こえる。

「昔はそんなバカもいたけど……返り討ちにしてやった」

天使に瓜二つの美しい顔。銀髪のセフィラは唇の端に余裕を見せて笑った。

リッドをこれ以上傷つけさせたりしない！

「はあああーっ！」

大きく気合いをかけ、いつもよりずっと軽い体で飛び上がる。

落下の勢いを利用して、踵落としをお見舞いするが……簡単に左手で弾かれてしまった。その間にもリッドの攻撃を右手の銀刃で真正面から受け止めている。

こいつは化け物？！ いや、天使なんだけど。

相手の体勢が崩れる事や、攻撃による隙を予測して攻撃するあたしにとって、全くダメージを受けないセフィラは非常に攻撃しづらい相手だった。

身体能力が尋常じゃない。リッドは、これを相手に一人で戦っていたわけ？！

あたしも負けじと悪魔の加護を受けた体で止まらぬ連続技を繰り出すが、それはことごとく避けられ、交わされ、受け止められていった。

「ああ……もう！」

悔しい。目の前に父さんたちがいるっていうのに、ほんの少しのこの距離が憎いわ！

そしてその間に立ち塞がっているセフィラも。

「そこを退きなさい！」

もう手加減なんてするもんですか。天使であろうと悪魔であろうと関係ないわ！ 父さんたちを助ける邪魔をするものなんて、全部排除してやる！

あたしは両手に意識を集中した。

地面にしっかりと足をつき、冷たい群青の瞳を睨みつける。

「ミーン！」

頭上に銀の刃が降ってきた。

リッドの切羽詰まった声。

が、あたしはその刃の軌道と降りてくるタイミングを完全に見切っていた。

意識を巡らせた両手を頭上に掲げる。

刃の煌めきが目の前にまで迫ってきた。

今だ！

あたしは、両手で包みこむようにして刃をとめた。刃で手を切られないよう、横から挟むようにして。ぱぁん、と乾いた音が響き渡った。

「折って、リッド！」

あたしの掌で刃が止まる。

父さんに一度聞いたきりの技だったけれど、あたしは何とか成功させることが出来た。刃で傷つかずに素手で剣を頭上に止める、た

ったひとつの方法だ。それは、刃に触れず横から抑え込むこと。よっぽどタイミングと力が合わない限り成功しない、一か八かの賭けだった。

それでも薄皮一枚、あたしの掌からは一筋の血が流れ出した。

「早く！」

リッドははつとしたように、空中に留められた刃へと剣を振り下ろす。

両手にすさまじい負荷がかかって、すぐに軽くなった。

甲高い金属音と共に、銀髪のセフィラの唯一の武器は真つ二つに折れていた。

武器を破壊したことで、あたしもリッドもいったんセフィラから距離を置いた。

両手はずきずき痛んだけれど、天使の加護を持つ相手に無茶な技で挑み、たったこれだけで済んだのは悪魔の加護があつたおかげだろう。

しかし、その加護も薄れかけていた。

だんだんと全身の高揚感がなくなっている。

やばい。加護を受けた状態でこの程度しか戦えないのに、加護が消えてしまったら、あたしはただの足手まとい。

「ああ、壊れちゃった」

銀髪のセフィラは、ぼんやりとその折れた刃を見つめ、残っていた半分も箆手から引き剥がした。

でもとにかく武器は破壊した　そう思ったのは一瞬だった。

「ミカエル、新しいの頂戴」

当たり前のようにさらりとそう言ったセフィラの手に、天使から放たれた銀の光が収束する。その光は徐々に形作り、先ほどと同じ刃がセフィラの右手に握られていた。

「……！」

驚いて足が止まったあたしに、刃が迫る。

もう一度受け止める余裕はなかった。

「ミーン！」

彼の声。優しい栗色の瞳をした、漆黒の騎士の声。

あたしの目の前が赤く染まった。あたしは全然痛くなかったのに。

R - 23 召喚

ああ、またあたしのせいで誰かが傷つくの。コレオプシスもダリアも、シランもみな地に伏した。

もう嫌なのに……！

あたしは倒れ伏したリツドの傍で崩れ落ちた。つんと鼻の奥が痛くなる。目頭が熱くなって、視界が滲んだ。

やっぱり、あたしじゃ無理なの？ 父さんを助けるどころか、あたしを守ると言ってくれたこの人を傷つけることしかできないの……？

銀髪のセフィラは笑っている。半分閉じた眠そうな瞼で、天使の加護を受けてきらきらと朝日に輝いた青みがかった銀髪を揺らしながら。

「バイバイ、レメゲトン」

いったいどうしたらいいの。

しかしその時、泣きそうになったあたしの元へ、どうしても聞きたくて、聞きたくて待ち望んでいた声がした。

「ミーナっ！」

振り向かなくなつて分かる。

だつて16年間も隣で聴き続けてきた声だつたんだから。

「マルコ！」

あたしの隣。

そこはあたしの双子の相方が収まる場所だつた。

「ごめんね、遅くなって」

「どこ行つてたのか、あとできつちり教えてもらうわよ！」

「うん、ごめん」

「じゃあ、今は代わりにマルコが新しく手に入れた力を見せて」
そう言つと、マルコは驚いた顔をしていた。

全く、隠していたつもりなのかしら？ マルコの事なら、あたし

は何だつて分かるっていうのに。

「気づいてたの？」

「もちろんよ」

完全に加護があたしの体内から消え去ってしまった。

ここはいったん退こう。深い傷を負ったリッドと共に、セイジとマルコ、二人の『レメゲトン』の戦いを見守る事にしよう。

そう決めて、あたしはリッドのマントを割き、今だ血が流れ続けているリッドの肩に押し当てた。

新たに二人が乱入したことで、銀髪のセフィラはまた無表情に戻ってしまった。

まだいたのか、とでも言いたげなその表情を意に介さず、あたしの双子の片割れはにこりと笑った。

「今度は負けないよ」

「へえ？ 加護のない僕にも勝てなかったのに、何を言うんだろうね」

セフィラがそう言ったが、マルコの笑顔は全然崩れなかった。

ああ、悪魔の気配がする。今のマルコは本当に、ずっと物語に聞いているレメゲトンのようだ。

「相手はティファレト、美の天使ミカエルを使役しているセフィラの一人だ。加護なしの戦闘力は他のセフィラから飛びぬけている。

気をつける、マルコシアス」

「うん」

セイジの言葉に素直に頷いたマルコ。

彼は大きく深呼吸して、はっきりと悪魔の名を呼んだ。

「フォカロル！」

「……！」

フォカロル それは海を司る半獣人型の悪魔に授けられた名だ。海を支配するだけでなく、風をも操るといふ彼は、非常に強い意志

を持つ者にしか契約を許さないという。

マルコの背後に第41番目の悪魔フォカロルの上半身が浮かび上がる。背には大きな鷲の翼を湛えている。褐色の肌は華奢な風体を完全にカバーし、その瘦躯を美しくひきたてていた。

「負けぬと豪語した敵は ミカエルか」

頭の中に直接響く、不思議な声。これは、フォカロルの声なの？

「うん、そうだよ。天使を召喚したのは初めて見たけど……僕は、この人に負けたくないんだ。力を貸してくれる？ フォカロル」

「古の血と同じ名を持つ 黄金獅子 お前が望むのなら」

「ありがとう」

マルコは頭上のフォカロルににこりと微笑んだ。

ああ、まだ信じられない。あのマルコが魔界から悪魔を召喚したなんて。それも、対等に話して加護を得ているなんて！

その時、あたしの手の下でリッドが身じろぎした。

「リッド、大丈夫？！」

うつすらと栗色の瞳が光を差す。

「ああ、ミーナ。無事？」

もう、何でそんな間抜けな声で聞くの！

「大丈夫よ、だってマルコとセイジが帰ってきたもの。あの二人なら、負けないわ」

「ああ、そうか。じゃあミーナ、君はオレなんかに構っていないでクラウドさんたちを助けに行くんだった」

「えっ？ でも……」

「オレは大丈夫。さあ、早く。君が最も望んでいたことだろう？」

あたしはぐつと唇を噛んで、ゆつくりと立ち上がる。

そして、くるりとリッドに背を向けて馬車へと向かって駆けだした。

R - 24 救出

セフィラはセイジとマルコが完全にひきつけている。

あたしはその場所を避け、馬車へと向かった。窓もないのつペリした鉄の棺桶にこれ以上父さんたちを閉じ込めておくなんて出来ない。

近寄って見ると、改めてその大きさに圧倒された。

固く頑丈な鉄壁はとても破れそうにない。扉にも頑丈そうな錠が下りていた。

「どうしたらいいの……？」

力技では開きそうにない鉄扉を前に、絶望があたしを包む。

「父さん……、母さん！」

あたしは両手で鉄扉を叩いた。とてもそんなことで破れはしなかったけれど、ここでただ呆然と立っていることもできなかった。この中に父さんたちがいる筈なのに、どうしてこんなにも遠いの？

「父さん、あたしはここよ！」

お願い、気づいて！

ここまで、来たのに。

故郷を離れ、逃げるのをやめて、協力者も手に入れてやっとここまで来たっていうのに。

鉄を叩いた拳は切れて血が流れ出した。それでもあたしはやめなかった。こうしていても絶対にこの扉は破れないって言う事は心の片隅で分かっていたけれど。

分かっている。これを破るには 悪魔の加護が必要だ。

腰のベルトに差した羽根は、もう一枚。一枚は先ほど使ってしまったから、残っているのは、根元が漆黒に染まった美しい羽根だけだった。

あたしはその羽根を両手で握りしめた。

「お願い、力を貸して。父さんを助けたいの」

反応はない。どうして？ さつきはちゃんと……

「あなたの力が必要なよ！ さつきみたいに、あたしに力を貸してよ！」

やばい、また視界が滲んできた。

唇をかみしめたけどもう遅い。あたしの頬には一筋、涙が伝っていた。

その時、背後からやさしい声がした。

「大丈夫だよ、ミーナ」

「リッド？！」

「君なら大丈夫。きっとクラウドさんを助けられるよ」

「動いちゃダメ！ まだ傷が……！」

最期の力でここまで歩いてきたのであろうリッドはその場に崩れ落ちた。未だ傷口からは血が流れているし、顔面は蒼白だ。黒の騎士服に刻まれた銀の刺繍が真っ赤に染まっていた。

「ごめんね、ミーナ。本当はこんな危険な目に遭わせるつもりはなかったんだ。オレが全然頼りないから……」

「そんな事ない！」

ここにいられるのはリッドがいたからだ。我儘を諭してくれたのも、必死で説得してくれたのも、仲間を連れてきてくれたのも、それに身を呈して守ってくれたのも……全部、リッドだ。

あたしとマルコ、それに父さんと母さんしかいなかった世界に、リッドはいとも容易く入り込んできた。

「ごめんね……もう、オレは何も出来そうにない。だから……ミーナ……」

「うん、安心して。あたしが父さんと母さんを助けるから」

仰向けに倒れたリッドがにこりと笑う。膝について覗き込んだあたしの頬を、温かい手が拭っていた。

でも、父さんと母さんを助ける前に、このとても優しい剣士を助けたい。

「お願い、力を貸して」

胸元に羽根を握りしめて、あたしは無意識に呟いていた。

魔界の王とも呼ばれた、悪魔の名を。

「リュシフェル」

刹那、羽根から光が漏れた。

ねえ、リッド。貴方は父さんたちを助けた後もあたしの傍にいてくれる？

すべて終わったら、聞いてみよう。

あたしは自分を銀の光に包まれた手でリッドの傷に触れた。そこに集中すると、銀色の力がリッドに流れ込んでいくのが分かる。これは、きつとリュシフェルの力。

すでに意識を途切れさせた彼の傷が完全に癒えたことを確認し、あたしはもう一度だけ鉄扉に向き直る。

そして、腰に差していた小太刀をすらりと抜いた。

「これまであたしと一緒に戦ってくれてありがとう。最後に、斬りたいものがあるの」

こつ、と額に峯を預けて、静かに呟いた。その時、確かに刀身が震えた。

父さんが初めてあたしに与えてくれた剣は、刀身が少し反った東方風の片刃剣だった。

今日まで本当にありがとう。

あたしは剣に銀色の力を集中させ、大きく振りかぶった。

一閃

目の前を銀の光が通り、黒く立ちはだかっていた鉄の扉を分断した。

真っ暗な中に、微かに動く影がある。

「……父さん！ 母さん！」

あたしが駆け寄るより先に、銀色の光が飛び出していった。

それは、細かい光の粒と化して暗闇を照らし出す。

「ラック？ まさかラックなの？」

母さんの声がした。

続いて、暗い鉄の扉の向こうから待ちに待った金髪が現れる。美しい翡翠の瞳は驚きに溢れていた。きつと、何故あたしがここにいるんだろ、なんて思っているんだろ。

「父さん！」

「……ラステイミナ？」

あたしは迷わずその胸に飛び込んだ。

懐かしい感じのする父さんの匂いをいっばいに吸い込んで、あたしは胸に顔を埋めた。

「ミーナ、今の光は……」

「父さんがくれた羽根の、悪魔の加護よ！ よかった、無事で。本当によかった……！」

「あら、だから拘束具が外れたのね」

母さんの声もした。あたしはいったん父さんを放して今度は母さんに抱きつく。

「会いたかった、父さんも母さんも……！」

あたしはもう一度涙を流した。

今度は、歓喜の涙を。

M - 21 決着

第41番目の悪魔フォカロルの加護は絶大だった。少しだけ経験した羽根の加護とは段違い。

手足が完全に僕の感覚についてきている。意思どおりに動かすことができる。まるで、僕の手足じゃないみたいに。意思どおり動かせるのに自分のものではないような、そんな不思議な感覚が僕を包み込んでいた。

セイジの背後にも悪魔の影がある。

緑色のフードを被った射手　破壊の悪魔と呼ばれたレラージュの姿だ。

「回り込め、マルコ！」

セイジの言葉が終わるか終わらないかのうちに、僕は銀髪セフィラの背後に回る。

天使ミカエルの6枚の翼が閃いて、群青の瞳がこちらに向く。でも、見える。攻撃の軌道が！

それを間一髪で避けながら、手にした剣を逆手に持って、回転力を加えた強烈な一太刀、足元を狙って叩き込む　と、思ったが、セフィラも同じように見切ってかわした。

ああ、この人も目がいいんだ。

直感的にそう気づいた。

「セイジ！」

いったん敵との距離を置き、セイジの傍に寄る。

セフィラは僕と同じように目がよくて、攻撃を見ながら避けていくことを伝えると、セイジはにやりと笑った。

「そうか。お前と同じなら、弱点が分かるな？」

僕はこくりと頷く。

攻撃を見て避ける僕の最大の弱点は、『見えない攻撃』。

一人では無理でも、セイジと二人なら死角を作り出すことができる。

る。

「あいつは攻撃を左に避ける癖がある。お前は右、俺は左に回る。天使がいるせいで狙いにくいと思うが、足元よりも上を狙ってくれ」
「分かった」

そんな簡単な打ち合わせ。

それだけで通じるほど、セイジの腕は段違いだった。この辺りでは珍しい両手剣の使い手で、それも力と技の両方を兼ね備えた素晴らしい剣士だ。持って生まれた体格もあつてのことだろうが、これほどの剣技を手に入れるまでは相当な鍛錬があつたはずだ。

剣を振り上げ、飛びかかろうとした時、頭上の悪魔が声を発した。

「我の力を授くか？ 黄金獅子」

「力？ もう借りてるのに？」

「侮るな 我が力の根源は 風にあり 大気の流れを司る 我はフオカロール」

そうだ、フオカロールは海の悪魔だけれど、同時に風の使い手でもあつたのだ。

「ううん、いいよ。僕自身の力で、出来るところまでやってみるから！」

叫び返すと、フオカロールは嬉しそうに笑った。

それを確認してから、僕はもう一度セフィラに飛びかかっていった。

普通に攻撃してもだめだ。

そう、僕が苦手な攻撃を考えて！

僕の苦手なもの 素早いカウンター攻撃。準備が整わないうちだと避けられないから。苦し紛れのがむしゃら攻撃。先を呼んでいゝるわけでない僕にとって、怒涛の攻撃は少しキツイ。それから……フェイントを混ぜた、多彩な攻撃。

つい先ほど見たセイジの剣を思い出しながら見よう見まね、両手で剣を握ってみる。

こうすると、ちょっとはセイジの強さに近づけそうじゃない？

「行くぞ！」

僕の方は罔。わざと大きな声で注意を引き、大きく剣を振りかぶった。

両手で力いっぱい剣を振り下ろし、避けられて反撃された攻撃は剣を跳ね上げて弾き飛ばす。すぐ剣を右手に持ち替えて横に薙ぎ、そのままブーツで強力な蹴りを放つ。

セフィラは余裕でよけているけれど、攻撃の手は緩めない。

さらに上下左右、縦横無尽な攻撃で追隨する。

「やあああーっ！」

特別気合いを入れて放った一撃は、実は罔。

力一杯の下段と見せかけて、それはフェイント。

本命は、剣の柄で狙った上段への殴打だ！

「くっ……」

初めて苦しそうな顔でその攻撃をぎりぎり避けたセフィラの背後から、セイジの剣が迫る。

完璧な死角。

さすがはセイジだ。隙を一瞬だつて見逃さなかった。

「終わりだ」

そんな台詞と共に、セイジの剣が銀髪セフィラの腹部を打ち抜いた。

息を整えて剣を鞘に収めた。

目の前には青みがかった銀髪が土の地面に零れていた。気を失ってはいるが、血を流している気配はなかった。

「ねえ、セイジ。その剣は片刃なの？」

見た目は明らかに諸刃に見える長剣を指して問うと、セイジはにやりと笑った。

「ああ、刃が付いているように見えるが実際は片側しか切れない。

殺生と不殺生を使い分けよ、というのが剣をくれた人の言葉だ」

「そう。いい言葉だね」

「……それはお前の親父だぞ？」

「えっ?!」

驚いた顔を見ると、セイジはぽん、と僕の頭に手を置いた。

「よくやった、マルコシアス」

僕は嬉しくて笑った。

ふと見ると、父さんと母さんを連れたミーナがこちらに向かって駆けて来るところだった。

M - 2 2 父親

その後は、実はちよつと大変だった。指令を出すはずのリッドが気を失ったままで、他にも動けないような怪我人が3人もいたのだ。用意してあつた馬車は4人乗りで、御者を合わせても乗れるのは5人までだった。縛り上げた騎士たちは天使と悪魔の凄まじい闘いに震えあがつていたからそのままにしたけれど。

とにかく3人の怪我人を優先、以前から決めてあつたらしい役割分担に合わせてアメシエラという人が手綱を取り、残りの席に母さんが乗る事になった。

助け出されたばかりの父さんは、自分が入れられていた監獄を引く馬を外して跨った。

僕とミーナ、セイジも同じようにして馬を手に入れようとしたが、馬は残り2頭。体のサイズの関係で僕とミーナは同乗する事になった。

未だ開拓がほとんど進んでいない南の高地に向かって全員が全力で駆けた。

合流地点に着いた時には、日がとつぷりと暮れていた。

この先に待つのは未開の山地だ。グリモワール王国時代にも切り開かれなかったこの場所は、グライアル平原と隣国アールとを隔てている。この脈々と連なる山地のせいで、グリモワール王国は隣国アールとはほとんど交友関係がなかったらしい。何しろ、アール王国へ行くには天敵であるセフィロト国を越えるしか手段がなかったのだから。

もちろん百キロ以上も続く険しい山の中に道と呼ばれるものがない。その代わり、高山に住む珍しい動植物が迎えてくれる。

その南端にあるサウゼストは、別名、最果ての街と呼ばれていた。僕らが休んだのはその街だ。さすがにこの最果てに、聖騎士団の

姿はなかった。

久しぶりに宿をとり、ベッドに倒れ込んだ僕はもう限界だった。父さんとも母さんともミーナとも、それにセイジやリッドともたくさん話したい事はあったけれど、幾許もなく眠りについてしまった。それは、どうやらメンバー全員に共通していたようだ。

次の日は日が昇りきるまで誰も起きず、昼ごろになってようやく最初に目を覚ました父さんが、全員を起こしにかかったくらいだ。

眠い目をこすりながら、さらに馬を進めた。

平原は完全に抜け、すでに山岳地帯に入っている。

「よく眠れたかい、マルコ」

「うん。でもまだ眠いや」

隣を歩く父さんとそんな会話を交わしながら、僕らは旅路を急いだ。セイジは一足先に立出た母さんとリッドが乗る馬車を追って先に行ってしまった。

目的地がいったいどこなのか分からなかったが、父さんも母さんもミーナもいるなら別にどこでもよかった。

それに、僕には既に悪魔のコインがある。

第41番目の悪魔、フォカロール　僕に力を貸してくれると約束した、海の悪魔。

「マルコシアス、セイジから悪魔と契約したと聞いたが、それは本当か？」

「うん、本当だよ」

父さんの問いに、何の臆面もなく答えた。

「本当よ、父さん。マルコったらあたしにも言わないで勝手に決めるんだから！　本当に、信じられないわ」

ミーナはまだ僕が勝手に契約したことを怒っているみたいだ。さあ、どうやって機嫌を直してもらおうか？

そんな事を考えていると、父さんは嬉しそうな悲しそうな、複雑な顔をした。

「やはり……それは、血なのかな」

しみじみと呟いた父さんの翡翠は、遥か遠くを見つめていた。

「セイジが謝っていたよ。勝手な判断でいろいろと喋ってしまった事と、マルコとミーナを完全に巻き込んでしまった事をね」

「セイジは悪くないよ！ 僕が聞いたんだ。それに、悪魔と契約したのも僕自身の意志だった」

「ああ、そうだね。彼には感謝してもし足りないくらいだ」

父さんは柔らかく微笑んだ。

「それに、アキレアにもね。彼は本当に、二人の恩人だ」

「うん」

僕はにこりと笑ったが、ミーナはおずおずと口を開いた。

「……ねえ、父さん」

「何かな？」

「リッドは……アキレアは、父さんたちを救出した後でも、ずっとあたしの傍にいてくれるかしら？」

ミーナの言葉を聞いて、父さんは目を丸くした。

それこそ酷く複雑そうな顔をして額に手を当てる。

「いや、まあ、その……頼んだら断らないと思うよ、彼は」

「本当に？」

ミーナの顔がぱつと輝く。反対に、父さんはなぜかショックを受けたようだった。

僕がこの時の二人の心情を知るのは、もう少し後の話になる。今は、少しだけ僕にとって早すぎたみたいだったから。

M - 23 主従

急な山の斜面をいくつも登り、そして何度も下った。日は昇り、そして落ち、山に入ってから2日目の昼。

僕らはようやく目的の場所にたどり着いた。

ここまで道らしい道なんて一つもなかった。案内がなければ辿り着く事は不可能だろう。

そこは、山の中をいくらか切り開いて作られた石造りの頑丈な家が建っていた。小屋というには大き過ぎ、さらにこの山の中にふさわしくないほどに立派なその家は、明らかに何人もの人が暮らしている気配があった。

「さあ、行こうか。マルコ、ミーナ。君たちに会いたがっている人がいるんだ」

「誰？」

「会ってからの楽しみだ」

父さんはそう言って笑うと、僕とミーナを促してその家に足を踏み入れた。

外見以上に立派な内装が僕らを出迎えてくれた。真っ赤な絨毯、狭くはあるが整えられた真っ直ぐな廊下。らせん階段が玄関のすぐそばに伸びている。廊下の突き当りには魔界の王リュシフェルを象ったステンドグラスが煌めいていた。

面喰った僕らを連れて、父さんは二階へと上がる。

そして、漆黒の有翼獅子をモチーフにした紋章の付けられた分厚い木の扉をノックした。

「はい、どうぞ」

高くも低くもない、年齢も非常に分かりづらい声がして、父さんは重そうな扉を開いた。

「失礼します、殿下」

「やめてください、クラウド殿。もうその名はとうに捨てました」

「ですが、その名を再び戴く日はそう遠いものではありません。そのために私たちがいるのですから」

父さんに続いて部屋に足を踏み入れた僕らが出会ったのは、金のブロンドに灰色の瞳を持つ、30代くらいの男性だった。

ともすれば女性に見られそうな線の細いその人は、柔らかな雰囲気湛えて僕らに微笑みかけた。

「初めまして、マルコシアス、ラストイミナ」

「え、えーと……はじめまして」

僕は思わずぺこりと頭を下げた。どうしても、そうしなくちゃいけない気がしたからだ。

この人は一体、何者だろう？

ミーナも同じようにして頭を下げると。

「よろしく、ラストイミナ」

その人は優雅な仕草でミーナの手を取ると、その手の甲に軽く口付けた。

ミーナがびっくりしてみるみる頬が赤くなっていくのが分かった。でも確かこれは、僕の記憶が確かなら、貴族の挨拶だったような気がする。

じゃあこの人は、父さんたちと同じように高位の貴族？

でも、確かさつき父さんは『殿下』って呼んだ。

「ミーナ、マルコ。こちらはグリモワール王国、第一王位継承者のサン＝ミュレク＝グリモワール殿下だ。ぜひともお前たちに会いたいとおっしゃってくださいました」

「本当にそっくりですね、彼らに」

「……年をとることに似てきまして、今では瓜二つです」

父さんはにこにこ受け答えをしていたけれど、僕はその名を聞いて硬直した。

サン＝ミュレク＝グリモワールだって？！

その名が本当なら、この人は元グリモワールの王様の子供ってことになる。

「会いたいと願ったのは他でもない、君たちに頼みがあつたからです」

元王子の灰色の瞳は、優しい中にも厳しさと強さを持つ、不思議な光を包有していた。一度見ると、目を離せなくなってしまう。

これが、王族の持つカリスマというやつなんだろうか。

隣のミーナも同じように、ぼんやりと彼の瞳を見つめていた。

「もし、よろしければ 革命軍に、参加しませんか？」

ああ、息がとまりそうだな。

僕たちはこの数日間、信じられないくらいに多くの事を経験した。そして、以前にはあることすら知らなかったような世界を知ってしまった。

それは、『自分の居場所は自分で勝ち取る』というミーナの理念に少しも反しない、でも最も多くの困難と危険が横たわっている道でもある。逃げる、迎撃する……この二つ以外の最も有効な選択肢。僕は逃げるつもりなんてない。だって、もう負けたくないと思つたから。それに、迎撃し続けるくらいなら……自分から、攻め込んでやる。

いったい何時からこんな過激な性格になったのかは分からないが、じつとしているよりも自分の力と、悪魔の能力を信じて前に進みたかった。何より、まだ使った事のないフォカロールの特殊能力を見てみたい、他のセフィラに会ってみたいという無謀な願いも芽生えていた。

僕はどうかやらかに目覚めてしまったようだ。

「はい、喜んで」

僕が返事をする前に、隣のミーナはそう言つて膝を折つた。主君に対する従属の証。

一瞬父さんの方を見ると、にこりと微笑んでくれた。さあ、自分の好きにしないさい、と。

ありがとう、父さん。

心の中で感謝してから、僕も床に片膝をついた。

「御意」

生まれて初めて使う言葉。生まれて初めて誓う忠誠。
それは、とても心地よいものだった。

その晩、なかなか寝付けなかった僕はそつとベッドを抜け出した。外に出ると満天の星空が視界を埋め尽くす。初めて悪魔の加護を受けた時に見た星空と同じだ。自分が本当にここに居るのか不安になるくらいの解放感。

それを満喫したくて、僕は家の屋根に上った。石造りの家は案外とつかかりが多くて、すぐに上る事が出来た。

登り終えた僕の耳に、意外な声がかかる。

「マルコ」

双子の相方だった。

彼女も眠れなかったんだろうか、髪を下ろした状態で屋根の上に座り込んでいた。

「やっぱりここに來たのね。待ってたのよ?」

「えっ?」

驚いていると、ミーナは僕の隣に移動してきて、腰を下ろした。シャンプーの匂いがふわりと尾行をくすぐって、なんだか落ち着かなかった。今日のミーナは、なんだかいつもと違うようだ。

「大変な事になっちゃったわね」

「……うん、そうだね」

あの日、剣術大会でミーナが優勝してから、怒涛のような日々だった。

毎日が驚きと戦闘の連続で、とてもこんなにゆっくりしている余裕はなかったから。

「後悔してない? ……しないわよね、マルコだもの」

「ミーナはしてるの?」

「してないわ。でもこれから先、この決断を絶対に後悔しない、なんて言いきれない」

ミーナの紫水晶アメジストは星空を映していた。

「でも、マルコが一緒なら大丈夫よ。あたしは何度くじけたって立ち直れるわ。絶対に前を向いて歩いて行けるって信じてる」

「うん、僕もだよ。ミーナと一緒になら、大丈夫だ」

嬉しくて僕は笑った。

生まれた時から一緒に、離れる事なんて考えた事もない。隣にいるのが当たり前、目を閉じてでも思い出せる顔、声。

どこにいたって駆けつけるよ。だってミーナの涙は見たくない。

「あたしたちの居場所はあたしたちが作るの。ねえ、そうでしょう？」

「うん」

「それだけじゃないわ。今度の事であたし、思ったの。本当に天使は誰にでも平等に施しを与えているのかしら、って」

それは僕も思った事だった。

悪魔を信じたじい様。父さんたち、それに悪魔を使うセイジ。

それだけじゃない、悪魔を慕っている人々はその比にならないくらいに多いはずだ。だって、天使の国に生まれ育った僕でさえ、こんなにも悪魔が大好きなんだから。

「父さんたちの時代は、当たり前前に悪魔を信仰していたわ。それを、突然に『変えなさい』って言われて、はいはいと天使に乗り換えられるなんて嘘だと思わない？ もちろんあたしは天使も悪魔も好きだけれど、もしどっちでもない新しい信仰に移りなさい！ って言われたら、絶対に嫌よ」

ミーナの言う通りだった。

きっと、もともとグリモワール王国があつたこの土地には、まだまだこっそりと悪魔を信仰している人が多いはずだ。

「もう戦争が終わってから18年　悪魔崇拜を禁止するという国の制度自体を変えようという働きがなかったはずはない。それでも変わっていないってことは、国が耳を貸していないってことよね」

「うん、きっとそうだろうね」

隣に座ったミーナの横顔は、やっぱり凜と輝いていた。

うん、ミーナにはこの強気な笑顔が一番似合うと思うよ！

「よし、それじゃ、明日はリッドに……」

「リッドがどうかしたの？」

きよとん、として聞くと、ミーナははっとしてぶんぶんと首を振った。

「あ、いいの！ いいのよ！ 気にしないでっ」

慌ててそう言うと、ミーナはぱつと立ちあがった。

「がんばりましょう、マルコ。父さんたちと一緒に」

「うん」

にこりと笑った紫水晶に、アメジスト悲しみの色はなかった。

よかった。ミーナが笑っている。それだけで、こんなにも嬉しい。今はそれだけでいいや。この先僕らの未来に横たわるものが酷く困難なものだったとしても。

僕は満たされた気持ちで星空を見上げた。

まだ見ぬ本当の両親が、僕らに残そうとしたもの。

それは羽根じゃなく、名前でもなく、『未来』という名の平穏だった。僕らの事を愛して愛してやまなかった彼らは、僕たちに生きるべき場所を与えてくれたのだ。

父さんと母さんが、本当の両親がくれたものはこんなにも大きい。そして、それは大きな大きな愛の証。

僕らは、たくさんの人の愛の中に生きている。

それに気付いた時、僕らは一步を踏み出した。

まだ見ぬ明日へ。でも、きっと希望に満ちあふれている未来へと向かって。

- - - おわり - - -

オレは、非常に困惑していた。

何しろ目の前には20歳以上年下の少女、それも大恩人の娘。

その子がオレに向かって、ある意味での告白をしたのだから。

「えーと、ミーナ？」

「返事は？ リッド、『はい』か『いいえ』で答えなさい！」

いつもの調子ではつきりした返事を求める彼女を誤魔化す術なんてないだろう。

何より、オレはこの顔に弱い。オレがまだ十代だった頃、本気で恋をした女性とおんなじ顔をしたこの娘に逆らえるはずもないのだ。

「もう一度言っわよ？」

ああ、この紫水晶はオレが大好きだった大恩人の店長と同じ色なんだ。
アメジスト

もうやめてくれ その目で真っ直ぐにオレを見るのは！

「これからもずっと、あたしの傍にいて欲しいの。父さんや母さんは助けたけど……またこれからもきつと、いいえ、これまで以上に危険な場所に行くでしょうね」

かといってオレがこの娘に抱くのは保護者のような感情だった。

「だから、あの約束を継続してくれる？」

あの約束。

そう、オレがミーナを守るって言った、あの約束。

本気なのかな？ その言葉の意味、分かって言ってるのかな？

オレは大きなため息をついた。仕方ない、きつと時間がたてばこの子だってちゃんとした相手を見つけるだろう。それまでは、オレがその代わりをしてもいい。

「……分かったよ、ミーナ」

その途端、少女はひどく嬉しそうに笑った。

図らずもその笑顔にときりとした自分が信じられない。

「ありがとう、リッド！」

今ではもう呼ぶ者も少なくなってしまった本名を無邪気に呼ぶ彼女を突っぱねていられるのはいつたい何時までだろうか。

そのうちに抑えきれなくなってしまう自分を予感しながら、オレは艶やかな黒髪に手を置いた。

さあ、クラウドさんにはなんて言おうか。

いや、きっと彼の事だから全部お見通しなんだろう。大事に育てた娘の動向も、オレの感情の変化にだって。

重い気持ちを抱えて見上げた空は、この上ないくらいに青く澄んでいて眩しかった。

向こうから駆けてくる彼女の双子の片割れに手を振りながら、オレは自分の年齢をバラしたら今のうちにミーナにあきらめてもらえるんじゃないだろうかと本気で考え始めていた。

手遅れに、なる前に。

あとがきのもの

本日をもちまして、「STRAY GEMINI」めでたく完結です。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。思った以上に多くの人に読んでいただけたようで、非常にうれしく思います。もしよろしければ、感想などいただけると小躍りして喜びます。

また機会があればどこかでお会いしましょう。
本当にありがとうございました！

（以下、作者の独り言的なあとがきです）

実はこの話、別口で連載している「LOST COIN」というシリーズと時系列は違いますが、同じ世界観で書きました。

シリーズの方も読んでいる人は、いろいろ思うところもあったかもしれません。

本編「LOST COIN」シリーズの方は、ミーナとマルコの本物の両親が主人公です。もちろん、クラウドさんはじめリッドも

セイジも、最後ちょっとだけ出た元王子も（笑）出てきます。

あ、セイジだけ本名じゃないですね。本名は「ライディーン・シン」と言います。別に隠していたわけじゃなくて、出す機会を逃しただけです（汗）

コアに読みこみたいって言う人は、さらに「コレオプシス」「ルーク」なんかも探してみると面白いかも。

これからだ！　ってところで話がおしまいなのは、この独立戦争を本編でやっちまおうと思っているからです。すでにシリーズは一度完結したのですが、ラストが気に喰わないという理由です。に続編の構想もだいたい決まっています。

「LOST COIN」シリーズは最初の1～8章が『滅亡編』（完結）、閑話（9・10章）をはさんで『放浪編』そして最後の『建国編』の3部に分かれています。まだWEBに載せていませんが、すでに放浪編は書き始めています。

いやあ、こんなにも長い話にする予定がなかったので、最後まで書ききれるか不安です……（――）

できるところまでやってみよう！

と、いうわけで、どこかで見かけたらまたよろしくお願いします。

それでは！

「また、あした」(ブログ) <http://d.hatena.ne.jp/lostcoin/>

「ひとつだけ」(HP) <http://sky.geocities.jp/lostcoin|ht/>

08622 早村友裕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3868d/>

STRAY GEMINI

2010年10月8日13時37分発行